春宮御給

國卿、〇宮内大輔道綱益女、　寛平四(二カ)三廿一内舎人、同七二十一陸奥權少掾、春宮御給、同八正七從五下、春宮御給、二月十五日尾張權守、同九七五右少將、同十正廿九兼相模權介、昌泰三二廿備前守、五月十五日復任、同四正七從五上、廿六日左少將、延喜三正七正五位下、同四二廿六兼近江介、同六正廿一從四下、二月十五日右權中將、同八正十二(三イ)兼備前(中介イ)守、同九年四月九日任參議、右中將如元、同十年正七從四上、同十二年三月廿七日兼近江權守、同十三年正廿八任中納言、同日敍從三位、超六人、四月十五日兼左衞門督、同十九年正月廿八日兼按察使、九月十三日兼右近大將、同廿年正月卅日任大納言、右大將、按察使等如元、同廿一年正月七日正三位、同廿三年四月廿九日兼東宮傅、延長二年正月廿二日任右大臣、右大將、皇太子傅等如元、同三年六月十八日停傅、同四年正月七日從二位、同八年十二月十七日轉左大將、

〔尊卑分脈〕藤氏高藤孫

世系

三條右大臣ト號ス

高藤

定方右大臣、左大將、從二位、東傅(宮脱カ)、贈從一位、承平二八四薨、五十七、號三條右大臣、母同定國、〇宮内大輔宮道綱益女、從三列子、

佳節甲斐守、從五下、母中納言山蔭女、

理實貫鮒宮内少輔、從五下、母三品是貞親王女、

朝忠五識〇事蹟略ス、康保三年十二月二日ノ條ニ收ム、

朝成頭〇事蹟略ス、天延二年四月五日ノ條ニ收ム、

朝頼識少納言、左少將、左大辨、左兵衞督、彈正弼、右京督、左馬頭、從四上、勘長官、母同佳節、

仁善子醍醐天皇女御、號三條御息所、後配遇清(實賴)愼公、母、

女子中務卿代明親王室、母、

女子中納言兼輔卿室、母、

女子平大貳隨時妻、繼時母、母、

女子同隨時嫁、母、

女子播磨守章(尹イ)文室永賴母、母、

女子蛙(經イ)子、母、

女子大后、御匣更衣、欣子、

女子左大臣師尹室、母、

女子日向守橘曲(典イ)輔妻、母、

女子刑部少輔雅正妻、爲賴母、或朝正室、母、

賀茂祭使ヲ勤ム

女子　大舎人頭源爲善妻、雅成母、
女子　左兵衛少尉康正妻、石見守藤原扶正母、
女子　母、

〔大和物語〕上　三條（定方）の右のおとゝ、中將にいますかりける時、祭の使にさゝれて、いてたち給けり、かよひ給ける女の、たえて久しくなりにけるに、かゝる事になんいてたつ、あふきもたるへかりけるを、さはかしうてなむわすれにける、ひとつ給へといひやり給へりけり、よしある女なりけれは、よくてをこせてんと思ひ給ひけるに、いろなともいときよらなるあふきの、香なともいとかうはしうてをこせたり、引かへしたるうらのはしのかたにかきたりける、

女ト贈答ス

ゆゝしとていむとも今はかひもあらしうきをはこれに思ひよせてん（下句ヲ憂なは風につけて止みなんニ作ル、）○拾遺和歌集

とあるを見て、いとあはれとおほして、かへし、

ゆゝしとていみける物を我爲になしといはぬはたかつらきなる

賀茂臨時祭ニ醍醐天皇ノ御

〔後撰和歌集〕十六雜歌二　延喜の御時、賀茂の臨時の祭の日、御前にて、さかつきとりて、

前ニ候ス

かくてのみやむへき物か千早ふる賀茂の社の萬代をみむ　三條右大臣

宇多法皇ト定方

〔新千載和歌集〕十七雜歌中　亭（宇多）子院おりゐさせ給へりける頃、詠み侍りける、　三條右大臣

變りなむ世には爭てか住まふへき思ひやれ共ゆかぬ心を

相撲還饗ノ日敦慶親王ニ挿頭ヲ上ル

〔後撰和歌集〕六秋歌中　すまひのかへりあるしの暮れつかた、女郎花を折りて、敦慶の親王のかさしにさすとて、　三條右大臣

女郎花花の名ならぬ物ならは何かは君かゝさしにもせむ

敦慶親王家ニテ樂ヲ奏ス

〔新勅撰和歌集〕四秋歌上　式部卿敦慶のみこの家に、人々まうてきて、遊ひなむとし侍りけるに、女郎花をかさして、よみ侍りける、　三條右大臣

をみなへし折る手にかゝる白露は昔のけふにあらぬ涙か

藤原兼輔ト交野ニ狩ス

〔權中納言兼輔卿集〕三條の右（定方）大臣殿の、またわかくおはせし時、かた野に狩し給ひし時、おひてまうてゝ、

君かゆくかた野はるかに聞しかとゑたへはきぬる物にそ有ける

兼輔ト花見ニ赴ク

〔玉葉和歌集〕二春歌下　三條右大臣に伴ひて、花見侍りけるに、いそく事ありて、よみ侍りける、　中納言兼輔

さくら花匂ふを見つゝ歸るには袂つ心なき物にそ有ける

宮女ニ通ズ

返し　三條右大臣

立かへり花をそわれは恨みつる人の心をとめぬと思へは

〔後撰和歌集〕四夏歌　三條の右大臣、少將に侍りける時、忍ひに通ふ所侍りけるを、上のをのことも五六人はかり、五月の長雨少しやみて、月朧なりけるに、酒たうへむとておし入りて侍りけるを、少將はかれかたにて侍らさりけれは、立ちやすらひて、あるしいたせなと戯れ侍りけれは、　あるしの女

宮女ノ歌

五月雨に詠め暮せる月なれはさやかに見えす雲隱れつゝ

女ニ遣ス

〔後撰和歌集〕十一戀歌三　女のもとにつかはしける、　三條右大臣

名臣

名にしおはゝ逢坂山のさね蔓人に袂られてくる由もかな

〔二中歴〕十三名人歴　名臣　三條右大臣、定方、六十、承平六、

歌什

管絃人

兄定國ト共ニ才卿ト稱セラル

勸修寺ニ一堂ヲ建立ス

子朝成朝忠之ヲ成ス

定方ノ忌日ニ敦實親王法華八講會ヲ行ハル

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　三條右大臣藤公男、承平二八四薨、五十七、贈從一位定方公、内大臣藤原高

古今集秋上、二、四位、　後撰集春下、二、秋中、二、戀三、三、雜二、二、哀三、右大臣、三條、　新勅撰集二、秋上、　續後撰集賀、二、　續古今集哀、二、　玉葉集二、春下、　新千載集二、雜中、　新續古今集二、春下、

〔二中歴〕十三能歴　管絃人　三條右大臣定方、

〔勸修寺緣起〕○略上　高藤の公は、朝家に又なき權臣にて、内大臣になり給ひにけり、○略中　二人のをのこ君と申は、泉の大將定國、三條右大臣定方これ也、いつれも才卿にて、天下におもき人にてなんおはしける、○略中　彌益の大領は、四品に敍して、宮内大輔にそなりにける、その正しき跡は、いまの二所大明神と申是なり、宮道の明神とも申とかや、○略中　其跡伽藍となりにけれは、延喜の聖代の勅願なるうへに、三條右大臣一堂を建立せられたりける、威風すてになりて、ほとなくかくれ給にけれは、朝成、朝忠なと申御子たち、佛閣の莊嚴をそへて、八月ついたちより、おなしき四日、丞相の御忌日にいたるまて、南北の碩才をまねきて、一乘八座の講師をはしめ行はる、式部卿敦實の親王と申は、寛平法皇の御子におはします、高藤の大臣には外孫なり、三條右大臣の御むこにてそおはしける、この御子の申をこなひ給けると

殿上ノ儀ニ模セラルなげうり

かや、八月四日かほとは、殿上の儀式を、勸修寺にうつされて、なけうりなと申事までも、此寺にわたされて、いまに至までたえす、むかしは殿上侍臣、當家他家おほくの寺に入て、法會の儀をたすけられけり、君もこの家よりいてまし〳〵て、おもくせられけるゆへにや、天下にためしなき事なるへし、今にいたるまて、氏の長者をはしめて、しかるへき上達部殿上人、山川をしのきて、華軒をうなかすこと、としをへてたえす、都のうちにても勸修寺入

勸修寺入

子孫顯要ニ列ス

とて、高きもいやしきも、又なき見物にそし侍なる、○中略おほよそ天下の要領在(ミカ)して、七辨にくはゝりて、夕郎貫首をへ、八座につらなりて、朝議の開口にあつかる人、おほくは此家よりそ出給なる、龍作特進はさたまれる前途なり、亞相の大位にいたり給人も、代々にきこえ侍り、大織冠の御すゑ、人臣の中にはひこりたまへるうちに、この高藤のおとゝの、御なかれひさしく、朝家の要臣たえたまはぬ事をおもふに、曩祖の忠貞のならひなかりしにより、て、家門の餘慶も、人にすくれたるなるへし、

勸修寺八講ノ濫觴

〔勸修寺文書〕二十一　○山城　勸修寺古事

康和四年八月三日記云、左大辨(爲記)筑前々吏敦憲語云、御八講者、是三條右大臣御遠忌也、八月四日薨、平生日建立堂舍、其功未畢、早以薨逝、一周忌之內、三人子息、朝賴、朝成、朝忠等卿、日夜營々、不作新佛、奉迎高野古佛安置之、始此講席也、又故僧正被語云、大臣平生之昔、厭極寒熱、此八月九月之天、動延講席、因之沒後、擬彼講演、卽行之者、西院卽是御寺也、氏人本著束帶、左大辨說孝卿、爲長者之日、改著布袴云々、勸修寺根元、內大臣高一(能)、少年之日、臂鷹出野、忽逢暴雨、馳入蓬屋、是則當郡大領最益宅也、日暮猶雨、向夜之間、備珍膳獻之、大領以少女爲陪膳、大臣不厭食事了、被招少女、今夜搆(構カ)通漸及遲明、御共人々尋來濟々、大臣棄置所帶御劔出御、數月之後、又被來訪、置劔如初、敢不依違、少女有娠、遂生女子(風子)、大臣迎少女遂爲妻、以彼女子入寬平聖主、女子爲女御、誕生延喜(醍醐)明王、女御早世、贈位、延木御在位之日、最益抽補宮內大輔、其女列子敍三位、宮道明神、彼最益氏神寵神云々、

高野ノ古佛ヲ移ス

勸修寺家ノ長者勸修寺ノ根元

宮道明神ハ彌益ノ氏神ナリ

自藏人所遣瓜、是式部卿敦實王(親脫カ)申請朱雀(字)院也、御八講多々見、實料三十駄分遣云々、彼親王大臣甥也、

邸宅

〔拾芥抄〕中末　諸名所部二十

大西殿　三條坊門北、萬里小路西、定方大臣家、

○藤原定方、宇多上皇ノ女郎花合ニ歌ヲ上ルコト、昌泰元年是秋ノ條ニ、藤花宴ニ歌ヲ上ルコト、延喜二年三月二十日ノ條ニ、殘菊宴ニ歌ヲ

上ルコト、同十七年閏十月五日ノ條ニ、定方ノ四十賀ヲ行ハセラルヽコト、同年十二月十六日ノ條ニ、敦慶親王薨去ノ時、藤原兼輔ト歌ヲ贈答スルコト、延長八年二月二十八日ノ條ニ見ユ、

定方薨去ニ依リ講宴ヲ停ムル貞觀十三年ノ例

明經博士等參入ス

八日、己巳釋奠、

〔貞信公記抄〕（頭書）「釋奠依宰相一人參止講宴」八月八日釋奠、外記公望申云、右大辨（時望）一人參、不能行事云々、仰云、貞觀十三年八月釋奠、依去月廿八日勝子內親王薨、停止講說宴飲、依彼例可停、今日事、是日記文也、不得具記、

〔西宮記〕八月釋奠　承平二年八月九日戊子（午）記、殿（忠平）仰云、三代實錄貞觀十三年八月三日、丁丑、釋奠、停講論宴飲、以勝子內親王薨後、輟朝三日之限在此日也、四日、戊寅、明經博士等參內裏、不召御前、賜祿罷云々、但此事與外記々頗以相違、須召他記等見者也、（頭書）先帝御時、无停宴之例云々、但昨日宴止、今自（日カ）博士等、參入之事可有疑、若參入者、先可告其由者、申時博士等參入、其由申大殿、仰云、昨日已停講宴、今日參入之事、先取案內可進止、而輙以參入、可勘其由者、卽勘問博士等、申云、昨日講論已停者、外記須仰其由、幷明日不可參內裏之由、而不仰、仍參入者、此由欲申大殿之間、博士等退出、仍不能賜祿、

死穢

〔北山抄〕（二上丁釋奠事　年中要抄下八月明日明經論議事）　承平二年八月九日、昨日講論已停、今日博士等參入、被尋問其由之間、博士等退出、不能給祿、（只停宴座之時、參入如常、）（頭書）滋野井家本云、按西宮記、承平二年八月八日、釋奠、依貞觀十三年例、止講論宴飲、去四日、右大臣薨、

十一日、庚申、內裏穢アリ、

〔貞信公記抄〕八月十一日、藏人佐衞來云、觸死穢人、入交內裏、

十三日、壬戌、政アリ、是日、虹、日華門前ニ見ハル、

〔扶桑略記〕（二十五裏書　朱雀天皇）八月十三日、政、此間虹立辨廳前、

〔貞信公記抄〕八月十三日、未三刻、虹立日華門前官廳、

十七日、丙寅、山陰、山陽諸國司、大嘗會悠紀、主基行事所ノ命ニ應ゼザルニ依リ、之ヲ譴責ス、

〔符宣抄〕（別本）太政官符山陰、山陽、南海等諸國司幷大宰府

應科責不從大嘗會悠紀主基行事所仰國司事、

右得彼所去月五日解�constant、檢去承平二年八月十七日、下諸國官符�constant、得大嘗會

大嘗會ハ國家ノ重務ナリ

悠紀所解倩、大嘗會事、國家重務、供祀雜物、觸色多數、因茲或任土產、或計便宜、遍仰諸國、令交易進、而庸昧國司、不達物意、所仰之事、多致疎略、若遂懈怠、恐闕會事、已闕之後、無益追罪、望請官裁、下知諸國、將令戒愼者、左(忠平)大臣宣、供神之事、不可簡怠、粢盛之儲、何闕一物、仍須隨其所、仰響應勤行、每色辨進、勿致滯留、不遵符旨、適有乖違、據闕怠大嘗祭事之法、將以科祓者、國宜承知、依宣行之、○中略

天慶九年八月十三日

○大嘗會行事始ノコト、元年五月二十三日ノ條ニ見ユ、

十八日、丁卯、季御讀經始、

〔貞信公記抄〕八月十八日、季御讀經始、

二十三日、壬申、南海道諸國司ヲシテ、大嘗會ノ雜事ヲ勤行セシム、

〔符宣抄〕別本

太政官符南海道諸國司

應勤行大嘗會雜事之事

□□□倩、大嘗會事、國家重務、○下文闕ケ、

右大史坂上宿禰經行

秀才藤原經臣ノ方略試

承平二年八月廿三日

二十四日、癸酉、式部大丞菅原在躬ヲ方略試ノ博士ト爲ス、

〔貞信公記抄〕八月廿四日、可令式部丞在躬問秀才經臣、仰外記公鑒、

〔類聚符宣抄〕九方略試問者

左(忠平)大臣宣、宜令式部大丞菅原在躬、問文章得業生藤原經臣方略之策者、

承平二年八月廿四日　大外記嶋田公鑒奉

同廿五日、召仰大錄吉志公忠、

〔除目大成抄〕八課試及第

前文章得業生正六位上加賀少掾菅原朝臣長守、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、因准先例、依獻冊勞、被拜任式部丞、幷修理亮等闕狀、

獻策者、直任式部丞例、○略中

藤原經臣、承平二年九月冊、○中略

經臣及第ス

治承二年正月廿日、

二十五日、甲戌、兵庫寮ノ倉顚倒ス、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　八月廿五日、未刻兵庫倉町西北廿一間倉轉倒、

平二年八月二十四日　二十五日

三十日、己卯、除目、大納言藤原仲平ヲ左大將ニ、同保忠ヲ右大將ニ任ズ、

〔公卿補任〕五

大納言正三位藤仲平、五十八、右大將、按察使、八月卅日轉左大將、

同保忠、四十三、八月卅日兼右大將、

〔公卿補任〕五　天慶二年　參議正四位下藤元方、五十二、承平二八廿（卅カ）轉正大（式部）輔、

〔貞信公記抄〕八月廿八日、除目議始、右（仲平）大將以下、著議所行之、予心神惱苦、不出、

議始

廿九日、從今日桂芳坊議、右（仲平）大將、大（保忠）納言、中（任忠）宮大夫、宰（實賴）相在此、自餘納言、參議在議所、

桂芳坊議アリ

卅日、除目、寅時奏淸書、

十一月二日、去八月除目、停任二合等文、給有聲朝臣、

〔敍位除目執筆抄〕承平二年八廿九京官、廿（卅）日入眼、執筆、左大臣忠平、

九月小　庚辰　朔盡

二日、辛巳、官奏、

〔貞信公記抄〕九月二日、有奏、

三日、壬午、穢ニ依リテ、御燈ヲ停ム、

〔小右記〕寛弘八年九月一日、辛未、勘申有大嘗會之年停九月三日御燈之例年事、○中略承平二年日記云、九月三日、壬午、依穢雖無御燈、依例廢務、○北山抄、江次第同ジ、

廢務

七日、丙戌、武藏小野駒牽、

〔貞信公記抄〕九月七日、小野御馬牽、

〔北山抄〕九羽林要抄裏書　牧監裝束事私書

承平二九七、九云、記牽御馬、入自日華門、但一御馬、牧監牽之、牧監裝束如衞府著纓々纏等、

牧監一ノ御馬ヲ牽ク

九日、戊子、醍醐天皇ノ御忌月ニ依リテ、重陽宴ヲ停ム、

〔日本紀略〕朱雀院九月九日、戊子、止宴會、

十一日、庚寅、穢ニ依リテ、伊勢例幣ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔貞信公記抄〕九月十日、招左（扶桑）大辨、令諸卿定明日例幣、不擇吉日、穢外日、早奉發遣ノ日時ヲ定ム

遣會祭日、與擇吉日祭後發遣如何者、令定申來廿日、使外記久永宿禰遣之、

十一日、延伊勢幣、由行大祓、有內印、

大祓ヲ行フ　內印アリ

十二日、亥一刻勅許、

廿日、伊勢例幣立、

十三日、壬辰、僧綱ヲ任ズ、

〔貞信公記抄〕九月十三日、貞崇於律師、辨日、覺恰、義海、泰舜爲十禪師、

〔僧綱補任〕二〇興福寺本　權律師貞崇　九月十三日任、眞言宗、東大寺、御持僧勞、左京人、三善氏、

護持僧ノ勞

〔護持僧次第〕朱雀院　東內供奉貞崇　承平二年九月十三日任權律師、護持僧勞、年六十九、

○東寺長者補任、密宗血脈抄、異事ナキヲ以テ略ス、

十四日、癸巳、郡司召、上野勅旨駒牽、

〔貞信公記抄〕九月十四日、郡司召、上野御馬牽、

〔樗囊抄〕年中行事駒引　公卿殿上人給御馬、

承平二九十四、上野諸牧、卅疋、公卿殿上各一疋、

十五日、甲午、武藏立野駒牽、

〔貞信公記抄〕九月十五日、立野來、

十七日、丙申、甲斐穗坂駒牽、

〔貞信公記抄〕九月十七日、從內賜左右馬、今年駿足各八疋令撰取、仍給穗坂四鹿毛、御使師輔、左右近衞等牽之、院仲宣、淸景、馬寮官人等候、御使被物、

二十日、己亥、常陸太守三品貞眞親王薨ズ、

〔貞信公記抄〕九月廿日、貞眞親王薨、

〔一代要記〕淸和天皇子　貞眞親王　三品兵部卿、母齋宮頭諸(藤)說成女、承平二年九月卅日薨、

公卿ナシ　駿馬ナシ　撰取ラシム

〔日本紀略〕朱雀院　承平元年九月廿日、甲辰、三品常陸太守貞眞(淸和皇子)親王薨、年五十六、

〔本朝皇胤紹運錄〕

御世系

淸和天皇

- 貞眞親王　三品、兵部卿、承平二九廿薨、母齋宮頭諸(藤)說成女、
- 源蕃基　從五下、土佐權守、
- 源蕃平　從五下、大膳大夫、

源蕃固（ママ）從五下、加賀權守、
源元亮（高イ）從五下（上ヲ）、

〔三代實錄〕二十九清和天皇　貞觀十八年十一月廿五日、戊戌、皇子貞眞、年一歲、○中略爲親王、貞眞親王母、更衣齋宮頭從五位上藤原朝臣諸藤之女也、

親王ト爲ル

〔西宮記〕臨時二竟宴事　諸道講書、紀傳講書、漢書竟宴之日、貞眞親王參會、出詠句、

漢書竟宴ニ列セラル

〔十訓抄〕中第五可撰朋友事　○上略清和第九の皇子貞眞親王の作給へりける、

御詩

鄒枚散後平臺靜　空遣春風只斷腸、

○貞眞親王ノ薨日、一代要記三十日ニ作リ、日本紀略、元年九月二十日ニ係ク、今貞信公記抄、本朝皇胤紹運錄ニ據リテ掲書ス、親王花宴ニ召サル、コト、延喜四年二月是月ノ條ニ、月次祭、神今食ニ神町南舍ニ就カル、コト、同十九年六月二十六日ノ條ニ、花宴ニ箏ヲ彈ゼラル、コト、延長四年二月十八日ノ條ニ、卽位ニ外辨ヲ勤メラル、コト、同八年十一月二十一日ノ條ニ見ユ、

二十二日、辛、大嘗祭ニ依リテ、一代一度ノ大神寶使ヲ大神宮及ビ諸社ニ發遣ス、

神寶使ヲ定ム

八省院ヨリ發遣ス

前日大祓ヲ修ス

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿二日、辛丑、依大嘗會、被奉一代一度大神寶於伊勢及諸社、

宇佐神寶

〔貞信公記抄〕六月十一日、公忠朝臣來云、檢前例、諸神々寶、宇佐神寶、同日奉遣者、依例可行、

九月十七日、於職曹司、定奉神寶使、

廿二日、卽位之後、神社神寶今日奉遣、從八省出云々、

〔北山抄〕五　奉諸社神寶事（先於建禮門前有大祓、承平二年、前日行之、）

大和（國カ）五所、河內五（二イ）所、攝津五所、海道六（五イ）所、山道七所、北陸四（三イ）所、山陰三所、山陽五所、南海二所、西海道四所、合五（マ）十所、承平○中略例也、

御禊アリ

二十五日、甲辰、武藏秩父駒牽、是日、齋院婉子內親王、初齋院ニ入リ給フ、

〔貞信公記抄〕九月廿三日、秩父御馬來、左（相佐）金吾候陣、而依不進解文退出、上各申障不參、不能取馬、

廿五日、賀茂齋院御禊、入左近衞府少將曹司井本也、左（林ヵ）大將令取秩父馬、

〔左經記〕長元四年十二月五日、戊申、○中略婉子齋院○中略同二年（承ヵ）九月廿九日（五カ）

承平二年九月二十五日

入右(左カ)近衛府、

○婉子内親王ノ初齋院ヲ定ムルコト、三月十六日ノ條ニ、紫野院ニ入リ給フコト、三年四月十二日ノ條ニ見ユ、

二十六日、乙巳、大嘗祭御禊ノ雜事ヲ定ム、是日、烏ノ怪アリ、

〔貞信公記抄〕九月四日、參向職曹司、定御禊女官數等、

女官ノ數ヲ定ムル日時ヲ定ム

廿一日、可令勘御禊日時、出門並方發鼓聲時等事、又可勘十一月朔當卯日年、行新嘗會例、仰永久、

廿六日、職御曹司、定御契裝束司等、申剋烏喫拔時杭、

廿八日、烏咋拔時杭、

烏時ノ杭ヲ喫去ル

○四日、御禊女官ノ數ヲ定ムルコト、二十一日、御禊ノ雜事ヲ勘申セシムルコト、二十八日、烏ノ怪ノコト、便宜合敍ス、

二十八日、丁未、皇太后、醍醐寺ニ於テ、醍醐天皇ノ御爲メニ、新寫四卷經ヲ供養アラセラル、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、○中略承平二年九月廿八日、皇太后(穩子)於醍醐寺、奉爲先帝、供養新寫四卷經、紺紙金字、紙是先皇御手書、卽去年御齋會法花之餘也云云、

先帝ノ宸翰ヲ料紙トス

齋宮雅子内親王、野宮ニ入リ給フ、

〔貞信公記抄〕九月廿八日、伊勢齋宮(雅子)御禊、入野宮、

○雅子内親王、初齋院ニ入リ給フコト、六月十日ノ條ニ、大神宮ニ參向セラルヽコト、三年九月二十六日ノ條ニ見ユ、

御禊アリ

二十九日、戊申、醍醐天皇國忌、醍醐寺ニ於テ、諷誦ヲ修ス、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、○中略承平二年九月○中略廿九日、使藤原玄高、以調布廿段、參醍醐寺、而修諷誦、御國忌也、

是月、大藏省穢アリ、

〔本朝世紀〕承平五年六月十日、癸酉、○中略承平二年九月□日、汲水之女、墮於省井溺死也、彼時、省申事由於官、々卽定仰、官與公文無穢之由、隨卽件官公文等、移度正藏院、宛用公事之物、

官公文等穢ト爲サズ

十月大　己酉朔

二日、庚戌、官奏、

〔貞信公記抄〕十月二日、庚戌、有官奏、

四日、有官奏、

○四日、官奏ノコト、便宜合敍ス、

六日、甲寅、大嘗會行事所、諸親王ニ青摺信濃布ヲ頒ツ、

承平二年十月六日、大嘗會主基所、送可進膳

〔西宮記〕臨時大嘗會事○前田家大永鈔本

廻文

部廻文云、青摺信濃布二丈、自行事所可受者、其數二品四人、三品三人、四品二人、爲法、七日、悠紀所送膳部廻文、其數二品四人、三品、四品各三人、卽問其由、使云、先例左方增一人云々、

先例左方一人ヲ增ス

七日、乙卯、諸親王ニ牧馬ヲ賜フ、

〔貞信公記抄〕十月七日、十二（行明）親王令見牧駒、留一疋、式部卿（敦實）宮給四疋、留二疋、

十一日、式部卿宮重給一疋、返奉馬二疋、依其消息、丁寧賜留、

十日、戊午、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學竪義次第〕二年（承平）、壬辰、講師空晴、年五十五、臘卅、（朱書）二月一日宣、三日請、伊勢氏、京法相宗興福寺、人、師主延

研學延空年四十三、臘廿六、五十五、興福寺、法相宗、竪義四十三、延空、次延釋、

〔三會定一記〕一　同二年（承平）、三月一日宣、一講師空晴、

〔貞信公記抄〕三月一日、癸未、以空晴爲維摩講師宣旨、仰久永、

二十五日、癸酉、大嘗祭御禊、

〔日本紀略〕朱雀院　十月廿五日、癸酉、依大嘗會、天皇行幸鴨河有御禊、皇太（穩子）后同輿、

〔貞信公記抄〕十月廿二日、左衛（檀佐）門、右兵衛（公卿）督等來、仰大臣代事、

廿五日、行幸東二條末河頭御禊、其儀如例、但中（穩子）宮同輿、

〔北山抄〕五大嘗會御禊事　十月上旬、定奏陪從五位以上八十一（一人）人、御前三十（一人）人歷名、○註略ス、留守、○註略ス、諸衛代官、○註略ス、下給裝束司、舊例、藏人所召主典下給、事畢上外記云々、承平二年、上卿給外記、々々下主典、裝束司申云、度々記文、自內裏下給者、而外記下之、違例云々、略○中若有申障之者、上卿奏聞改替、舊例、又自藏人所仰下、承平、略○中外記仰之云云、○中略又令奏聞兵庫、幷點御禊地日時勘文、次仰左右京及山城國、令造道橋、承平二年、先四五月、且定御禊令修造其道橋破損也、○中略預示仰女御一人可供奉之由、承平、母后（穩子）同輿、尙侍供奉中略、○當日檢非違使先巡檢當路、承平、佐以下○中略巡檢云々、○中略時刻、行皷始動、乘輿出御、御鳳輦、節下大臣先出自春華門、就標、少納言外記相從、延喜儀式云、建禮門南去十餘丈、立節旗標、南去一

鴨河ニ行幸シ給フ皇太后御同輿アラセラル

外記陪從ノ歷名ヲ裝束司ニ下ス

先ヅ道橋ヲ修造ス

尙侍供奉ス

建春門ヨリ出御　丈、立大臣標、承平、出御自建春門、侍從所北掖去三許丈、立床子云々、行幸儀式如常、○中略王卿侍從、各著幄座、卽供御厨子所御膳、○中略天慶、以府生招次官以下於休幕、有饗饌事、是故實也、而承平无此事云々、○中略御禊畢、○中略次大臣取見參付內侍奏之、返給外記、承平二年、仲平卿自幄南方參入、跪付內侍云々、山城守介賀茂兩社禰宜預給祿列、(畫)「承平有拜舞」

藤原仲平見參ヲ奏ス　山城國司加茂社司等ニ祿ヲ賜フ

承平二年、侍從宗城朝臣、奉仕右兵衞督代、以兼明朝臣、補次侍從、上卿仰中務輔云、源兼明朝臣、於毛止末不干君仁乎佐女給云々、御禊行幸裡書

寛和、皇后同輿、又有女御代、○中略今案、皇后同輿時、又不可有女御代、然而承平、皇后同輿、又尙侍供奉、

〔大嘗會御禊日例〕遷都以後　朱雀天皇節下大納言仲平、

承平二年壬辰十月廿五日、癸酉、二條末、南邊、寅二點、打裝束鼓、同四點、打列陣鼓、巳一點、打進鼓、同二點、御出自建春門、南行至美福門、自二條大路東行幸頓宮、四點御禊、申二點還幸、

〔大嘗會御禊事〕

朱雀　承平二年十月二十五日、癸酉、

節下　大臣代大納言藤原仲平卿左大將

已刻進鼓ヲ打ツ　御路次　節下大臣代

裝束司　次第司　女御代　攝政忠平騎馬ニテ供奉ス　鹵簿ナシ　一ノ大納言仲平節下大臣代トナル

裝束司

次第司、權中納言右衞門督兼輔卿

參木右兵衞督橘公頼卿

女御代、御匣殿別當命婦、尙侍藤貴子、左大臣忠平公女歟、

〔御禊行幸服飾部類〕三公卿

公卿○中略

寛治大府記云、殿下、(師實)○註略ス、御後令供奉給、攝政騎馬供奉、承平二年例、有左右大將殿、其外多用車被參進、今日御車副著褐冠、

〔權記〕寛弘八年十月二日、辛丑、裝束司判官竹田宣理來、傳長官納言消息云、御禊事、○中略承平二年、○中略件年々、雖只注鹵簿、實無其物云々、

〔中右記〕天仁元年十月十一日、○中略大納言爲節下大臣代官、其例甚多、○中略承平二年、大納言仲平、天祿元年、大納言兼明、以上皆一大納言、

〔一代要記〕朱雀天皇　承平二年十月二十三(五カ)日、御禊、

○扶桑略記、伏見宮御記錄、歷代編年集成、皇代曆、皇年代略記、異事ナキヲ以テ略ス、

悠紀國ノ國司ト爲ル

是月、近江守從四位下藤原高堪卒ス、

〔小右記〕寛弘九年七月廿二日、戊子、今日於殿上問予、(實資)丹波守匡衡卒、有前例乎、已是主基國也、如何者、答云、國司雖卒去、不可被改國歟、定其國、卜定郡司、亦有何改易乎、○中略尋見前例、藤原高堪、承平二年正月任近江守、(悠紀國)同年十月卒、

〔尊卑分脈〕藤氏宇合孫

後世(ツキヨ)

- 高堪(式部延)　近江守、左少辨、右少將、右京大夫、從四位下、母土佐守橘最雄女、
  - 公方(册策文)　母、文章博士、左衞門佐、從四下、
  - 公康　母、遠江守、從五下、
  - 公將　母、飛驒守、從五下、

十一月(小己卯朔盡)

一日、己卯、日食、是日、大嘗祭ニ依リテ、諸社ニ奉幣ス、

〔貞信公記抄〕十月六日、左中辨略定、依大嘗會事、奉諸神幣帛、可在來月上旬、十一月一日、己卯、有內印、依大嘗會事、可奉幣伊勢幷諸神使立、

內印アリ

日食ニ依リ御曆奏延引

〔樗囊抄〕年中行事御曆奏(十一月)二日例

承平二、依蝕、

二日、庚辰、羅城祭ヲ追行ス、

〔貞信公記抄〕十一月二日、羅城祭、可行去月廿三日、爲所司稱用途不足不行、仍今日行、

用途不足ニ依リ羅城祭延引

四日、壬午、裝束司及ビ藏人所ノ雜色ヲ補ス、

〔貞信公記抄〕九月廿六日、職曹司定御禊裝束司等、廿七日、右(公卿)兵衞督進敏通擧狀、十一月四日、以惟扶朝臣爲裝束司、以平時常、藤原有茂、爲藏人所雜色、

悠紀近江　主基丹波

十三日、辛卯、大嘗祭、

〔日本紀略〕朱雀院　十一月十三日、辛卯、大嘗會、(近江國、丹波國、)

承平二年十一月一日　二日　四日　十三日

〔貞信公記抄〕十一月十三日、戊時幸廻立殿、丑刻幸悠紀殿、寅剋幸主基殿、是行事所緩怠之甚也、同剋幸清暑堂、中宮（穩子）同輿、

廻立殿ニ幸ス　清暑堂ニ幸ス　中宮御同輿

〔北山抄〕五大嘗會事　次令勘吉日、卜定北野齋場地、預牒送山城國、先就荒見河解除、次點其地、取壤卜定之、陰陽寮鎮謝、儀式在前卜定、而神祇官式、八月上旬卜定云々、大將軍在子者、偉鑒門西去十四丈點之、承平略○中例也、或云、主基殿前立悠紀殿云々、太政官式云、九月造之、○中略

大將軍星ノ方位ヲ避ク

寅卯日間、撿校以下巡檢大嘗宮、幷豐樂院事、承平、略○中非撿校公卿共向、○中略

大嘗宮及ビ豐樂院ヲ巡撿ス

先祭七日、兩國、龍尾道前造大嘗宮、略○中修式堂前、立五丈幄二宇、東爲親王座、承平以來記云、大忌王卿主基座云々、非也、○中略

卯日

卯日、平明、神祇官班幣帛於諸神、卜諸司小忌人、同新嘗會、略○註ス、諸衛設大儀、分衛如常、除纛隊旗幷鉦鼓、承平記云、近衛小忌陣、在大嘗宮內、大忌陣、在南門外、兵衛陣、在兩橫堂間、衛門陣、在會昌門外、其小忌陣、在大嘗宮內、大忌陣、在南門之內、諸司公服、陣威儀物、如元日儀、中務率大舍人、宮內卿主殿掃部、左右分陣、兵部（ナシイ）兵庫不與、承平記云、立近仗南馳道東、今案、相分可立馳道東西、但置列所南退歟、○中略隼人司率隼人、分立左右朝集堂前、承平記云、式部彈正列立如恒、○中略申時以前、庶事咸畢、酉剋掃部寮以神座御座、供于嘗殿、承平二年、開門後、王卿侍從入自南門、供之、天慶九年、裝束司國司相從、行幸以前供畢、而依神祇大副、輕基等申任承平例、臨期改供云々、○中略戌剋鑾輿出自建禮門、入自昭訓門、於東廊壇上、改駕腰輿、略○中承平二年、入自宣政門、不御腰輿、依皇后（穩子）同輿也、○中略既御悠紀正殿、略○註ス、

侍從等神座御座ヲ設ク

王卿先ヅ著座

小忌群官著其座、略○註ス、次開門、略○註ス、次大忌親王入自西門、大臣以下入自南門、各著幄下座、略○中承平二年、王卿雖先著、開門後、出自東掖門、國司入後、入會昌門著座云々、略○中六位以下參入、亦就幄下、略○註ス、次宮內官人率吉野國栖、略○註ス、入自左腋門就位、承平記云、立馳道、當近仗平張南、略○中次悠紀國司率歌人、入自同門、次伴佐伯宿禰率語部、十五人入自東西掖門、各就位、略○註ス、其群官初入、隼人發吠（犬ノ）聲、立定即止、先國栖奏古風五成、承平記云、其笛似以指摩孔也次悠紀國奏國風四成、略○中以次退出、親王以下五位以上、就庭中版、異位重行、承平吏部王記云、進馳道東近仗南、式部不置版、量程行立云々、略○中跪揷笏拍手四度、略○註ス、六位以下又如此、小忌人不在拍手限、承平、依刀禰不參以少納言一人備五位、以外記史備六位云々、畢各復幄座、々定、略○中宸儀還御廻立殿、其儀如初、供浴湯、易御服、御主基殿、其儀一同悠紀、小忌群官度馳道、就主基幄、新式云、大忌不遷、又大忌座悠紀主基不分別、而承平以來、大忌又遷云々、非也、○下略、辰日節會ノコトニカヽル、十四日ノ條ニ收ム、

式部版位ヲ設ケズ

刀禰不參

吉野國栖笛ノ音

〔政事要略〕二十六年中行事二十一月二年中卯新嘗祭事　天慶三年十一月十九日、○中略比大歌參入、上動座、此間大中將不在殿上、無警蹕、左衞門督云、無大中將時、他公卿警蹕、是例也、而在座公卿闕其事、可怪、但小忌無預他事、仍不稱耳、年來不見他公卿警蹕例、

忠平警蹕ヲ唱フ

〔歷代編年集成〕十五朱雀天皇　承平二年十一月十三日（承平二年）

但去承平二年大嘗會、太政大臣（忠平）爲左大臣、不兼大將、獨稱之、

承平二年十一月十三日、辛卯、大嘗會、悠紀近江、主基丹波、

小野道風御屏風ヲ書ス

御屏風道風書之、

〔扶桑略記〕二十五朱雀院　十一月十六日、大嘗會、近江、丹波、供奉其事、

〔一代要記〕朱雀天皇　承平二年○略中十一月十六日、大嘗會、近江丹後、(七月十九日)去年依法皇崩御延引、○皇代曆、皇代略記同ジ、

○江次第、園太曆、皇年代略記等、異事ナキヲ以テ略ス、扶桑略記、一代要記等、式日ヲ十六日ニ作ル、今日本紀略、貞信公記抄等ニ據リテ揭書ス、

豐樂院出御

十四日、主辰辰日節會、

〔日本紀略〕朱雀院　十一月十四日、□時幸豐樂殿、依主基方公卿、饗、極緩怠所致也、

清暑堂ニ出御

〔貞信公記抄〕十一月十四日、□時幸豐樂殿、依主基方公卿、饗、極緩怠所致也、

〔北山抄〕五大嘗會事　辰日、卯刻乘輿、○略中出光範門、○略中承平、依不御腰輿、入自宣政門、出自章善門也、○略中入自豐樂院不老門、謂北門、御清暑堂、○略中小忌王卿經大嘗宮西邊、供奉如恆、承平記、大忌王卿供奉、時刻、御悠紀帳、近仗稱警蹕、○略中承平記、鈴奏如恆者、○略中所司開小忌前文、大忌王卿供奉、在略云々、○略中

大忌王卿供奉鈴奏

國司分居ス

儀鸞、豐樂兩門、近衛門開之、承平天慶外記々、國司分居云々、非也、○略中親王以下五位以上、入自儀鸞門、各就版位、○註略ス、六位以下相續參入、承平記云、此間大臣著東廊兀子行事、立定、神祇官中臣捧賢木、式云、捧玉籤神祇式云、賢木副勞、承式例、賢木加注壽詞紙云、○中略次辨大夫就版、跪奏兩國所獻多米都物

大臣事ヲ行フ

賢木ヲ壽詞ノ紙ニ加フ

色目、退出、承平略○中例、就外辨不奏次五位以上搢笏拍手如昨、六位以下相承拍手、訖退出、儀式次第如之、寬平式云、天長記文、拍手在辨奏物數之前、但拍畢起、辨出後退出云云、而承平有議、辨未參之前、拍手即退出、式部取版退出、○註略ス、內侍臨東檻召人、大臣出自軒廊南橋、於左近陣南頭謝座、式云、陣西頭少(小力)南謝座而新式、无西字、承平略○中例如此、略○中即經陣前、昇自南面東階著座、○註略ス、次宮內省率大膳職造酒司、多賀須伎、比良須伎物、○註略ス、進列庭中、即將去、承平記云、入自顯陽堂南標前北面列立、出自承歡堂南、略○中次大臣召舍人、式、候逢春門外者、而承平以來、入門立左右仗巽角、稱唯退出云々、非也、少納言入自逢春門、○註略ス、就版、○註略ス、大臣宣、召刀禰、○略中所司供御膳、○略中承平○略中用中階、今案、諸節會御高座、猶自西階供之、況御東西御帳、何用中階乎、○略中賜五位以上饌、○略ス、次辨官分給兩國多米都物於諸司、○註略ス、悠紀獻當時鮮味、○略ス、大臣問之、各稱唯、申云、悠紀所進御贄、稱物名如常、天慶安和記、不奏國名、爲遂例云々、然而申悠紀所之由、見寬平承平記、大臣仰云、賜膳部、○註略ス、稱唯、出逢春門、付膳部、內膳預候門外、承平記、淑光召膳部、內膳進受云々、非也、于時國司率風俗歌人等、入自儀鸞門、且歌參入、○略中乃奏風俗歌舞、式云、舞者八人、爲(定ム)列、次所司奏樂、新式云、今不奏、(頭註)「承平略○中記、悠紀十二人、主基十人云々」○中略次撿校納言以下、略○註ス、牽悠紀行事大夫等、舁御挿頭倭琴等案、○略○註ス、入自逢春門、經左仗南頭、昇自中階、○略○註ス、立南榮、承平、立御前壇下、挿頭在北、○中略大臣○略○註ス、就案、擎御挿頭、經座上、昇御壇東階、○略中即奉指御冠左、○略○註ス、自座末復本座、群臣降階拜舞、○略中承平、依御幼主、不傳供御挿頭、

拍手

大膳職造酒司等庭中ニ列立ス

御贄物名ヲ悠紀所ニ申ス

悠紀主基風俗ノ歌舞ヲ奏ス

御幼主タルニ依リ御挿頭ヲ

供セズ　隨无舞、略○中拜行事辨等、賜王卿挿頭、略○中承平例、親王紅梅大臣藤花、納言以下櫻花
兩國子弟庭燎ヲ供ス　辨者也、此間、會檢校行酒、○註略ス日暮、主殿寮供庭燎、略○中承平、略○中檢校參議執大臣挿頭、并兼大
采女朝御膳ヲ撤ス　訖入御、略○中承平記采女撤御膳、略○中王卿下自東階、度西方、承平記云、兩國子弟各事
内侍西檻ニ臨ミテ人ヲ喚ス　内侍臨西檻喚人、式、無此召、而承平以來例如之、大臣進自右仗後、於仗頭謝座、○註略ス、昇自南面
西階著座、王卿仗頭列立、略○中東面、略○中承平、小忌五位以上直度、列立馳道西、略○中承平記、標南五
丈列立、主基所寄人等也云々、大臣仰侍座、○註略ス、謝座酒如常儀、○註略ス、畢各著座、略○中亘階下、奉見參
云々、次供御膳、賜臣下饌、皆如悠紀、承平、略○中不仰御酒勅使、依臨曉歟、略○中但無挿頭事、○註略ス、次風俗
樂前大夫　樂人奏歌舞、（頭註）「承平有樂前大夫云々、非也」○中略、已日節會ノコトニカ、ル、十五日ノ條ニ收ム、
辰日豐樂殿鋪設　辰日裝束、○註略ス、兩國、豐樂殿東西第三間構壇、○註略ス、其上立御帳卷三面帷、承平、又令
卷乾艮二角云々、略○中　前後懸犀角鏡等、中央立御倚子、承平○中略平文、以軟障引隔母屋與北
衞門隼人陣ニ楯戟ヲ立テズ　庇之間、承平記云、東第一間施之、東壁及北壁○中略兩國倉代等物、列立觀德明義兩堂前、略○中式云、部領擔夫
退出、承平記云、擔夫皆在其下、○中略豐樂門內對立隼人楯戟、承平午日記云、衞門隼人陣不立戟、今案、彼日、兵衞立
鼓鉦ヲ設ク　可陣儀鸞門內、衞門可陣、其東西設兩國樂鼓各二面鉦等、略○中承平記云、鼓鉦假雙立儀鸞門屋內、
須立門外屋內、大嘗會裡書　承平二年、（皇年）貞信公爲攝政、三ヶ日奉仕內辨、

豐樂院出御　十五日、癸巳、巳日節會、
神宴風俗ヲ奏シ歌ヲ次ニ和舞ヲ奏ス　〔日本紀略〕（朱雀院）十一月十五日、癸巳、又御同院、（豐樂院）
〔貞信公記抄〕十一月十五日、依神宴不能精食、未時御殿、（豐樂院）其儀如昨、但須先奏
和舞田舞、後奏兩國風俗、而先奏失也、還御清暑堂後、召親王公卿、々々聊有管
絃興、賜祿、
〔北山抄〕五大嘗會事　巳日、辰刻御悠紀帳、近仗稱警蹕、內辨著兀子、內侍召人、
群臣物ヲ獻ズ　內辨參上、開門、召群臣、供御膳、賜臣下饌、○註略ス、等儀、一同辰日、承平略○中例、有獻物、无挿頭、略○中
一兩巡後、悠紀人就庭中左幄、奏倭舞、略○中承平記云、舞人十人、歌人十人、居庭
略　次奏風俗、略○中承平貞信公御記云、後奏兩國風俗、而先奏風俗、失也者、略○中　三獻後、仰御酒勅使、事
神歌ヲ唱フ　訖、御主基帳、雜事皆同昨日、但獻物後、主基人就右幄、奏田舞、略○中承平記云、樂人著幄、奏音樂、
清暑堂ノ鋪設　略○中　次奏風俗、略○中承平、或濫樂大臣座邊、大臣招之、唱神歌云々、次獻御挿頭、○註略ス、次奏
見參、次給主基祿、○註略ス、御清暑堂、有御遊事、○註略ス、其儀、堂中間設御座、右立置物
忠平等侍座ス　御机、御後及西邊施屏風、軒廊雙行設王卿座、其南橫敷侍臣座、略○中承平二年、堂東隔戶內立
大床子、其後立御几帳、隔內北頭施御屏風、其南對敷王卿座、王卿東、步廊設侍臣座云々、宸儀御々座、殿上王卿依召著座、
承平、參議實賴朝臣召之、又左、大臣、右大將先侍座、（忠平）（仲平）略○中　卽給酒肴、○註略ス、并賜（永イ）管絃器、○註略ス、先彈倭琴、唱神歌、

王卿ニ御衣ヲ賜フ　次變調、奏律呂歌、○註略ス、給王卿侍臣祿有差、承平賜王卿御衣各一襲、○下略、午日節會ノコトニカヽル、十六日ノ條ニ收ム、

十六日、甲午、午日節會、敍位、

豐樂院出御　〔日本紀略〕朱雀院　十一月十六日、甲午、又御同院(豐樂院)、敍位、

敍位議　〔貞信公記抄〕十一月十一日、招兩大(仲平、保忠)納言、議敍位事、自餘上來陪在議所、

還御　十六日、未時幸豐樂殿、其儀如例、但式部敍一人後、主殿寮秉燭、依殿裝束懈怠所致也、寅時還本宮、

〔北山抄〕五大嘗會事　午日、卯刻撤兩國帳幷標、樂人幄等、裝飾高座、設王卿座如常、○略中　辰刻內侍授下名於大臣、○略註ス、大臣召內豎、式云、大夫一人參入、本爲內豎者云々、寬平例如此、而承平以來、六位別當參入如恒、令召二省、賜下名如常、○略註ス、天皇出清暑堂、御高御座、○略註ス、內侍置位記筥於大臣座前、卽臨東檻召人、大臣到左近陣西頭謝座、承平略○中例、如式、仗南七尺西進一丈可拜歟、(頭註「承平記云、經左近陣南頭、進立庭中謝座」)昇自東階著座、次內記取宣命文、昇東廊於殿東砌下、奉大臣、々々參上、付內侍奏之、儀式、群臣著座後奏之、卽給宣命使、其後引敍列、而或開門以前奉之、承平略○中例、如之、次所司開門、○略中　次召舍人、少納言參入、大臣宣、喚刀禰、親王以下參入、准七日儀、舞臺中央以東二丈、南去一許丈以南可立標也、而承平以後外記々、列立版位云々、此日小忌四位以下、可列西歟、謝座謝酒著座、二省

南殿ノ儀ノ如シ　率敍人參入、舞臺東南角、東去二丈、南折一丈、以南立標、兵部略○中　二省唱敍訖退出、

久米舞吉志舞ヲ奏ス　○中略　次伴、佐伯兩氏入自儀鸞門、著中庭床子、奏久米舞、○略中承平記云、於舞臺東供奉、舞人在前後、端者服四位袍、中間服五位袍、皆帶劔、終頭拔劔、舞、无歌、以琴爲節、舞如駿河舞、次安倍氏奏吉志舞、○略中承平記云、於舞臺西奏之、引頭二人立臺下、舞人在前後、端者服甲冑、在中間者、幞頭冠末額、褐衣、襠、皆執楯、戟、舞、酬拔刀云々、畢各退出、○略中承平記云、國風三發音、勅停之、○略中

勅シテ國風ノ發音ヲ停メ給フ　獻後仰御酒勅使、次大歌別當下殿、出南門、率歌人參入、於舞臺南頭、奏大歌、○略中承平略○中外記々云、別當下殿南行、於觀德堂巽角、率歌人參入云々、○中略　次五節舞姬五人進出、舞畢退出、次親王以下、々殿堂拜舞、參議以上、左近衞陣南三丈西折一丈、西面列立、式如之、而承平以後外記々、列立左仗南頭云々、○略中文　次神服女四人、於舞臺北、供解齋和舞、○略中承奉、歌人在臺北、○中略　大臣奏宣命見參、承平記云、左大臣(忠平)立殿東欄北頭、北面、召外記、外記於壇下、見々參畢、進清暑堂奏之、○略中承平外記々云、今日殊有宣旨、諸國入京吏、或未赴任、及諸司雜怠輩、皆預見參、但未得解由、非此限、○中略　宣命使宣制、拜舞如常、宣命使復本座、次群臣各復座、式部輔二人、執札相分、立版南唱名、王卿以次下殿給祿、訖參清暑堂、承平重記云、出自青綺門、乘輿還宮、○中略

五節舞和舞ヲ奏ス

特旨ニテ內外司雜怠ノ輩見參ニ預ル

未日、於儀鸞門外、賜神祇官幷諸司六位以下、及兩國郡司役夫以上祿、參議爲勅使、率辨官行事、參議卽宣制、(頭註「承平辨官宣制云々」)

未日

辨官宣制

〔御遊抄〕一清暑堂

承平二年十一月十六日

朱雀院、承平二年十一月十五日、癸巳、左大臣（忠平）彈和琴、謌神謌、忠平和琴ヲ奏ス、元長親王笙ヲ吹カル

元長親王吹笙、

左近少將藤原朝臣敦忠吹笛、

二公（主カ）共唱歌、○體源抄同ジ、

〔公卿補任〕五 參議從四位下藤實賴、三十三、讚岐守、十一月十六日從四上、

〔公卿補任〕五 承平五年 參議從四位下藤師輔、二十八、（承平二年）十一月十六日正五下、大嘗會悠紀國司、

〔公卿補任〕五 天慶二年 參議正四位下源高明、二十六、承平二十一十六正四下、大嘗會悠紀、叙位、治國ノ功中宮御給

從四位上伴保平、七十三、承平二十一十六從四上、悠紀、叙位、治國々司、

藤敦忠、三十四、同十一月十六日正五下、停中宮御給、加階、（承平二年）

正四位下藤忠文、六十七、承平二十一十六從四上、主基、

〔公卿補任〕五 天暦元年 參議從四下小野好古、六十四、同二十一十六從五上、大嘗會、

〔公卿補任〕五 天暦九年 參議從四位上藤有相、四十八、同十一月十六日從五下、大嘗會悠紀、

〔外記補任〕二

大外記從五位上伴久永 十一月十六日叙正五位下、次官、（勘解由）

外從五位下矢田部公望 十一月叙、大嘗會、

二十一日、己亥、女叙位、

〔貞信公記抄〕十一月廿一日、女叙位、

二十五日、癸卯、官奏、

〔貞信公記抄〕十一月廿五日、有官奏、

廿八日、在衡候官奏、不見、

○二十八日ノ官奏、便宜合叙ス、

位記ヲ給フ

二十六日、甲辰、左大臣忠平ヲ從一位ニ叙ス、是日、源高明ノ昇殿ヲ聽ス、

〔貞信公記抄〕十一月廿六日、任近江守、（伴保平）定殿上人、退出之後、差藏人中明被給位記、仍被物白大褂一重、

慶賀ヲ奏ス、上皇ニ參

廿七日、奏慶賀、參陽成院、馬二疋祿等、

ル醍醐天皇山陵及ビ基經ノ墓ニ謁ス

詞ヲ以テ仰セラル位記使

十二月八日、參向後山階山陵、(醍醐天皇)(基經)宇治御墓、爲有慶也、

〔中右記〕天永三年三月十四日、辛未、

攝政關白被敍從一位時、多在春敍位之次、而(忠平)貞信公幷御堂、臨時令敍一位給時、只以詞被仰下、上卿令作位記也、

位記使用藏人事、是貞信公承平二年十一月廿七日例也、

〔攝關補任次第〕貞信公　承平二十一廿九從一位、

〔公卿補任〕五　左大臣從一位藤忠平、五十三、三月廿九日從一位、

〔公卿補任〕五　天慶二年

參議正四位下源高明、二十六、同廿六日昇殿、(承平二年十一月)

從四位上伴保平、七十三、同月廿六日近江守、(承平二年十一月)〇十月是月ノ條參看、

〔小右記〕寛弘九年七月廿二日、戊子、

藤原高堪、承平二年正月任近江守、(悠紀國)同年十月卒、伴保平、承平二年十一月廿六日任、

〇忠平ノ敍位、公卿補任、三月二十九日ニ、中右記、十一月二十七日ニ、攝關補任次第、同二十九日ニ作ル、今貞信公記抄ニ據リテ掲書ス、

二十七日、乙巳、左大臣忠平ノ男師尹元服ス、從五位下ニ敍ス、

〔公卿補任〕五　天慶八年　參議從四位下藤師尹、二十六、承平二十一廿七從五下、年十三、今日元服、臨時敍之、

〔日本紀略〕朱雀院　承平三年十一月廿七日、左大臣藤原朝臣(忠平)息男師尹加元服、敍從五位下、

〇日本紀略、三年十一月二十七日ニ作ル、今姑ク、公卿補任ニ據リテ掲書ス、

忠平日暮ニ依リテ官奏ヲ見ズ　桂芳坊

十二月大戊申朔盡

一日、戊申官奏、

〔貞信公記抄〕十二月一日、戊申、日暮在衡朝臣持來官奏、仍不見、

二日、桂芳坊有官奏、

七日、有官奏、

十日、有內印、

十六日、有官奏、

十七日、有官奏內印、

廿七日、有官奏、

○二日以降ノ官奏、內印、便宜合敍ス、

十日、己巳、悠紀、主基ノ國郡司等ニ祿ヲ賜フ、

〔貞信公記抄〕十二月十日、左大辨（扶幹）來、定今日可被行悠紀、主基國郡司祿事、卽仰、

十六日、大嘗會祿綿事、○略中仰左大辨、

〔北山抄〕大嘗會事　五　未日、○略中式兵二省唱名、大藏給之、具見于式、承平例、十二月七日（十カ）

祭使弘徽殿ヨリ出立ツ　神宴曉ニ至ル

廢務ノ日ニ著座ノ儀ヲ行フ

給之、參議扶幹行事云々、○下略

十二日、己未、左近衞舍人等豐樂院濫惡ノコトヲ勘ヘシメテ、之ヲ上卿ニ下ス、

〔貞信公記抄〕十二月十二日、勘左近舍人等豐樂院濫惡事、賜上卿、

十四日、辛酉、賀茂臨時祭、是日、公卿著座、

〔貞信公記抄〕十二月十四日、賀茂臨時祭、於弘徽殿使等出立、

〔政事要略〕二十八　年中行事　二十下　酉賀茂臨時祭事　十一月四　吏部記、承平二年十二月二日夕、天子召臨時祭調樂人、覽歌舞及神宴、到曉賜祿云々、

〔西宮記〕六　臨時祭事　○前田家本　（裏書）天曆六年十一月十一日九記云、○略中令伊尹奏云云、承平二年雖無指障、被行十二月、辭別文云、依大嘗延引云云、

〔北山抄〕七　都省雜事　（藤原佐忠）八條大將、承平二年二月（十脫カ）四日（十脫カ）、丑時著座、雖廢務日、依左（忠平）大臣被定仰所著也、

年中無他日朝間祭也、丑刻著座有何妨云々、

○保忠、右大將ヲ兼任スルコト、八月三十日ノ條ニ見ユ、

十六日、癸亥、備前國、海賊ノコトヲ奏ス、

〔貞信公記抄〕十二月十六日、備前申海賊事等、仰左大辨（藤原扶幹）、

○追捕海賊使ノコトヲ定メ行ハシムルコト、四月二十八日ノ條ニ、諸國ヲシテ、警固ヲ勤メシムルコト、三年七月十一日ノ條ニ見ユ、

十九日、丙寅、御佛名、是日、詔シテ、服御常膳ヲ減ズ、

〔日本紀略〕朱雀院　七月十九日、己亥、詔服御常膳等物、宜減四分之一、

十二月十九日、詔服御常膳等物、宜減四分之一、

〔貞信公記抄〕十二月十九日、内御佛名始、減御服物詔書出、

〔政事要略〕二十八日上年中行事御佛名事　吏部記、承平二年十二月廿一日夕、參御佛名、

○貞信公記抄ニ據ルニ、日本紀略七月十九日ノ記事、恐ラクハ重出ナラン、

四分ノ一ヲ減ゼラル

内御佛名始

二十五日、壬申、荷前、

〔貞信公記抄〕十二月廿五日、荷前、山陵使右衛門督、稱病粟田山口歸去者、

出御ナシ

〔北山抄〕二年中要抄下十二月荷前事　安和二年、令勘申幼主御時例、承平○中略二○中略年不出御、○江次第同ジ、

二十八日、己亥、位記請印、

〔貞信公記抄〕十二月廿八日、有内印、暦博士弘範位記改給、今日渡職曹司行此事、

三十日、丁丑、追儺、

〔西宮記〕十二月追儺事　宰相行例

承平二年橘公頼、藤原實頼、○政事要略同ジ、

〔年中行事祕抄〕十二月追儺刻限事　參議二人行事、承平二、

〔樗嚢抄〕年中行事追儺　上卿不參、承平二參議爲代、　人々不參、

位記ヲ改ム

參議上卿代ト爲ル

碁手錢　是歳、御庚申ニ小宴ヲ行ハセラル、

〔西宮記〕臨時三御庚申御遊宴　承平二年、召内給所錢、爲碁手料、召贄酒兩殿賜(給イ)盃云々、

官歴　宮内卿正四位下兼覽王卒ス、

〔古今和歌集目錄〕諸王　兼覽王

〔古今和歌集目錄〕諸王　兼覽王　承平二年□月卒、

四位下、王氏、寛平二年二月河内權守、四年任侍從、六年八月中務大輔、九年五月民部大輔、七月十七日山城守、延喜六年正月七日從四位上、(給カ)給國、九月大舍人頭、十一年二月神祇伯、十八年二月彈正大弼、廿一年正月兼大和權守、延長二年正月七日正四位下、三年六月宮内卿、

〔中古歌仙三十六人傳〕兼覽王　仁明天皇孫、國康親王男、仁和元年正月七日敍從四位下、昌泰元年五月十日任山城守、延喜六年五月七日敍從四位上、九月十七日任大舍人頭、(十一年脫カ)二月十五日任神祇伯、十八年二月廿九日遷彈正大弼、廿一年正月三十日任大和權守、延長二年正月七日敍正四位下、三年十月十四日任宮内卿、

世系　〔本朝皇胤紹運錄〕

文德天皇

惟高親王

兼覽王正四下、宮内卿、神祇伯、母、

〔二中歴〕十二倭歌歴

歌人　親王　兼覽王、

歌什　〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　兼覽王神祇伯、宮内卿正四位下、惟喬親王御子、

物名、一、戀五、一、後撰集春中、二、秋中、一、戀二、一、戀三、一、古今集秋上、一、秋下、二、別、一、

〔古今和歌集〕八離別歌　かんなりのつほにめしたりける日、大みきなとたうへて、雨のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかり出て侍りける折に、さかつきをとりて、

兼覽王ト紀貫之　貫之

秋萩の花をは雨にぬらせとも君をはましてをしと社思へ

兼覽王ト女　兼覽王

とよめりけるかへし、

惜むらむ人の心を玄らぬまに秋の時雨と身そふりにける

〔後撰和歌集〕十一戀歌三　相玄りて侍りける人の、まうてこすなりて後、心に

もあらす、聲をのみきくはかりにて、又音もせす侍りけれは、遣しける、

讀人志らす

雁かねの雲居遙に聞えしは今はかきりの聲にそありける

かへし　兼覽王

今はとて行返りぬる聲ならはおひ風にても聞えましやは

〔後撰和歌集〕二春歌中　忘れ侍にける人の家に、花をこふとて、　兼覽王

年をへて花の便りにことゝはゝいとゝ仇なる名をや立なむ

兼覽王母ノ傳

○兼覽王母ノ事蹟、便宜合敍ス、

〔勅撰作者部類〕女部　兼覽王母　後撰集、春上、

〔後撰和歌集〕一春歌上　かれにける男のもとに、その住みけるかたの庭の木の枯たりける枝を折りて遣しける、　兼覽王母

萠出る木芽を見てもねをそなく枯れにし枝の春を知らねは

佛寺、

〔貞信公記抄〕十一月廿五日、法性寺講始、

法性寺講始叡山西塔院主

〔華頂要略〕百二十天台座主記一　西塔院主　阿闍梨辨日惠亮弟子、　承平二年五月廿二日補院主、年七十四、臈五十七、

〔法家相承次第〕諸門諸寺　西塔院主次第

仁照内供奉（増命）靜觀、僧正代、（尊意）　承平二年得替、

辨日内供奉（義海）法性房座主代、　承平二年五月廿二日任之、十一年、○僧官補任所收ノ寶幢院檢挍次第、二中歷同ジ、山下座主代、

公家、

〔貞信公記抄〕八月廿八日、今夜遷飛香舍、

忠平藤壺ニ遷ル

九月一日、庚辰、左大（藤原扶幹）辨來賀、令問事、入夜參内宿、

内裏ニ宿ス

十一月十日、入夜參入、宿桂芳坊、

桂芳坊ニ宿ス

〔法曹類林〕二百公務八座次　讚岐國山田郡目代讚岐惟範問、承平二年八月十日、右衞門少尉櫻井君弼傳問、

讚岐山田郡目代讚岐惟範同

承平二年雜載

助則ノ座位爭論ヲ決ス
問狀目代惟範調絹ヲ負フ
同職ノ座位ハ位階年齡ニ依ル
答狀
內位外位ノ別惟範ヲ上座ト爲ス
丹波國返牒
多紀郡大山莊預
調物使

甲國目代讚岐惟範、留省之後、滿年季受初八位兩階位記、爰有元留省之符、未到來八位之省符、因之負調絹也、雖然、依年季次序、受取(內カ)從八位上、而乙國目代本職少領外從八位下讚岐助則、論云、凡雖滿年季、旣無八位之省符、雖有位記、乍負調絹、何受從八位上、凡座於供□外從八位下之上者、又甲帶內八位上、乙帶外八位下、其內外之程、已有差別、又同職者、依位階年齡爲序之理、流來尙矣而已、乙論如此之由、望請明判知理非、謹問、

答、公式令云、文武職事散官朝參行立、各依位次爲序者、今如問狀、甲乙同共、爲國目代之職、甲帶內八位、乙帶外八位、同位之間、已有內外、於其序次、何無差別、然則八位省符、雖未到國、甲之位記、自非虛妄、依內外之別、可座乙上耳、

〔柏木氏所藏文書〕

「(別筆)丹波國返牒」

丹波國牒　東寺傳法供家衙

多紀郡大山庄預僧平秀、勢豐等稻之狀、

牒、衙去八月十一日牒九月九日到來偁、云々者、卽問勘彼郡調物使蔭孫藤原高枝申云、余部鄉專當撿校日置貞良申云、件鄉本自無地百姓口分班給在地

余部鄉專當撿校
口分田班給ナシ
守藤原忠文
忠平逆修ヲ七箇寺ニ行フ
忠平ノ第ニ出產アリ

鄉々、因茲當鄉調絹爲例、付徵鄉々堪百姓等名、方今平秀等、身堪同俗、加之年來依成申件調絹、付申播本帳平秀勢豐等名、各二丈者、爲合辨進件絹、罷向平秀等私宅、而遁隱山野、不曾相辨、仍件絹辨進之間、各稻二百揀許檢封、今須辨進彼絹之後、可開免件稻者、乞也察狀、以牒、

承平二年九月廿二日　　權大目長岑

守藤原朝臣(自署)「忠文」　　權　掾山田

介藤原朝臣　　大　目秦

權介藤原朝臣

諸家、

〔貞信公記抄〕二月廿四日、召行貞、仰遂(ヤ)古試事、

三月廿日、天台山修七个度逆修、誦經一日、同時七寺、

七月十五日、往東家見、

廿二日、有犬死事、

生死、

〔貞信公記抄〕九月廿三日、五條(忠平)有產事、

近江蒲生郡土田ノ莊田地券抄色目私印ヲ加フ

田券、

〔東寺文書〕 禮一之十二 ○山城

加宅私印

□□(源朝カ)臣後宅

□(近江國カ)□(蒲)生郡安吉郷字土田、庄田地券抄色目之事、

十九町三段百卅歩

□五拾捌町佰陸拾歩

□(前立カ)□券文涙町陸段佰涙拾歩

□(後立カ)□券文拾町參段參佰伍拾歩

□(權大目佐々カ)□貴峯雄立券文沽田地并拾町涙段陸拾餘歩

前立券沽涙町陸段佰涙拾歩

後立券沽參町貳佰伍拾歩

擬大領大友馬飼後立券文、沽田地涙段、

擬大領

京戸佐々貴豐庭後立券文、沽田地陸段、　已上各在安吉郷中、

京戸

京戸清瀧直道等後立券文、沽涙町參段佰歩、已上各在東生郷中、

郡老佐々貴山公

同岑雄沽　元郡老從七位上佐々貴山公房雄、

□(條カ)□廿□(里カ)廿八坪三段

十條十里廿三泉田一段□(七カ)十歩　西、　同岑雄沽　元安吉法師丸同乙國等沽土、

十一里廿三立柄卅二段　東中、　同岑雄沽　元安吉子佐美沽土、

先券
後券

卅五坪二段　同岑雄沽

十一條七里九屎田八段百廿歩　西、先券沽三段百廿歩、後券五段　同岑雄沽　元安吉子人沽土、

十屎田三段　東、　同岑雄沽

十里十八古川田三段百廿歩、中、先券一段、後券二段百廿歩、　同岑雄沽　元佐々貴三奴沽土、

「先」十二條七里七坪一段　西、　同岑雄沽

「後」(朱書下同ジ)十九坪一段　同岑雄沽

「先」廿四坪二段百六十歩　同岑雄沽　元繼成沽土、

「後」十一里九坪二段百歩　同岑雄沽

「先」十九坪一段三百歩　東、　同岑雄沽　元同三奴沽土、

「先」十三條七里廿五坪二段　西、　同岑雄沽　元人虫沽土、

「先」卅一坪一段　中、　同岑雄沽　元馬甘沽土、

「先」八里三下三田二段　同岑雄沽　元福丸沽土、

「先」五坪船道田三段百廿歩　同岑雄沽　元同福丸沽土、

莊ノ立地

「先」七坪一段東中、　同岑雄沽
「先」八船道田二段　同岑雄沽　元内守沽土、
「先」九阿坂田二段東、　同岑雄沽
「先」十深見田二段東、　同岑雄沽　元同内守沽土、
「先」十四船道田四段西北、　同岑雄沽
十五松本田五段田三段、南「先券」畠二段、□「後券」　同岑雄沽
「後」十九雲津田一段東、　同豐庭沽　元成人沽土、
「先」廿船相田四段西北、　同岑雄沽
「先」廿一阿坂田三段西北、　同岑雄沽　元淨主沽土、
「後」廿五門師田一段百歩西、　同豐庭沽　元眞曾沽土、
「後」九里廿坪三段西南　卽庄立地　同豐庭沽　元
「先」廿一坪三段北、　同岑雄沽　元中臣眞犬曾沽土、
「先」廿二土生田三段二百五十歩西、　同岑雄沽　元冬行沽土、
「先」廿三土生田一段三百歩東、　同岑雄沽　元
「後」廿四野田百八十歩東、　同岑雄沽　元

廿五川邊田五段東南「後」一段同豐庭沽「南」
「先」一段同岑雄沽土「中」畠地三段同岑雄沽「後券」元
「先」廿六野田二段東、　同岑雄沽　元
「後」廿七川原田一段西、　同岑雄沽　元
「先」廿八川原田二段西、　同岑雄沽　元
「後」廿九川原田一段三百歩東、　同岑雄沽　元
「後」卅三畠百廿歩　同岑雄沽　元
「先」卅四畠田二段西南、　同岑雄沽　元
「先」卅五恆本田二段東南、　同岑雄沽　元
「後」卅六間小田二百卅歩　同岑雄沽　元
「先」十里四坪一段東、　同岑雄沽　元名繼沽土、
「先」五枌田一段百六十歩西口、（北カ）　同岑雄沽　元永主并廣往等沽土、
「先」十五川除田一段東、　同岑雄沽　元
「先」十六夏身田二段西、　同岑雄沽　元
十七枚田四段東、　同岑雄沽　元

廿一川除田一段東、　同岑雄沽　元眞岑曾女沽土、
廿八夏身田一段西、　同岑雄沽　元
廿九夏身田一段東南、　同岑雄沽　元月丸沽土、
「先」十一里卅三坪二段東次、　同岑雄沽　元
「先」十二里四坪一段北、　同岑雄沽　元
「後」十四條六里十三荒木田一段南、　同岑雄沽　元
「先」十九土生田二段南西、　同岑雄沽　元
「後」十里卅一坪一段西北、　同馬飼沽　元
「後」卅二坪二段東北、　同馬飼沽　元
「後」十五條十一里二坪一段東、　同馬飼沽　元
「後」三坪三段東、　同馬飼沽　元
「後」八坪一段南、　同馬飼沽　元

莊ノ建地郡司

但十三條九里廿坪三段、同里廿五坪三段、十四條十里卅一坪一段、同里卅二坪一段、已上玖段爲庄建地、以前加坪、（十二カ）生町卅歩、

已上、元者爲濟所負當郡々司佐々貴岑雄、同大友馬飼、幷佐々貴豐庭等、各立券所沽進也、

「後」三條十六里廿五山本田九段
「後」十七里七岡本田三段
「後」八宇奈田中三段
「後」十三岡本田三段
「後」十四宇奈田五段百八十歩
「後」十九鳥渭（マヽ）田四段
「後」廿坂合田二段二百六十歩
「後」廿一池尻田九段
「後」廿五柴原田六段百八十歩
「後」卅二池尻田六段百八十歩
「後」卅三坂合田六段
「後」十八里三庭中平田二段
「後」四野田中四段
「後」八岡本田二段

「後」　廿三坂合田四段百歩
「後」　廿九岡前田二段百歩
「後」　廿野田百八十歩　七町三段百歩、　已上、元主清瀧保實、元者安吉乙清翁聖、

已上、元者安吉勝乙淨翁、以去昌泰三年十月廿三日券、卽傳買得清瀧保實領掌地也、其後其男同直道等、副本公驗、限直錢拾貫伍佰文所沽進也、

元主
本公驗
故大納言源昇ノ莊田地

右庄田地、元者先祖故民部卿大納言源朝臣家所被領掌也、其後故後朝臣傳領、而今依仰、勘錄券抄色目之由、進上如件、

事業　伴「是吉」（自署下同ジ）
蔭孫
蔭孫无位源朝臣「瞻」
源朝臣「觀」
正六位上源朝臣「晃」

承平三年癸巳

正月小戊寅盡朔

一日、戊寅、節會、是日、朝賀ヲ停ム、

〔日本紀略〕朱雀院　正月一日、戊寅、止朝賀、於南殿宴會、

〔西宮記〕臨時五　攝政院宮事　承平三年正月七日、貞信公（忠平）內辨、同元日御記、心神不調、不行內辨事、候簾中云々、

忠平病ニ依リ簾中ニ候ス

四日、辛巳、左大臣忠平、大饗ヲ行フ、

〔九條殿御記〕（年中行事二家本）○九條家本　大臣家大饗　同（承平）三年正月四日、辛巳、天陰、早朝參殿、大饗如例、蘇甘栗勅使、藏人修理亮源中明者、引出物料馬一疋、□（ニカ）位宰相祿法、白褂、紅花染褂、各一領、

蘇甘栗勅使
祿法

七日、甲申、節會、

〔西宮記〕臨時五　攝政院宮事　承平三年正月七日、貞信（忠平）公內辨、

忠平內辨ト爲ル

〔北山抄〕（一月年中要抄上　正月元日宴會事）　大臣起座、到東階下、外記、宣命橫插見參杖、跪而進之、（一說、內記進宣命、外記進見參、大臣卽給外記、令插一杖、初說者、依儀式、卽貞信公之敎也、見口傳、幷承平三年正月七日私記、後說、依內裏式見九條年中行事、及內記所舊記也云々、）

承平三年正月一日　四日　七日

○愚管記及ビ園太暦ノ延文四年正月十六日ノ條、元日節會次第等、異事ナキヲ以テ略ス、

八日、乙酉、後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　長者律師濟高　後七日、○後七日御修法阿闍梨名帳同ジ、

十三日、庚寅、除目、

〔公卿補任〕五

參議正四位下橘公頼、五十七、右兵衛督、正月十三日兼大和守、

從四位上藤當幹、七十、治部卿、正月十三日兼備前權守、

〔公卿補任〕五　承平五年　參議從四位下藤師輔、二十八、同三正十二右權中將、

〔公卿補任〕五　天慶二年　參議從四位上藤敦忠、三十四、同三正十二兼近江權介、

〔公卿補任〕五　天慶七年　參議從四位上源兼明、三十一、同三正十二播磨權守、

〔公卿補任〕五　天暦五年　參議從四位上源正明、五十九、承平三正十二兼加賀權守、

〔外記補任〕二

大外記外從五位下矢田部公望　正月十二日遷阿波介、

嶋田公鑒　正月十二日轉、四十七、

少外記多治實相　正月十二日任、元勘解由次官、文章生、

〔西宮記〕臨時五　攝政　院宮事　承平三年正月、○中略　同十三日、任公卿、貞信公爲内辨、

〔敍位除目執筆抄〕承平三正十縣召、十二日入眼、執筆、

十六日、癸巳、節會、

〔西宮記〕二　○前正月下　田家本　十六日女踏歌　同三年正月十六日、不御南殿、施簾、行如在禮云々、左大臣不參、令清蔭卿仰賜酒勅使云々、右大臣參飛香舍、奏見參、令右兵衛督公頼朝臣宣制云々、見公卿補任、令左大臣忠平攝政、右大臣仲平二月任、仍此記有疑、可尋云々、

二十一日、戊戌、參議從三位藤原玄上薨ズ、

〔日本紀略〕朱雀院　正月廿一日、戊戌、參議從三位行刑部卿藤原朝臣玄上薨、年七十八、

〔公卿補任〕五　參議從三位藤玄上、七十八、刑部卿、正月廿一日薨、生年齊衡三年丙子、在官十五年、

〔公卿補任〕參議從四位上藤玄上、六十四、故中納言諸葛五男、母宮内卿從三位

忠平内辨ト爲ル

簾ヲ垂レテ如在ノ禮ヲ行フ

賜酒勅使

官歴

世系

百濟勝義女、　齊衡三年丙子生、元慶七二月刑部少丞、（元上野少掾、）仁和二正十六轉大丞、同四十二十五藏人、寛平二正廿八木工權助、同三三九轉助、同四正廿三備前權介、同五正廿一從五位下、（内宴、藏人、）同六九十三下總介、同七八十六迁權介、同九正廿五中務少輔、昌泰二正十一少納言、同四正三昇殿、延喜三正十一兼大和介、同四正七從五位上、同五正十一兼播磨權介、同九正十七正五下、同十一正七從四下、七月廿日如故昇殿、同十二二十五右馬頭、同十三四十五右中將、同十四正十三兼伊與權守、同十六正月兼近江權守、三月廿八日轉左近權中將、同十七正七從四位上、同十九年正月廿八日任參議、六月三日兼刑部卿、同廿年正月卅日兼近江權守、同廿三年正月廿九日兼播磨權守、延長二年正月七日正四位下、同三年正月卅日兼讚岐守、同五年正月十二日兼近江守、（以上○四、）承平二年正月七日從三位、同廿一日兼美濃守、（以上○五、）

〔尊卑分脈〕（藤氏眞作孫）

諸葛

- 玄上（ハルウラ）　少納言、參議、刑部卿、中務大輔、左馬頭、左中將、木工助、從三位、歌人、琵琶上手、琵琶主、玄上事、此器卽付本人名字、日本靈寶也、承平三正廿一薨、七十、母致仕宮內卿從三百濟王勝義女、（藏）

室

男近光

- 輔仁　從五下、歌人、後撰集作者　母安部氏、
- 女子　延喜前坊妾、（保明太子）　母喜、
- 女子　式明親王室、後配敦忠卿、　母式、

〔伊勢集〕（玄上）

はるかみの宰相の北方のまへよりわたり給とて、せうそこをのみいひ入給へりけれは、月のあかき夜になん、

雲井にてあひかたらはぬ月たにもわか宿過て行時はなし

〔新儀式〕（五臨時殿上小舍人下加元服事）

兩候御前、盃酌之後、近光聽昇殿、其父參議玄上朝臣、相代於庭中拜舞、

〔禁祕抄〕（上禁中事）　一玄上

累代寶物也、置中殿御厨子、根源樣人不知之、掃部頭貞敏渡唐之時、所渡琵琶二面其一歟、紫檀直甲也、○（略中）撥面文消、所々有赤色、不知其繪、代々有沙汰、決、俊房公曰、良道云琵琶移玄上、彼撥面文不可違、彼唐人打毬形也、或云、玄象呑青鉢之水、所謂號玄象、又玄上宰相獻延喜帝、仍號玄上、兩說也、但妙音院（師長）入道付玄上說歟、

〔權中納言兼輔卿集〕（玄上）

はるかむの宰相、左近中將にて、紅梅を折ておこせた

（玄上ト藤原兼輔ノ贈答歌）

琵琶玄上ヲ醍醐天皇ニ獻ズ

りしに、

君かため我をるやとの梅花色にそ出る深き心は（○續後撰和歌集、同ジ、）

とある返し、

色も香もともに匂へる梅花ちるうたかひのあるや何なり

○藤原輔仁、藤原玄上女ノ事蹟、左ニ附載ス、

〔倭歌作者部類〕二五位　藤原輔仁（春宮少進刑部大判事、參議玄上子、至延長七年、）　後撰集、一、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　輔臣（四位、藤原、イ輔仁、參議藤原玄上子、從五位下、）　後撰集雜二、一、

〔後撰和歌集〕十六雜歌二　或所のわらは女、五節見に南殿にさふらひて、杏を失ひてけり、すけむとの朝臣くら人にて、くつをかして侍りけるをかへすとて、

立ち騒く浪まを分けて潛きてし沖の藻屑をいつか忘れむ　讀人玄らす

かへし

潛きてし沖の藻屑を忘れすは底のみるめを我にからせよ　輔臣朝臣

〔二中歴〕十二倭歌歴　後撰集歌人　玄上女

（玄上女ノ傳歌人）

（藤原輔仁ノ傳）

歌什

（玄上女ト大輔ノ贈答歌）

〔倭歌作者部類〕三庶女上　參議玄上女　後撰集、一、延喜十九年參議刑部卿、承平二年從三位、三年薨、

〔後撰和歌集〕二十哀傷歌　先坊うせ給ひての春、大輔につかはしける、五十八、

新玉の年こえつらしつねもなきはつ鶯のねにそなかるゝ　玄上朝臣女

かへし

ねにたてゝなかぬ日はなし鶯の昔のはるを思ひやりつゝ　大輔

同し年の秋、

諸共になき居し秋の露はかりかゝらむ物と思ひかけきや　玄上朝臣女

人をなくなして、限なく戀ひて、思ひいりてねたる夜の夢にみえけれは、思ひける人に、かくなむといひつかはしたりけれは、

時のまも慰めつ覽覺めぬまは夢にたに見ぬ我れそ悲しき　玄上朝臣女

かへし

悲しさの慰むへくもあらさりつ夢の内にも夢と見ゆれは　大輔

二十三日、庚子、群盜横行スルニ依リ、諸衛ヲシテ、結番夜行セシム、是日、近衛府ノ陣ニ鬪爭アリ、

〔日本紀略〕朱雀院　正月廿日、丁酉、夕左大史坂上經行、於皇嘉門前、爲群盜被打奪衣裳、僅許單衣等、

廿三日、庚子、仰左右衛門兵衛府馬寮結番、每夜令巡檢之、今夕陽明門內近衛陣直大澤有春、爲同府近衛小槻滋連被忍怒、於酒殿北邊、以大刀被傷之、卽逃去、有春僅存命、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　正月廿三日、庚子、上卿召久永朝臣、仰云、近日群盜入交京中、掠取人物、宜召仰諸衛結番、令勤每夜巡檢、以左右馬寮御馬充之者、

是月、大外記正五位下伴久永卒ス、

〔外記補任〕二　大外記正五位下伴久永、六十五、正月卒、

〔外記補任〕二　少外記伴久永　延喜十二年正十五任、勘解由判官、進士、卌四、同十四年正十二任大外記、同十五年正七敍從五位下、十二日任□□□（淡路守カ）、同十六年三月廿八日更任、元淡路守、同十九年六三兼讃岐權掾、同廿一年正月補侍從、延長二年正月七日敍從上、同三年正月卅日兼勘解由次官、承平元年十一月十三日兼美乃權介、同二年十一月十六日敍正五位下、次官、

參議藤原實賴ノ室家卒ス、

〔日本紀略〕朱雀院　正月某日、參議藤原朝臣實賴室家（時平ノ女）逝去、

〔尊卑分脈〕藤氏冬嗣孫

時平
- 女子（賴忠母、實賴公北方、）

〔尊卑分脈〕藤氏實賴孫

實賴
- 敦敏（母左大臣時平女、）
- 賴忠（母同敦敏、）
- 齊敏（母同敦敏、）

醍醐天皇ノ第八皇女

二月大　盡丁未朔

五日、辛亥、修子内親王薨ズ、

〔日本紀略〕朱雀院　二月五日、辛亥、無品脩子内親王薨、先帝第八皇女、

〔一代要記〕醍醐天皇女　脩子内親王　母満子女王、民部大輔輔相王女、承平三年二月十六日薨、

〔本朝皇胤紹運録〕

醍醐天皇

修子内親王　无品、母更衣満子女王、民部大輔相輔女、

○修子内親王ノ薨日、一代要記十六日ニ作ル、今日本紀略ニ據リテ掲書ス、内親王、兵部卿元良親王ノ四十ノ算ヲ賀シ給フコト、延長七年十月十四日ノ條ニ見ユ、

八日、甲寅、皇太后、御封三百戸、及ビ御季御服等四分ノ一ヲ返進アラセラル、

〔符宣抄〕別本御季御服雑物事付皇太后宮　太政官符大和、山城、摂津、河内、和泉、近江等國司、

應進上中宮職諸節御贄、毎節七荷半事、○中略

依今年二月八日令旨、（屋子）被返進御封三百戸、并御季御服等四分之一、○中略

承平三年十一月十日

○中務、民部等ノ各省ヲシテ、中宮職ノ御季御服雑物等ヲ返納セシムルコト、三月四日ノ條ニ見ユ、

十三日、己未、除目、大納言藤原仲平ヲ右大臣ニ任ズ、尋デ、左近衛大將ヲ兼ネシム、

〔日本紀略〕朱雀院　二月十三日、己未、詔以大納言正三位藤原朝臣仲平爲右大臣、

〔公卿補任〕五

右大臣正三位藤仲平、五十九、二月十三日任、左大將如元、

大納言正三位藤恆佐、五十四、二月十三日任、

中納言從三位藤扶幹、七十、二月十三日任、同日敍從三位、

參議正四位下橘公頼、五十七、右兵衛督、二月十三日遷左衛門督、

〔西宮記〕二正月下　○前田家本　大臣召　承平三年二月十三日吏部記云、以左大將仲平爲右大臣、以左衛門督恆佐爲大納言云々、了就新位拜舞退、延喜十四年、道明任大納

敍位

仲平等拜舞

言、解佩劔進新位、今日不解進、出門後解之云々、參議已上座二机、辨少納言一机、外記史二机、飲酣羞湯漬、更就穩座、肴各二折敷進餛飩云々、了新大臣不劔佩、是勅授人也、因昇進脫之、未知其由之、

〔西宮記〕正月下大臣召　枇杷大臣初任時、母屋設饗、湯漬如例、

〔小右記〕寛仁元年十一月廿一日、乙卯、○中略　貞信公左大臣攝政之時、承平三年二月十三日、以兄仲平卿任右大臣、彼日內辨則貞信公、十四日、爲被賀丞相之慶、向給右大臣第也、攝政左大臣有向兄右大臣第之例、

〔左經記〕寛仁元年十一月廿一日、乙卯、又大入道殿被任太政大臣之時作法如何、彼間爲藏人頭云々、大將被申云、○中略　貞信公左大臣攝政之時、去承平三年二月十三日、以兄仲平卿被任右大臣、彼日內辨貞信公云々、同十四日、貞信公御坐左大臣堀河亭、賀丞相之慶給、

〔初任大臣大饗雜例〕大將還宣旨事

承平三年二月十三日、有任大臣、幷大中納言事、

大納言仲平卿任右大臣、

十七日、癸亥、大納言恆佐卿著左仗、召兵部大丞藤原茂實、仰云、右大臣如舊、令兼任左近衛大將者、

忠平內辨ト爲ル

忠平兄仲平ノ堀河邸ニ到リテ慶賀ス

恆佐左仗ニ就キテ兼任ノ事ヲ仰ス

〔大和物語〕上　おほきおとゝは、大臣になり給て年比おはするに、枇杷のおとゝはえなり給はて、ありわたりけるを、つゐに大臣になり給にける御悅ひに、おほきおとゝ、梅をおりてかさし給ふて、

をそくとく終に咲きける梅の花たか植をきし種にかあるらん○新古今和歌集、二句ヲ終ニ咲きぬるニ作ル、

とありけり、その日の事ともを歌などにかきて、さいくうにたてまつり給て、三條の右の大殿の女御、やかてこれにかきつけ給ひける、

いかてかく年きりもせぬ種もかな荒ゆく庭の陰とたのまむ

とありけり、其御返し、齋宮よりありけり、わすれにけり、かくて願ひ給けるかひありて、左のおとゝの中納言わたり住給ひけれは、たねみなひろこり給て、かけおほく成にけり、さりける時に齋宮より、

花盛春はみにこん年きりもせすといふ種はおひぬとかきく

〔大鏡〕三左大臣仲平　このおとゝは、○中略　貞信公よりは御兄にあたらせ給へと、廿年まて大臣になりおくれ給へりし、つゐになり給へれは、おほきおほいとのゝ御よろこひの歌、○歌、大和物語ニ同キヲ以テ略ス、

忠平ト女御藤原能子ノ贈答歌

柔子內親王ノ御歌

庇ノ大饗ヲ行フ
忠平ヲ横座ニ居ウ

やかてその花をかさして、御對面の日よろこひ給へる、ひさしのたいきやうせさせ給けるにも、よこさまにすへさせ給けるこそ、どしころすこしかたはらいたくおほされける御心とけて、いかにかたみにこゝろゆかせ給へりけんと御あはれひめてたけれ、

仲平ト忠平ノ贈答

〔續後撰和歌集〕十六雜歌上　枇杷左大臣（仲平）、はしめて大臣になりて侍りける喜ひに罷りて、　貞信公（忠平）

折りてみるかひもある哉梅の花二たひ春に逢ふ心地して

返し　枇杷左大臣

埋木に花さく春のなかりせはまちかき枝も誰か折らまし

藤原公忠ノ歌

〔公忠朝臣集〕枇杷（仲平）のおとゝの左（右）大臣に成給へる御よろこひに、おほ（忠平）き大殿わたり給へる日、御あるしありて、あるしも、また人も歌よみ給ひけるに、

色もかもことしの春は梅の花ふたへに匂ふこゝちこそすれ

〔袋草紙〕四　オソクトクツキニサキヌル梅花トイフ歌ハ、貞信公歌云々、而公忠辨集云、枇杷大臣左（右）大臣ニ成給ヘル年ノ春、御慶ニオホキヲトゝ、オ

藤原敦忠ノ歌ナリトノ説

ハシマシタレハ、御アルシ、コヨナクツカフマツリテ、御カワラケアマタゝヒニナリケルホトニ、權中納言敦忠君ノ御前ノ梅花ヲカサシテ、

遲くとくつゐに咲ぬる梅の花たか植をきし種にか有らん

オホキヲトゝ、

折て見るかひもある哉梅の花ふたゝひ春にあふ心ちして

ツカフマツル、

色もかもことしの春は梅の花二たひ匂ふこゝちこそすれ

如此ハ敦忠卿歌歟、

十八日、甲子、中納言從三位藤原兼輔薨ズ、

〔日本紀略〕朱雀院　二月十八日、甲子、中納言從三位兼行右衞門督藤原朝臣兼輔薨、年五十七、

〔公卿補任〕五　中納言從三位藤兼輔、五十七、右衞門督、二月十八日薨、生年元慶元年丁酉、頭五年、參議中將七年、少納言七年、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　二月十八日、甲子、中納言藤原兼輔薨、

〔一代要記〕朱雀天皇中納言　藤兼輔　從三位、左衞門督、年五十三、承平三年二月

十八日卒、五十七、

〔古今和歌集目録〕納言宰相　藤原兼輔　承平三年二月十八日薨、歳五十七、號堤中納言、元慶元丁酉生、〇三十六人歌仙傳同ジ、

堤中納言ト號ス

〔紀貫之集〕九哀傷部　同し（兼輔）中納言、うせ給へるとしのまたのとしの一日の日、かの中納言の御家に奉る、

紀貫之ノ追悼歌

から衣あたらしく立年なれとふりにし人のなほや戀しき

〔公卿補任〕四　參議從四位下藤兼輔、四十五、左大臣冬嗣公曾孫、内舍人良門孫、右中將利基六男、母伴氏、寛平九七七昇殿、元春宮殿上、今月三日踐祚、同十正廿九讃岐權掾、殿上非藏勞、四月八日如故昇殿、昌泰四二十九右衞門少尉、延喜二正七從五下、殿上非藏人勞、二月廿一日昇殿、同三二廿六内藏助、同七二廿九右兵衞佐、助如元、同九正廿七藏人、同十正七從五上、同月日右衞門佐、助如元、同十三正廿一（八カ）兼左少將、同十四正十二兼近江介、同十五正七正五下、同十六三廿八兼内藏權頭、同十七正廿九轉頭、八月廿八日藏人頭、十一月十四日從四位下、同十九正廿八兼備前守、同日兼左近權中將、同廿一年正月卅日任參議、二月七日左近衞權中將如元、同廿二年正月七日從四位上、延長二年二月一日兼近江守、同五年

官歷

東宮ノ殿上ヲ聽サル

殿上非藏人ノ勞

正月十二日任權中納言、卽敍從三位、超五人、同八年十二月十七日任中納言、兼右衞門督、

〔古今和歌集目録〕納言宰相　藤原兼輔　于時從五位下内藏助、左近衞中將從四位上利基六男、〇略中昌泰四年二月任左（右カ）衞門少尉、〇略中三年（延喜）正月任内藏助、六年正月七日從五位上、〇略中十年正月廿七日任左（右カ）兵衞佐、助如元、〇略中十七年〇略中同廿三日爲藏人頭、〇略中同二（二十一年）月七日昇殿、〇略中延長二年二月兼近江權守、〇略中同四（五年）月廿九日昇殿、〇三十六人仙傳同ジ、

〔權中納言兼輔卿集〕兵衞のつかさはなれてのち、庭に紅梅をうへて、花おそく咲ければ、

宿ちかくうつして植しかひもなく待とほにのみ匂ふ花哉

〔後撰和歌集〕一春歌上　兼輔朝臣のねやの前に、紅梅を植ゑて侍りけるを、三とせはかりの後、花さきなとしけるを、女ともその枝を折りて、みすのうちより、これはいかゝと、いたして侍れは、

貫之

春毎に咲增るへき花なれは今年をもまたあかすとそ見る

承平三年二月十八日

はしめて、宰相になりて侍りける年になむ、

〔紀貫之集〕七賀部　藤原兼輔中將の、宰相になれるよろこひにいたれるに、

うひ花さける紅梅を折て、ことしなんさきはしめたりと、いひたるに、

〔後撰和歌集〕十五雜歌一　兼輔朝臣、宰相中將より中納言になりて又の年、の

り弓のかへりたちのあるしにまかりて、これかれ思ひをのふるついてに、

兼輔朝臣

故さとのみかさの山は遠けれとこゝは昔のうとからぬ哉

〔尊卑分脈〕藤氏良門孫

利基

- 兼輔（非藏五藏）中納言、從三、參議、中少將、兵衛佐、承平三二十八薨、五十五、號堤中納言、母伴氏、
  - 雅正　刑部大輔、從五下、豐前守、周防守、母、
  - 清正（藏）紀伊守、從五下、母、
  - 守正（藏）修理亮、母、
  - 庶正（藏）左兵衛、天曆元三卒、母、
  - 公正　母、
  - 遠理　大膳大夫、若狹守、從四下、母、
  - 爲資（使交）大藏大輔、河內守、從四下、康平八八八卒、八十八、母、
  - 資國（藏）皇后宮大進、伊賀守、正五下、母、

〔大和物語〕上　堤（兼輔）の中納言内の御使にて、大内山に院のみかと（字色）おはしますに參り給へり、物こゝろほそけにておはします、いと哀なり、高き所なれは、雲は玄もよりいと多くたち登るやうにみえけれは、かくなん、

白雲の九重にたつ峰なれは大内山といふにそ有ける　○新勅撰和歌集十九雜歌四同ジ、權中納言兼輔にしも立つるは大内山といへはなり、兼輔卿集、白雲の九重ニ作ル、

伊勢の國に前齋宮（ヲヲ）のおはしましける時に、つゝみの中納言勅使にて下り給ふて、

吳竹の世々の都と聞からにきみは千歳のうたかひもなし　○新勅撰和歌集同ジ、

御返しはきかす、彼齋宮のおはします所は、竹の都となんいひける、○中略

〔後撰和歌集〕十三戀歌五　忍ひて通ひ侍りける人、今歸りてなとたのめ置き

承平三年二月十八日

院御所ニ使シテ歌ヲ詠ズ

伊勢勅使ノ時歌ヲ齋宮ニ上ル

兼輔ト少將内侍ノ贈答歌

て、おほやけの使に、伊勢國にまかり、歸りまてきて、久しうとはす侍り
けれは、　少將內侍

人はかる心の隈はきたなくてきよき渚をいかてすきけむ
かへし　兼輔朝臣

誰か爲にわれか命を長濱の浦にやとりを玄つゝかはこし

女桑子入內ノ後奉ル歌

〔大和物語〕上　堤の中納言のきみ、十三のみこ（登明）の御母御息所（桑子）を、內に奉りけるはしめに、御かとはいかゝおほしめすらんなと、いとかしこく思なけき給けり、さてみかとによみて奉り給ける、

人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉

先帝いと哀に思しめしたりけり、御返しありけれと、人えしらす、

相撲ノ還饗ニ詠ズトノ說

〔後撰和歌集〕十五雜歌一　太政（忠平）大臣の左大將にて、すまひのかへりあるし玄侍りける日、中將にてまかりて、事をはりて、これかれ罷りあかれけるに、やんことなき人二三人はかりとゝめて、まらうとあるし酒あまたたひの後、醉にのりて子共のうへなと申しけるついてに、

兼輔朝臣　○歌、前揭ノ大和物語ニ同ジキヲ以テ略ス、

〔大和物語〕下　三條（定方）右大臣のむすめ、つゝみの中納言（兼輔）にあひはしめ給けるあひたは、くらのすけにて、內の殿上をなんし給ける、女はあはんの心やなかりけむ、心もゆかすなんいますかりける、男も宮つかひし給けれは、えつねにもいまさゝりけるころ、女、

たきものゝくゆる心はありしかと獨はたへてねられさり鳧

返しは、上手なれはよかりけめと、えきかねはかゝす、

又おとこ、日ころさはかしくてなんえまいらぬ、かくいそきまかりありく、內にも、えまいりこぬ事をなん、いかにと限りなく思給ふるとありけれは、

さはくなる內にも物は思ふ也我つれ〳〵をなにゝたとへん

となんありける、

藤原定方ノ女ト贈答ス

〔後撰和歌集〕三春歌下　三月の下の十日計　○權中納言兼輔卿集三月一日ニ作ル、に、三條の右大臣、兼輔の朝臣の家にまかり渡りて侍りけるに、藤の花さける遣水のほとりにて、かれこれ大みきたうへけるついてに、

定方等ヲ招キテ藤花宴ヲ設ク

三條右大臣

定方及ビ貫之ト贈答ス

限なき名におふ藤の花なれはそこゐもしらぬ色の深さか　○權中納言兼輔朝臣

輔卿集、下句ヲそこゐもしらす色の深さにニ作ル、

色深くにほひしことは藤浪のたちもかへらて君とまれとか　○權中納言兼輔朝臣

輔卿集、下句ヲ立もかへらす君とまれとそニ作ル、

兼輔貫之等ト樂ヲ奏ス定方等一宿ス

棹させと深きもしらぬ藤なれは色をも人もしらしとそ思ふ　貫之

ことふえなとしてあそひ、物語なとし侍りける程に、夜更けにけれは、まかりとまりて、又のあしたに、　三條右大臣

昨日見し花の顔とてけさみれはねてこそ更に色增りけれ　兼輔朝臣

七夕殿上ニテ歌ヲ詠ズ

ひと夜のみねてし歸ちは藤の花心とけたる色みせむやは　貫之

〈權中納言兼輔卿集〉七日、うへのさむらひに、これかれ歌よむに、

七夕をわたして後は天河浪たかきまて風もふかなん

秋、初瀨にまうてゝ、紅葉のなかるゝを見て、

初瀨ニ詣ヅ

からにしきあらふとみゆる立田河大和の國のぬさにそ有ける

こないしのかみの、住給ひし時、藤壺にて、菊の賀みかとのせさせ給ひけるに、

菊ヲ獻ズ

紫の一もときくは萬代をむさしのにこそ賴むへらなれ

御前に菊たてまつるとて、

但馬ニ入湯ス二見浦ニ宿ス

けふほめて雲井にうつす菊の花天つ星とや明日よりはみん

〈古今和歌集〉九　羈旅歌　但馬國の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうへけるに、共にありける人々、歌よみけるついてによめる、　藤原かねすけ

夕つく夜覺束なきを玉くしけ二見の浦はあけてこそみめ

仲平ノ枇杷殿ニ梅ヲ賞ス

〈權中納言兼輔卿集〉梅花おもしろかりけるを見にとて、ひわ殿におはしけるに、

やと近く匂はさりせは梅花風のたよりに君をみましや

水無瀬殿ノ花見ニ仲平ト贈答ス

いそくことありて、さいたちて歸るに、かのおとゝ(仲平)の、みなせ殿の花おもしろけれは、つけて送る、

櫻花匂ふを見つゝかへるにはしつ心なきものにそ有ける

京に歸たるに、かのおとゝの御返事、

立かへり花をそわれは恨こし人のこゝろののとけからねは

父ノ喪ニ服ス

〔續後撰和歌集〕十八雑歌下　父(利基)の思ひに侍りける頃、さき立ちて、同しさまなる人に遣しける、　中納言兼輔

ふち衣よそのゆゑと見しものをおのか涙をなかしつるかな　○權中納言兼輔

輔卿集よそヲ人ニ、涙をヲ涙ニニ作ル、

諒闇中母ノ喪ニ遭フ遙ニ土佐守貫之ト贈答ス

〔紀貫之集〕九哀傷部　延長八年九月日、京極(兼輔)中納言の諒闇のあひたに、はゝのふくになりて、

ひとへたにきるは佗しき藤衣かさぬる秋をおもひやらなん

とよみて、土佐國にあるあひたに、送られたりし返し、

藤衣かさぬる思ひおもひやる心はけふもやすまさりけり

〔權中納言兼輔卿集〕はつきはかりに、親の思にて、久しくえあふまし人に、

喪中山寺ニ幽居ス

黑染の衣もよな〳〵へたてつゝおほつかなくや秋を過さん

おやの思ひにて、山寺にこもれるに、いつくにてと、人たつねたりける返事、

足引の山へに今はすみそめの衣の袖のひる時もなし

歲暮ニ妻ヲ追慕シテ貫之ト贈答ス

〔後撰和歌集〕二十哀傷歌　妻のみまかりての年の冬はすのつこもりの日、ふることいひ侍りけるに、　兼輔朝臣

亡き人の共にし歸る年ならは暮行く今日は嬉しからまし

かへし　貫之

こふるまに年のくれなは亡人の別やいとゝ遠くなりなむ　○紀貫之集なりなむヲ成らんニ作ル、

老ヲ歎ジテ貫之ト贈答ス

〔紀貫之集〕九哀傷部　兼輔中將のめの、うせにける年のしはすの晦日にいたりて、物語りするついてに、昔を戀しのふるあいたによめる、○歌略ス、上ニ引ク所ノ後撰和歌集ニ同ジ、

〔後撰和歌集〕八冬歌　雪のあした、老を歎きて、

承平三年二月十八日

述懷

ふりそめて友まつ雪はうは玉のわか黑髪の變るなりけり
かへし　貫之

名臣

黑髪の色ふりかふる白雪の待出つる友は疎くそありける
又　貫之

歌人

黑髪と雪との中のうきみれは友鏡をもつらしとそおもふ
かへし　兼輔朝臣

年毎に玄らかの數をます鏡見るにそ雪のともは玄りける

〔權中納言兼輔卿集〕さかのおほみゆきのついてに、

年たけてあひつることを數ふれは我もおきなに成そしにける

としことに鳴つる鴈と聞しまに我はひたすら老そしにける

〔二中歷〕十三名人歷　名臣　堤中納言兼輔、

〔二中歷〕十二倭歌歷

歌人　公卿　堤中納言兼輔、

歌仙人卅六人　兼輔卿、

歌什

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部

古今集　別、一、旅、一、戀五、一、

兼輔　從三位中納言右近中將藤原利基男延長五年中納言八年兼右衞門督承平三年薨、

雜體、原詠、兼輔歌、一、藤原朝臣、

後撰集　春上、二、春下、三、夏、一、秋上、一、冬、二、戀二、一、戀三、一、戀五、二、戀六、一、雜一、三、雜四、二、哀、二、別、二、

家集

新古今集　冬、一、戀一、納言中、二、戀四、

新勅撰集　賀、一、戀三、一、戀五、三、雜四、一、

續後撰集、春上、一、雜下、二、

兼輔ト藤原仲平

玉葉集　春下、一、雜四、一、

續千載集　戀三、

續後拾遺集　冬、一、物名、一、戀一、一、

風雅集、秋上、一、

新千載集　春上、一、春下、一、

新拾遺集、別、一、

新後拾遺集　別、一、

新續古今集、

〔國朝書目〕下三十六人和歌集　仙集　藤原兼輔集

〔續群書一覽〕六法帖　堤中納言家集　一帖紀貫之筆

此書は、堤中納言兼輔の家集を、紀貫之の書給へるか、希に傳はりたるを、板にゑりたるなり、假字古法にかなひ、うたよみのみるへき書なり、

〔權中納言兼輔卿集〕櫻の花のちるを、かきあつめて、下さふらひにをかせ給へりけるをみて、ひはのおとゝ（仲平）、

ちる花をあたなる物といふなれは斯てのみ社みるへかりけれ

そのついてに、

ひろひ置てみる人しあれは櫻花ちりての後の悔しさもなし

兼輔ト平中興

〔權中納言兼輔卿集〕平のなかきか、はりまよりのほり、さたすること有て
いまゝてまいらぬと、いひたる返事に、
時鳥なきまふ里のしけゝれは山へに聲のせぬもことはり○中略

兼輔ト藤原さねき

戀わたる七夕つめにあらはこそけふしも人にあはんと思はめ
是は、かのさはること有てと、云たりしなかきか、あり〳〵て、七日に來
けれは、内のさふらひにて、いひ出したりける、

〔權中納言兼輔卿集〕藤原のさねきか、藏人よりかうふり給はりて、あす出
んとするに、

兼輔ト桂御息所

むは玉のこよひはかりかあけ衣あけなは人をよそにこそみめ

〔權中納言兼輔卿集〕かつらの御息所、なにことにか、そうせ給て、返事おそ
しとて恨み給けれは、

兼輔ト伊勢

つゝむへきほとならなくに時鳥いかゝしてかはふる聲のする

〔伊勢集〕下　京極なる家にいきて、そのわたりなる人（兼輔）に、
此里のゑるへに君も出こなん都のほりにわれはきにけり

兼輔ト幽仙法師

〔權中納言兼輔卿集〕幽仙法師かとし久しく御導師つかうまつりて、御佛
名のあしたに、律師になりけるを見て、
足引の山のかけはしふみのほりけふこそ嶺の花はおるらめ
この律師にかはりて、そうせる、
日の光ちかき朝はいたゝきの霜こそとけて袖ぬらしけれ

兼輔ノ代作

〔後撰和歌集〕十戀歌二　兼輔朝臣にあひはしめて、常にしもあはさりける
程に、　清正母
ふり解けぬ君かゆきけの雫ゆゑ（さ）袂（へ）にとけぬこほりしに鳧

兼輔ト清正ノ母

〔紀貫之集〕八別部　兼輔の兵衛督の、かも河のほとりにて、左衛門尉みはる
のありすけの、甲斐へ下るに、餞したる日よめる、
君をゝしむ泪おちます（し歟）此川のみきはまさりてなかるへらなり

第宅賀茂川堤ニ住ス

〔紀貫之集〕九哀傷部　京極（兼輔）の中納言うせ給ひて後、粟田に住み給ふ所あり
けるに、そこにいたりて、前栽に松竹なとあるをみてよめる、
松もみな竹も別を思へはや泪のしくれふる心地する

晩年粟田ニ住ス

〔新古今和歌集〕九離別歌　逢坂の關近きわたりに住み侍りけるに、遠き所
にまかりける人に餞し侍とて、　中納言兼輔

逢坂ノ關附近ニ住ス

逢坂の關に我宿なかりせは別るゝひとはたのまさらまし

○兼輔、尙侍藤原滿子ノ四十賀ニ和歌ヲ詠ズルコト、延喜十三年十月十四日ノ條ニ、大江千古ヲ餞スルコト、延長二年五月二十九日ノ條ニ、藤原定方ト贈答スルコト、承平二年八月四日ノ條ニ、藤原玄上ト贈答スルコト、本年正月二十一日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔太子傳傍註〕

○東京帝國大學附屬圖書館所藏

著書聖德太子傳曆

（表紙見返端書）古本奥書云、延喜十七年九月藏人頭兼輔撰、又云、此書本平兼輔卿貫首之時所撰也云云、

按兼輔者盛光孝天皇曾孫篤行賜平姓、其子兼輔盛兼輔者也。延喜十七八廿八補藏人頭、後任中納言、右衞門督、承平三二十八薨、世號堤黃門是也、今度應尹宮所望、清書此傳文、加愚點者也、

寛元二年八月

〔群書一覽〕

三物語類

堤中納言物語　寫本　十帖　二卷

爲長　委在撮要講要

藤原兼輔の作といへり、兼輔は、勸修寺家の元祖良門の孫、右中將利基の子也、加茂川の堤の下に家居せられしによりて、堤中納言といへりと云々、帖の目錄、花櫻をおる少將、このついで、むしめづる姫君、ほど〳〵のけさう、あふさかこえぬ中納言、かひあはせ、おもはぬかたにとまりする少將、はなだの女御、はいずみ、よしなしごと、毎帖ものがたり一條をかきたり、

〔嬉遊笑覽〕

或問附錄

堤中納言物語

薨ず、虫めづる姫君の卷、ある人々い心つきたるあるべし、さすがにいとをしとて、人に似ぬ心のうちい、かはむしの名をとひてこそいみまほしけれ、むまの佐、かは虫にまきるゝまへのけのするにあたるばかりの人いなきかなといひて、わらひて返りぬめり、按るに、和名抄兼名苑云、髯虫、一名烏毛虫和名加波無之、と見えて、今いふ毛むしなり、彼姫君の陰毛を毛むしになすらへて、右馬佐か嘲りたるなり、

〔墨水遺稿〕

一豆部古物語類字鈔上

堤中納言物語

按に、此物語二種あり、一種は堤中納言の事跡を作れり、此中納言は贈太政大臣藤良門公孫、右中將利基朝臣四男、中納言從三位兼右衞門督兼輔卿なり、承平三年二月十八日薨去し給へりき、一種は物語十章をつどへて、一部

としたる草紙なり、上下二卷の本としたり、

第一章　花ざくらをゝる少將
第二章　このついで
第三章　むしめづる姫君
第四章　ほど〳〵のけさう
第五章　逢坂こえぬ權中納言
第六章　かひあはせ
第七章　おもはぬかたにとまりする少將
第八章　はなだの女御
第九章　はひずみ
第十章　よしなしごと

以上十段なり、但これを何等の故に、堤中納言とは標したりけむ、もし彼卿の作などや傳へし、さばかりの古物語にもあらじを、いと〳〵不審しき事なり、

〔越路の家つと〕中納言兼輔　賀茂川の堤と云所に住給ひしより、堤中納言とも申せり、

兼輔ノ作ニ非ストノ説

第宅ノ所在

二十三日、己巳權律師蓮舟ヲ東寺長者ニ補ス、

〔東寺長者補任〕一　權律師蓮舟（眞言宗、東寺、）　二月廿三日加任三長者、七十三、三人第二度例也、

三長者

是月、金剛峯寺奥院廟塔燒ク、

〔高野春秋〕三　承平三年癸巳二月日、奥院御廟塔爲山火累燒矣、（緣起面、後人朱書火災事、）

山火ノ爲メ累燒ス

○金剛峯寺奥院ノ廟塔假屋ヲ經營スルコト、是夏ノ條ニ見ユ、

三月大盡丁丑朔

四日庚辰造齋宮使ヲ發遣ス、

〔類聚符宣抄〕一神社修造付齋宮造事

太政官符伊勢國幷大神宮司、內印、

使正六位上大中臣朝臣賴行

右爲修造齋宮、差件人宛使、發遣如件、國宮承知、緣造宮事、聽使處分、一事已上、

不得闕怠、符到奉行、

左大史位

位勘解由長官

承平三年三月四日

驛鈴一口、三剋、

中務、民部、大藏、宮內等ノ各省ヲシテ、中宮職ノ御季御服、雜物等、各四分ノ一ヲ返納セシム、

〔符宣抄〕別本御季御服雜物事、付皇太后宮、

太政官符中務、民部、大藏、宮內等省、別作、

應返納中宮職御季御服雜物各四分之一事

右得彼職解�categ、奉令偁件御季御服雜物等、宜返公家者、返進如件者、大納言正三位兼行右近衛大將藤原朝臣保忠宣、奉勅、宜依件返納者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

承平三年三月四日

○中宮職、御封御季御服等ヲ返進スルコト、二月八日ノ條ニ見ユ、

十四日庚寅石清水別當延晟寂ス、

〔石清水祠官系圖〕

良範

延晟 醍醐、朱雀、第五別當、延榮上座眞弟子、童稚之時、奉仕安宗師主大安寺延瓊、延喜十八年任權寺主、寺任、同廿年任寺主、延長三年任上座、會俗任別當替、同八年八月十四日別當官符、承平三年三月十四日入滅、寺務四年、或本云、權寺主此人初也、運眞時人、從寺主任上座、

良常 ○事蹟略ス、天元五年八月二日ノ條ニ收ム、

定胤 ○事蹟略ス、天慶二年九月四日ノ條ニ收ム、

安宗ニ奉仕ス延瓊ノ弟子

〔石清水八幡宮記錄〕二十九八幡祠官俗官幷所司系圖 八幡宮寺紀氏系圖 ○山城

良範

權寺主ノ始

作者大江朝綱

延晟　醍醐、朱雀、第五別當、權寺主、延喜十八年、權寺主始此人也、運眞上座、寺任、延長三年、會、俗延長八年庚寅年八月十四日官符、從寺任上座（主脫カ）、承平三年三月十四日入滅、寺務三年、或四年、

定胤　○事蹟略ス、

良常　○事蹟略ス、

十六日、壬辰、是ヨリ先、右大臣仲平、上表シテ、其職ヲ辭ス、是日、勅答ヲ賜フ、

〔本朝文粹〕二　勅答　答枇杷左大臣（仲平）（右）辭職表勅　後江（朝綱）相公

勅、重得表具之、夫立事立官、卿家之舊語、世功世德、何人之遺蹤、去病則是霍將軍博陸之兄、玄成寧非韋丞相第二之子、縱云侯王無種、已知公卿有門、況公芝扃席寵戴曉星而積年、椒室締花、霑春露而映日、朕之所加、自副僉屬、方今一片風清、雖拂奔競之跡、萬機塵鬧、恐擁謙讓之懷、朕心匪石、公何可轉、莫重地中之山、以塞天下之望耳、

承平三年三月十六日

殿上侍臣、歩射ヲ、朱雀院ニ行フ、

〔花鳥餘情〕二十若榮下　李部王記、承平三年三月十六日、殿上侍臣、於朱雀院歩射、

二十七日、癸卯、御遊、

〔體源抄〕八本下琴　和琴　承平三年三月廿七日卒（祈カ）御遊記ニ云、長明親王彈琴、左大臣（忠平）撫和琴、右大臣（仲平）鼓箏、

藤原扶幹物忌中ニ參入スト承和相撲節ノ例

秩父郡石田牧

四月小　丁未盡　丁未朔

一日、丁未旬、

〔西宮記〕四月改御裝束　承平三年四月一日同（貞信公）御記云、納言以上不參入者、送書中納言（藤原扶幹）令參入、彼納言今日物忌也、然而事無止、又有先例、仍令參入之、

〔北山抄〕四拾遺雜抄下　忌日、上卿依召參入行事例、承平三年四月一日、中納言扶幹、承和相撲節例云云、

若狹國、雛雉ヲ獻ズ、尋デ、大内山ニ放ツ、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　四月一日、若狹國、貢進雉雛四足卵子等、

〔花鳥餘情〕四末摘花　李部王記、○中略　承平三年四月六日、壬子、放若狹國所獻之雉於大内山云々、

二日、戊申、朱雀院ノ御領武藏秩父牧ヲ勅旨牧ト爲ス、

〔政事要略〕二十三八月下　年中行事二十三日牽武藏秩父御馬事

太政官符武藏國司

應以朱雀院秩父牧爲勅旨牧、以八月十三日定入京期事、

秩父郡石田牧一處

兒玉郡阿久原牧

別當ヲ充ツ

御禊アリ

紫野院

兒玉郡阿久原牧一處

加御馬疋、

右左大臣（忠平）宣、奉勅、件牧宜爲勅旨牧、散位藤原朝臣惟條（雅イ）、充其別當、每年令勞飼廿疋御馬、合期牽貢者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

承平三年四月二日

八日、甲寅、灌佛、

〔北山抄〕一四月年中要抄上八日灌佛事　同（寛平）三年四月八日、甲寅、依御物忌、御灌佛之導師、以昨日令召候於内裏、

十二日、戊午、齋院婉子内親王、野宮ニ入ラセ給フ、

〔日本紀略〕朱雀院　四月十二日、戊午、賀茂齋院婉子内親王行禊、入紫野院、

〔左經記〕長元四年十二月五日、戊申、○中略　婉子齋院、承平○中略　三年四月十二日入野宮云々、

○婉子内親王ノ初齋院ニ入リ給フコト、二年九月二十五日ノ條ニ見ユ、

十七日、癸亥、藤花宴、

〔日本紀略〕朱雀院　四月十七日、癸亥、天皇召公卿侍臣於飛香舍、翫藤花、命絲竹、賦詩、

二十七日、癸酉、一代一度仁王會、

〔日本紀略〕朱雀院　四月廿七日、癸酉、修仁王會於京中卅一（二カ）堂、並五畿七道諸國、

〔西宮記〕臨時一代一度仁王會　○前田家大永鈔本　承平（裏書）三年四月廿七日吏部記云、一代一度仁王會幷百講、京中卅二講、五畿七道六十八講、

〔小右記〕寛仁元年九月廿六日、辛酉、今日可定申仁王會僧名事、○中略有御服之院宮不可給定文、次前例無所見、以此趣令申前大殿、攝政參於母后御方、同聞給、云攝政被云々、候云々、攝政命云、大嘗會歟、御禊行幸、輕服人就吉供奉、可因准彼例歟、如何、承平三年仁王會、○中略皆是周忌後被行、

樂ヲ奏シ詩ヲ賦ス

百講ヲ修ス

京中三十二講、五畿七道六十八講

御周忌後ニ行ハル

五月丙子朔盡

十二日、己亥、故敦固親王ノ男源宗城殺害セラル、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　五月十二日、民部史生諸藤、殺害侍從源宗城朝臣幷其母、

〔尊卑分脈〕源氏　宇多天皇孫

敦固親王

源宗成侍從、從四下、後撰作者、賜源姓、城歟、

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　宗城（サネ）四位、侍從、敦固親王御子、至承平元、後撰集戀四、一、五位、

〔後撰和歌集〕十二戀歌四

返し遣はすとて、

今はとて梢に懸る空蟬のからを見むとはおもはざりしを

平なかきか女

かへし

忘らるゝ身をうつ蟬のからを見むとはおもはざりしを

源宗城

宗城ノ世系

歌什

平中興ノ女ト贈答ス

二十七日、壬寅、參議藤原實賴ニ右衞門督ヲ兼ネシメ、檢非違使別當ニ補ス、

〔公卿補任〕五　參議從四位上藤實賴、三十四、讃岐守、五月廿七日兼右衞門督、

補檢非違使別當、○攝關傳、一代要記同ジ、

〔西宮記〕臨時二檢非違使事　承平三年六月十七日、左大臣（忠平）著左衛門陣、仰以實頼爲別當之由、

〔西宮記〕臨時四官西廳座所々座體　承平三年四月十九日貞公（忠平）御記云、新大納言恒佐、爲著座到待賢門、而聞外記結政所物忌歸去、但其倚子者元右大將著、保忠卿歟、

〔西宮記〕臨時公卿著座事　○前田家大永鈔本　承平三年六月四日、己酉、申時參議藤原實頼著座、五月節、

○實頼ヲ檢非違使別當ニ補スルコト、西宮記六月十七日ニ作ル、今姑ク公卿補任、一代要記等ニ據リテ揭書ス、恆佐、實頼等著座ノコト、便宜合敍ス、

是月、東光寺ノ新堂、及ビ一切經ヲ供養ス、

〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇　五月、東光寺內、更立一堂供養之、幷供養一切經論、其地爲躰、誠足幽閑、清泉遶階、觀念之月自泛、綠苔滿地、座禪之茵遍鋪者也、唱梵唄而連音、不改靈山之舊跡、揚題名而分響、自寫竹林之遺風矣、

竹林ノ遺風ヲ寫ス

藤原恒佐著座

藤原實頼著座

六月小丙午朔盡

三日、戊申、諸陵寮燒失ス、

〔日本紀略〕朱雀院　六月三日、戊申、夜、諸陵寮燒亡、

〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇裏書　六月三日、戊申、諸陵寮舍等皆以燒亡、

七日、壬子、郡司召、

〔台記別記〕久安三年四月一日、甲午、○中略　承平三年六月七日、任郡司、清愼公記云、外記、於南廂西二柱下法申、諸卿云、當西二間可申者、

十一日、丙辰、神今食祭、

〔北山抄〕二年中要抄下十一日神今食事　六月　上卿一人例○中略　承平三年七月、

〔年中行事祕抄〕六月十一日神今食事　上卿一人例○中略

承平三、

○北山抄、年中行事祕抄、日時闕ク、今姑ク恆例ニ依リテ揭書ス、

二十五日、庚午、八十島祭、

〔日本紀略〕朱雀院　六月廿五日、庚午、典侍滋野朝臣、於難波津行八十島祭、

皇太后職使住吉社ニ神樂ヲ奏ス

〔西宮記〕臨時八十嶋祭事　○前田家大永鈔本　承平三年六月廿五日、公家於難波修八十嶋解除、典侍滋野朝臣、藏人修理亮源中明也、幷有神祇官、內藏寮、太后職等使、就住吉社、儀神子四人解祭、其體似神宴、其內侍幷藏人不能祇、但无承前委曲記文、仍取住吉社古老申詞修之云々、

是夏、金剛峰寺奥院廟塔假屋ヲ經營ス、

〔高野春秋〕三　承平三年、癸巳、夏中、經營御廟塔假屋、維爲來春高祖百年遠忌營也、山家乏世財故、无力再營也、維山解衰、无由再興也、

〔弘法〕○金剛峯寺奥院廟塔、山火ノ爲メニ累燒スルコト、二月是月ノ條ニ、同廟塔成ルコト、十一月二十七日ノ條ニ見ユ、

七月大乙亥朔盡

十一日、乙酉、紫宸殿ノ怪ニ依リ、東海、山陰、山陽諸國及ビ大宰府ヲシテ、名神ニ祈リ、警固ヲ勤メシム、

紫宸殿ノ怪ヲ占フ

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　七月十一日、請印東海、山陽諸國、幷丹波、太宰府祈明神、可勤警固由官符、是依南殿版位、犬遺矢、可慎兵革賊之由占申之、

〔西宮記〕七月十六日相撲式　同三年七月廿四日貞公御記云、仁壽殿前相撲召合、○中略　去今月間、紫宸殿前頻有物怪、故不御彼殿也、

去今月頻ニ物怪アリ

○備前國、海賊ノ事ヲ奏スルコト、二年十二月十六日ノ條ニ、南海海賊ノ事ニ依リテ、警固使ヲ定ムルコト、本年十二月十七日ノ條ニ見ユ、

十三日、丁亥、飈風ニ依リテ、御トヲ行フ、因リテ、官符ヲ、山陰、山陽諸國及ビ大宰府ニ下ス、

右近陣火炬屋春興校書殿等破損ス

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　同（七月）十三日、丁亥、飈風吹損右近陣火炬屋、幷春興校書殿檜皮、寮占乾坤方兵革之由、仍山陰、山陽、太宰府以官符、

十六日、庚寅、東寺長者權律師蓮舟寂ス、

〔日本紀略〕朱雀院　七月廿七日、辛丑、東寺別當權律師蓮舟卒、

〔東寺長者補任〕一　權律師蓮舟眞言宗東寺　二月廿三日加任三長者、七十三、人第二度例也、七月十六日卒、左京人、良淵氏、眞雅僧正孫弟子、惠宿內供入室、聖寶灌頂資、泰舜律師之師也、藥師寺別當、貞觀寺座主、年月日補東寺定額、承平元年十月廿七日任權律師、宣命、

惠宿聖寶ノ弟子

〔僧綱補任〕二　○興福寺本　權律師蓮舟　承平元年十月廿七日任、眞言宗、東大寺、右京人、良淵氏、「七十一」（朱書下同ジ）同三年六月十六日入滅、「七十三」

〔血脈類集記〕二本朝眞言傳法灌頂師資相承血脈　四代惠宿弟子權律師蓮舟　付法三人　貞保、貞純、此弟子也、延鑒、泰舜無之、藥師寺別當、貞觀寺座主、承平三年七月十六日卒、七十三、七イ

附法三人

三長者、

蓮舟事　次第云、聖寶受法灌頂弟子也、承平元年十月廿七日任權律師、同三年二月廿三日加任三長者、同七月十六日卒、七十三、

觀寺、藥師寺別當、元內供、已上裏書、

延鑒　康保二年三月廿七日卒、七十九、

大僧都、元興寺、

泰舜　律師、一長者、天曆三年十一月三日卒、七十三、二イ

寺務勞五年、金剛峯寺座主、法琳寺別當命藤內供入室也、

神辨

○蓮舟ノ寂日、日本紀略、二十七日ニ作リ、僧綱補任、六月十六日ニ作ル、今姑ク東寺長者補任、血脈類集記等ニ據リテ掲書ス、

十九日、癸巳季御讀經、

〔西宮記〕九月季御讀經　吏部記云、〇中略承平三年七月十九日、季御讀經、終日參入南殿、云々了、左少將敦忠、昇西階直就導師下、告給度者之由、右大將保忠卿云、先例勅使先傳日上、待被許告導師、此日奉勅令告導師也、而今不仰日上乖例也云々、

度者ヲ給フ

明法博士惟宗公方ヲシテ、贖ヲ徵スベキ人、赦ニ會フノ後、仍ホ之ヲ徵スベキヤ否ヲ勘申セシム、

獄令名例律

〔政事要略〕八十二議請減贖事　糾彈雜事二十二

勘申徵贖人、會赦後不可徵不事、

右獄令云、贖死刑限八十日、流六十日、徒五十日、杖卅日、笞卅日、若无故過限不輸者、會赦不免、義解云、雖會非常恩、而非勅指赦者、不在免限、名例律云、收贖之物、限內未送者、並從赦降原、疏云、犯贖徵銅、依令節級各有期、限內未送、並從赦原、過限不送、不在免限者、據此等文、犯罪之人、隨犯輕重、徵贖之法各有期、若限內未送、會赦降者、所徵之贖、可從原免、但過限之後、有恩詔者、雖非常恩、不可赦免、仍勘申、

限內ハ免シ限後ハ免サズ

承平三年七月十九日　主計助兼明法博士惟宗朝臣公方

二十四日、戊戌相撲召合、尋デ、追相撲アリ、

〔日本紀略〕朱雀院　七月廿四日、戊戌、於綾綺殿相撲召合、

音樂立合アリ

廿五日、己亥、追相撲、

〔西宮記〕七月十六日相撲式　同（承平）三年七月廿四日貞公御記云、仁壽殿前有相撲召合、有音樂立合等、是寬平六年例也、參議已上候殿上、檢彼寬平例、參議陪階下者、去今月間紫宸殿前頻有物怪、故不御彼殿也、廿五日拔出、音樂如例、親王以下賜祿、拜舞庭中罷出、但參議等早退出不預祿、今日祿法、親王大臣御衣一襲、大中納言白大褂一重、近衞中少將取見參、後給疋絹、此日作法、具見式部記、無御出前、以藏人上卿奏聞、敷侍從座、

拔出

祿法

〔西宮記〕七月童相撲　承平（頭書）三年、右中將（師輔）九條殿、取奏杖、渡東階前付大將（保忠）、自本道歸

承平三年七月二十四日

云々、

〔北山抄〕八相撲召合　大將要抄　仁壽殿儀

次將召王卿、〇註略ス、次第參上、無殿上出居、大臣候御簾內簀子敷、左右大將於恭禮門下取奏、右大將令持奏文、經綾綺殿壇上、或寄綾綺殿隔子、曳幔壇上、仍次將入自敷政門、奉奏、但承平三年、出自屏幔、經御前云々、上殿、經王卿座西、進御簾前、付內侍、復本座、承平三年、度王卿座東、有出居一人、無立合、相撲人不挿葵瓠花、無音樂、承平三年、依南殿頻有物忌、御此殿有音樂、立合寛平六年例也、

〔樗囊抄〕年中行事　相撲　仁壽殿東庭　仁壽殿ノ東庭ニ行フ

承平三七廿四召合、

〔樗囊抄〕年中行事　相撲　縮式日召合　御物忌ニ依リテ式日ヲ改ム

承平三七廿四、仁壽殿前、來廿八日依御物忌、

〔舞樂要錄〕上　相撲節　召合ノ樂曲

承平三年

召合　七月廿四日、

左、抹兜、

右、納蘇利、

拔出　同廿五日、　拔出ノ樂曲

左、蘇合　万歲樂　不祥樂（無カ）　見蛇樂

右、古鳥蘇　皇仁　新靺鞨　崑崙　狛犬

八月小乙巳朔盡

十三日、丁巳、釋奠、

〔小右記〕萬壽二年八月十四日、癸亥、大外記頼隆云、〇略中承平二年八月三日、大學寮有穢、仍用中丁者、

十五日、己未、内裏穢アリ、是日、越前、加賀二國司ノ、任終ノ年ノ雜米ハ、後司ヲシテ之ヲ辨濟セシム、

〔本朝世紀〕天慶元年八月卅日、甲辰、承平三年、〇略中八月十五日、禁中有死穢

〇本月二十九日ノ條參看、

死穢アリ

〔江次第抄〕四定受領功課正月丁事　雜米返抄、寛平九年以往、當任請也、〇略ス、註同十年

寛平十年ノ官符

二月廿七日官符、〇其條アリ、任終年雜米返抄、令後司請也、〇略ス、註而依延喜十二年

延喜十二年ノ官符

十月十一日官符、〇其條アリ、猶當任請也、勘解由使申返也、〇略ス、註但越前、加賀兩國、

風雨ニ依リ年内ニ運上シ難シ

依承平三年八月十五日官符、加調庸、從前司任終年請也、件米、依風雨年中難運上故也、

〔北山抄〕十前司卒去國任終年雜米事　案承平三年符、任終年所春租米、全可

勘會當年抄帳、

〔左經記〕長元四年十一月十日、癸未、右府歸著奥座、令下見諸國申請雜事申

穢ニ依リテ中丁ヲ用フ

文等、皆先例讀諸卿次第見了、惣九國也、箇或次第申其理非、或相歎申其許不、但此中、前加賀守俊守申請、依承平三年官符、得替年々料米、令後司辨濟云々、承平官符、是租春事也、於刈春者、專不可依彼例、若暗被裁許寮用闕乏歟、先被問大炊寮并後司等、隨申可被定行歟云々、左大辨、左兵衛督、中納言、内府同余、右大臣、春宮大夫、權大納言等被申云、承平三年、件國雜米、令後司辨濟之由、被定下先了、

十七日、辛酉、甲斐駒牽、

〔樗囊抄〕年中行事駒引　穢中例

承平三八十七、内裏死穢、上卿於侍以藏人奏之、於建禮門、給左右甲斐御馬

二十五日、己巳、行明親王御讀書始、

〔日本紀略〕朱雀院　八月廿五日、己巳、無品行明親王、初讀書於左少辨藤原朝臣元方、王公儒士陪坐、

藤原元方侍讀トナル

二十七日、辛未、康子内親王御著裳ノ儀アリ、三品ニ敍ス、

〔日本紀略〕朱雀院　八月廿七日、辛未、先帝（醍醐）第十二康子内親王、於常寧殿初笄、

卽敍三品、

〔河海抄〕十三若菜上　太后（穩子）御記云、承平三年八月廿七日、女宮御もたてまつる、

承平三年八月十七日　二十五日　二十七日

外舅忠平御裳ノ腰ヲ結ブ理髪結髻

いぬ二にて、御ものこし、おとゝゆひたてまつり給ひぬ、李部王記云、承平三年八月廿七日、康子内親王初著裳、戌一點、小一條大臣親王外舅結御裳腰、滋野内侍理髪、尚侍結本結、即敍三品、

物ヲ獻ズ

〔西宮記〕臨時九内親王著裳　承平三八二十日、康子内親王著裳、敍三品、小一條大臣結御裳腰、滋野内侍理髪、尚侍結髻、有獻物、王卿以下執給尚侍物、四尺屏風二雙、地敷二枚、茵臺三雙、銀坑四種、臺盃銚子、自餘樣器、御裝束二具、入散食筥、銀壺四口、入蒔繪物筥、燒筥、典侍女裝一具、入筥、王卿著左仗饗、王卿候常寧殿給祿、親王女裝赤褂、次女裝參議褂、袴、四位、五位褂、六位褂、於左仗賜王卿祿、大褂、侍從樂人給祿、典侍白褂、掌侍赤褂、乳母、命婦衾、

王卿左仗ノ饗ニ著ク

祿ヲ賜フ

〔小右記〕寛弘二年三月廿七日、乙亥、今上男一親王、敦康、七歳、御對面、幷女一親王著裳日也、○略中左大臣藤原道長結御裳腰、西宮記、王親裳腰者、依件記所結歟、見彼年貞信公御記、幷故殿御記、無其事、若是西宮記相誤歟、注小一條大臣、則是貞信公也、女御藤尊子結髻、令本云々、橘徳子理髪、御乳母位三品、尋先年之例、三人所未預參、依西宮記所被行歟、彼記小一條大臣結裳腰、滋野内侍理髪、尚侍結本結者、可奇之記也、故殿御記、以尚侍爲結御裳腰人、以典侍幸子爲理髪者、猶西宮記錯謬歟、

尚侍満子ノ御裳ノ腰ヲ結ブトノ說

〔新勅撰和歌集〕七賀歌　一品康子内親王、裳き侍りけるに、

北宮ト稱スル御屏風ノ歌源公忠

皆人のいかてと思ふ萬代のためしと君をいのる今日かな

公忠朝臣

〔公忠朝臣集〕北の宮のみくしあけの御屏風に、山をこゆる人のほとゝきす聞たる所に、

行やらて山路くらしつ子規いま一聲のきかまほしさに

大中臣頼基

〔頼基朝臣集〕北の宮の御も著給ひしに、内侍のかんのとのにおくられたる御屏風に、かさとりの山を人の行ほとに、時雨のすれは、袖をかつきたる所、

紀貫之

笠とりの山を頼みしかひもなく時雨に袖をぬらしてそゆく

伊勢

〔拾遺和歌集〕一春　北の宮のもきの屏風に、　貫之

春深くなりぬと思ふを櫻花ちる木のもとはまた雪そふる

〔伊勢集〕上　北の宮の御もたてまつるに、おとゝの御送物の屏風の歌、水のつらに松ある所、

いにしへの心もたえす行水にわか松かけもけふこそはみれ

〔一代要記〕醍醐天皇皇女　康子内親王　承平三年九月三品、

二十九日、癸酉、内裏ノ穢ニ依リテ、大祓ヲ修ス、

〔本朝世紀〕天慶元年八月卅日、甲辰、伊勢齋王以九月向大神宮之時、依式今日可有大祓事、○中略承平三年、雅子齋王時、八月十五日、禁中有死穢、而八月晦日、行大祓、

九月大甲戌朔盡

三日、丙子、齋宮ノ群行ニ依リテ、御燈ヲ停ム、

〔日本紀略〕朱雀院　九月三日、丙子、止御燈、廢務、今月齋王（雅子内親王）可參向伊勢之故也、

六日、己卯、相撲最手壬生保生ヲ番長ニ任ズ、

〔小野宮年中行事〕七月廿八日相撲召合事

勘申

物部棟業、壬生保生、薩摩利生等、立最手之後、任番長之例事、○中略

壬生保生

件保生、○中略以承平三年九月六日、任番長、○中略

天暦元年閏七月廿六日

○壬生保生ヲ最手ニ立ツルコト、延喜二十一年七月二十八日ノ條ニ、

最手官符ヲ賜フコト、延長五年九月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十六日、己亥、齋宮雅子内親王、大神宮ニ參向シ給フ、

〔日本紀略〕朱雀院　九月廿六日、己亥、伊勢齋王雅子内親王參向伊勢、天皇行幸八省院、

大極殿出御

〔本朝世紀〕天慶元年八月卅日、甲辰、伊勢齋王以九月向大神宮之時、依式今日可有大祓事、○中略承平三年○中略九月廿六日、齋王（雅子内親王）入伊勢、

〔西宮記〕臨時四任祭官　齋王參入、○註略ス、天皇召少納言如例、氏々參進、立版召如常、○中略ス、天皇以小櫛加王額、○中略承平攝政加櫛、眞觀例、依御物忌也、（云々イ）給宣命如例、○註略ス、王自殿東戸乘輿、出自昭訓門、○中略

天皇御小安殿、齋宮頭眞興、引輿自近（軒）廊中門、南出自廊中、西進候殿東戸廊、卽內侍闈司開戸、齋王乘輿、出昭訓門、至八省東路、南行至郁芳門路、東折至美福門路、南行卽出東掖門云々、○中略承平三年、路如此也（云々イ）

承平三年九月廿六日、內侍在前程、於小安殿裏幣、置於机上云々、又御座、幷齋王座後、立屏風一帖云々、東福門西第一間壁南邊、設給宣命座、同門北東掖、在外記內記座、昭訓門內北掖壁邊、敷葉薦一枚、立幣案二脚、同門外南掖、設勅使幷長奉送使座、御前敷座、小安殿北廊、敷座如常、自餘裝束同昌泰例、天皇御大極殿、王輿入自嘉喜門寮頭助副之、到殿北東第一階壇上、駕丁等滅火退出、此間闈司開戸、王入著座、卽閉戸云々、勅使幷長送使（奉脫カ）起昭慶門座、著昭訓門座、天皇召舍人、舍人四人、於殿東軒廊西二間砌上唯云々、少納言興平、代移自軒廊、

攝政忠平小櫛ヲ齋王ノ額ニ加ヘ奉ル

小安殿出御

齋王御路次

鋪設

勅使及ビ長奉送使著座

大極殿出御

昇殿北面跪云々、中臣等退出、右大臣（曾禰）就東福門座、少內記忠範、宣命入筥、出自東福門、置上前云々、闈司開戸、齋王乘輿云々、

〔北山抄〕六奉幣諸社事　備忘略記　承平（頭書）三年九月、祭主奥生稱病、遣藏人令實檢、无殊事者、追遣、

〔後撰和歌集〕十九離別　西四（雅子）條の齋宮の、九月晦日くたり侍りける、ともなる人に、ぬさつかはすとて、　大輔

紅葉はを幣とたむけて散しつゝ秋と共にや行かむとす覽

○雅子內親王、野宮ニ入リ給フコト、二年九月二十八日ノ條ニ、御退出ノ由ヲ大神宮ニ告ゲ給フコト、六年三月七日ノ條ニ見ユ、

二十八日、辛丑、東大寺別當寬救ヲ重任ス、

〔正倉院文書〕東南院文書壹櫃第二卷

太政官牒東大寺

應重任傳燈大法師位寬救事

右大納言正三位藤原朝臣恆佐宣、件法師別當職去承平元年秩滿、宜重任者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

承平三年九月二十八日

造東大寺講堂判官

承平三年九月廿八日　造東大寺講堂判官右大史正六位上坂上宿禰「經□」(自署下同ジ)牒

從五位上守右少辨兼行山城守源「朝臣」

奉行　四年正月廿三日、

別當

上座

都維那「智仁」

權寺主「寛昊」

寺主、○本書、太政官印十數顆ヲ踏ス、

〔東大寺別當次第〕冊二　傳燈大法師寛救　承平三年九月廿八日、重任宣旨偈、件法師去承平元年別當秩滿、宜(重脱カ)任云々、

○寛救ヲ東大寺別當ニ補スルコト、延長六年六月十七日ノ條ニ見ユ、

信濃二十戸讃岐二十五戸封戸寄文

御願道場ヲ醍醐寺ト號ス

忠平封戸ヲ割キテ造立ノ費ニ充ツ

十月小甲辰朔盡

三日、丙午、左大臣忠平、封戸四十五烟ヲ醍醐寺ニ施入ス、

〔醍醐寺雜事記〕李部王記云、○中略　同(承平)三年十月三日、左(忠平)大臣、使散位藤原朝臣安能、施入新加封戸卌五烟於醍醐寺、信濃廿戸、讃岐廿五戸、

〔醍醐寺新要錄〕五下伽藍部末　三昧堂篇　一貞信公封戸寄文事

奉施入封戸卌五烟

信濃廿戸　讃岐廿五戸

右去冬、天慈猥降、爵昇一品、閑思新寵之過分、追知先朝之餘恩、爰難抑心懷之暗催、敬拜陵園而展度(マヽ)、昔陪蓬萊之宮、霜載列階、今望松栢之色、綠蕪滿墻、淚之亂落、不覺濕襟、御願道場號醍醐寺、近山(在脱カ)陵之側、未畢土木之功、仍割新加之戸邑、添中志於堂構、塵露雖微、山海豈厭、願以松筠之誠、聊增蘭若之餝、敬白、

承平三年十月三日　從一位行左大臣藤原朝臣忠平○醍醐寺要書同ジ、

〔慶延記〕三下醍醐雜事記三封戸

一奉施入封戸卌五烟、貞信公施入、承平三年十月三日、從一位左大臣藤原朝臣忠平、

信濃廿戸　讃岐廿五戸

公文所勘文　寺封四十五戸ノ租及ビ調庸

公文所

勘申可收御加封料物事、

合卅五烟

廿烟信濃國　料物

調庸布八十端　中男作物、紅花大二斤四十兩　租穀八十石

廿五烟讃岐國　料物

調絹廿五疋　庸米卅石　中男作物油一斗七升五合　仕丁一人

功錢二貫百廿四文　養米五石三斗七升四合　租穀百石

右勘申如件、

承平三年十月三日

左史生讃岐依智秦良範

預散位吉田春宗（醍醐寺要書、醍醐寺新要錄同ジ、）

十日、癸丑、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學竪義次第〕（承平）三年、癸巳、講師信靜（年七十一、萬卅八、）（朱書）「三月卅日宣、四月一日請」天台宗、延曆寺、越後國人、

研學祥延（年四十三、萬廿四、）

〔三會定一記〕一　同（承平）三年、三月卅日宣、講師信靜（七十一、延曆寺、天台宗、）竪義（四十九、祥延、）次秦豐、

二十日、癸亥、權律師貞崇ヲ東寺長者ニ補ス、

〔東寺長者補任〕權律師貞崇（眞言院、眞言宗、東大寺、）十月廿日任三長者、七十、

〔僧綱補任〕二　〇興福寺本　權律師貞崇　十月廿日兼東寺別當、運舟替、

〔歷代編年集成〕十五　朱雀院　東寺長者權律師貞宗（（承平））同四年補、〇歷代皇紀同ジ、

二十四日、丁卯、除目、

〔公卿補任〕五

大納言正三位藤保忠、四十、右大將、十月廿四日兼按察使、

參議正四位下平伊望、五十、三、民部卿、皇太后大夫、十月廿四日兼伊與守、

從四位上平時望、五十、七、右大辨、修理大夫、讃岐權守、十月廿四日轉左大辨、

〔公卿補任〕五　承平四年　參議從四位上紀淑光、六十、六、承平三十廿四右大辨、

〔公卿補任〕五　承平七年　參議從四位上藤顯忠、四十、承平三十廿四左中辨、

〔公卿補任〕五　天慶四年

參議從四位上源庶明、三十、九、承平三十廿三（四才）右兵衞督、

從四位下藤在衡、五十、同（承平）三十廿四右中辨、

〔公卿補任〕五天暦四年　参議正四位下大江維時、六、十三、同（承平）三十廿四兼紀伊權介、

〔公卿補任〕五天暦七年　参議從四位上大江朝綱、六、十八、承平三十廿四左少辨、

〔公卿補任〕五天暦九年　参議從四位上藤有相、四、十八、同（承平）三十廿四侍從、

〔敍位除目執筆抄〕承平三十廿四京官、執筆、

〔除目大成抄〕八課試及第

前文章得業生正六位上加賀少掾菅原朝臣長守、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、因准先例、依獻冊勞、被拜任式部丞、幷修理亮等闕狀、

獻策者、直任式部丞例、○中略

〔公卿補任〕藤原經臣、承平二年九月冊、同三年十月任之、○中略

治承二年正月廿日

○藤原經臣ノ任官、便宜合敍ス、

〔別當宣祭使官人所ニテ遣紛ハシテ斷セシム〕

〔本數毎節十荷後半減ス承平元年ノ詔〕

十一月大癸酉盡朔

五日、丁丑、齋王雅子内親王ノ御病ニ依リテ、伊勢奉幣ノコトヲ定ム、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　十一月五日、被定伊勢奉幣事、依齋王御病也、

九日、辛巳、賀茂祭使等ノ摺袴下襲ノ過差ヲ禁ズ、

〔法曹至要抄〕中禁制條　一六染摺成文衣袴事

彈正式云、染摺成文衣袴者、並不得著用、但緣公事所著、幷婦女衣裙不在禁限、

承平三年十一月九日別當宣云、如聞、祭使等摺袴下襲、其長過多者、仍使官人等、向祭使所、出件袴下襲、任法糺行、

十日、壬午、畿内及ビ近江等ノ國司ヲシテ、中宮職諸節會ノ御贄ヲ上ラシム、

〔符宣抄〕別本

御季御服雜物事、付皇太后宮、

太政官符大和、山城、攝津、河内、和泉、近江等國司、

應進上中宮職諸節御贄毎節七荷半事

右得彼職解�segment、件御贄、本數毎節十荷也、爰從宮初半減、毎節宛奉五荷、而依去承平元年十月廿八日詔旨、以全十荷可供奉、然而依今年二月八日、○其條（藤原）アリ、令

旨、被返進御封三百戸、幷御季御服等四分之一、仍自去正月、每節以件□半、
可供奉狀牒、送國々、其返牒偏、如此□官符旨奉行者也、而未到官符、早被
□□省符等、將以供奉者、望請官裁、每國被□□官符、以每節七荷半、全令
供進諸節御贄者、中納言從三位藤原朝臣扶幹宣、奉勅依請者、國宣承知、依宣
行之、符到奉行、

左中辨藤原朝臣　　左大史坂上

承平三年十一月十日

二十七日、己亥金剛峯寺奥院廟塔ノ修理供養ヲ行フ、

〔高野山奥院興廢記〕一同（弘法大師）廟塔修理供養事

醍醐天皇御宇、延長第七年、平珍夢中有其告、故卽起廟塔修復願念、厥後空送
七个年畢、朱雀天皇御宇、承平三年十一月廿七日、平珍、彼廟塔修理供養訖、子
細載願文、在別紙、見之、是則般若寺僧正、排廟塔之後、十三年之事也云々、

〔高野春秋〕三　承平三年癸巳冬十月（脫カ）廿七日、大塔年來修補落慶、大法會導
師、執行正別當峯宿也、今般也、專依願主平珍之夢、託、勸化之大成功也、考、去延喜七年
夏、平珍初登山之時、頓大師託夢中、成此囑、是以今日供養願文爲拜弘法大師之尊影、到金剛峯寺拜見多寶塔、清感自成、心中念願、我修補此塔、于爰延喜七

願主平珍

導師峯宿

年、夢中有告、發此願云々、此願文朝遲作、自延喜七到于茲及三十七年、修補大成焉、

願文作者朝遲

〔高野春秋〕四　承平七年丁酉春正月朔旦、峯宿朝拜、
茲春、僧平珍、發起奥院御廟再興之念願、是峯宿師世財乏、燒失已來、小茅屋不
忍拜見、致悲慨故也、

○金剛峯寺奥院廟塔ノ假屋經營ノコト、是夏ノ條ニ、雷火ニ依リテ燒
亡スルコト、天曆六年是歲ノ條ニ見ユ、

十二月小　癸卯朔盡

十一日、癸丑、神今食祭、

〔西宮記〕六月神今食　散齋日在穢内行神事例

承平三年十二月十日、壬子、云々、須召神祇官給(ヒ)上以下史生以上卜文、而依子日不令占、依去昌泰三年例、十一日早旦、可卜申之由仰了、

前日ニ依リテ子上卿等ヲトセズ

十六日、戊午、殿上ノ侍臣等、大原野ニ狩獵ス、

鷹ヲ放ツ　裝束美ヲ極ム

〔日本紀略〕朱雀院　十二月十六日、殿上侍臣十許人、狩獵于大原野、放鷹、狩裝極美、

初度ニ取ル雉ヲ供御ニ奉ル

〔西宮記〕臨時八私遊宴事　宴遊　承平三年十二月十六日、殿上公達著狩衣、臨大原野奏事由、依有被免也、初度所取鳩、令奉供御、小舍人來告召由、右衛門陣外、令申參入由而給陣々宣旨、即召御前御覽之、

十七日、己未、海賊ノコトニ依リテ、南海諸國ノ警固使ヲ定ム、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　十二月十七日、南海國々海賊、未從追捕遍滿云々、就中、阿波解狀、今日定遣國々警固使、

○諸國ヲシテ、警固ヲ勤メシムルコト、七月十一日ノ條ニ、海賊ノコトニ依リテ、諸社ニ奉幣スルコト、四年四月二十三日ノ條ニ見ユ、

二十四日、丙寅、源雅信ノ昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕五天暦五年　參議從四位上源雅信、三十二、承平三十二廿四昇殿、

二十八日、庚午、諸衛舍人ノ濫行ヲ禁ズ、

〔法曹至要抄〕上罪科條　一(三十二)研破人宅事

長德元年九月十三日宣旨云、應准强盜、追捕推斷權門勢家濫惡雜人、研壞人家、掠損財物輩事、右檢去承平三年十二月廿八日、下左右京職、五畿内七道諸國符偁、如聞、年來諸衛舍人、假名宿衛、狂暴是好、招集黨與、研破人家、騷動之間、或懷財貨、奉勅、自今以後若致違犯、當所主司任加追捕、論以强盜、計其損物、准贓行之者、參議云々者、

黨與ヲ招集シ人家ヲ研破スル犯ス者ハ强盜ニ準ズ

是月、荷前、

〔北山抄〕二年中要抄下十二月荷前事　安和二年、令勘申幼主御時例、承平○中略三○中略年、不出御、

出御ナシ

〔北山抄〕二年中要抄下十二月十三日點荷前使參議已上事　同(承平)三年、重服人依無便宜、不差使、但大臣參入行事、

重服ノ人ヲ使ニ差サズ

〔年中行事祕抄〕十二月十三日 點荷前使事　重服人不差使、承平三年之例也、

是歲、加賀金劒宮神ニ正三位ヲ授ク、

〔諸社根元記〕下　一賀州石川郡河内庄金劒宮、崇神天皇御宇、天降垂跡給也、同天皇三年三月社立、仁明天皇御宇、神殿破壞之時、道澄大德造營、朱雀院承平三、當社金劒奉成三位、○仁明以下三十二字、塙史料所收ノ諸社根元記ヲ以テ補フ、

〔神階記〕六朱雀院　承平三年、授加賀國金劒宮神正三位、

河内交野禁野ノ供御ヲ定ム、

〔柳原家記錄〕八十五砂巖二　供御事

定置河内國禁野交野供御

朱雀院御宇、承平三年被定畢、然間左判官秦頼秀、右府生下毛野敦遠、宣旨承て、綾ゑうせうと云御鷹を預、爲兩奉行、伊勢國住人加藤太を、交野助鷹飼仁定被置處也、御犬飼には、駈山の三郎宗重を、加藤太始被付畢、○下略

鷹飼

犬飼

臨時ノ用ニ充ツト稱シテ、交易ヲ行フコトヲ禁ズ、

〔北山抄〕十吏途指南無直交易事　承平三年宣旨云、稱充臨時用、不可申省例交易云々、

勘解由使ヲシテ、國司交替ノ時、丹波ノ釋奠、官舍、班田及ビ淡路ノ定額寺等ノコトヲ判定セシム、

〔政事要略〕五十四　交替雜事十四　修理神社事　供釋奠事

勘解由使勘判抄

一釋奠事〇略中

丹波　使藤諸兄、

非常赦判云、廟像幷雜器破損者、不注損色、依式爲全、无實者事在恩前、拘數不幾、須見任量要否、申官修除、

承平三年判

〔政事要略〕五十四　交替雜事十四　修理官舍事

勘解由使勘判抄

一官舍事〇略中

丹波　使諸兄、

非常赦判云、无實失由不明、然而前司卒去、同任會赦、須見任相承、不論前後、量其要否、申官修除、燒亡倉如執狀、院守丹波、本見缺犯、倉稻所放火也、故犯定之

丹波

廟像等ノ破損ハ官ニ申シテ修除セシム

官舍ハ所司チシテ其要否チ量リ修除セシム

罪科、其不輕、然而犯人死去、彼時之吏、適經鴻恩、須見任相承、申守請料修造、

承平三年判

〔政事要略〕五十三　雜田事

勘解由使勘判抄

一田事〇略中

丹波　前司高橋元幹、使藤諸兄、

又云、（非常赦判）未班田怠在恩前、須見任申下班符勤行之、承平三年判、

〔政事要略〕五十六　定額寺事　交替雜事十六

勘解由使勘判抄

一佛寺

定額寺破損〇略中

淡路　前司島田良行、使和氣兼清、　新司阿刀忠行、

非常赦判云、須見任相承、不論無實破損、與講讀師共加撿校、令別當三綱檀越等、有田薗等者、以其地利修理、若元來无田薗寺、申官請料、修塡莊嚴、

承平三年判

未班田ノ怠ハ新司チシテ勤メシム

稻倉ニ放火ス

定額寺ノ破損ハ新司チシテ修理セシム

淡路

大中臣恒瀧ヲ大神宮大司ニ任ズ、

〔類聚大補任〕大司恒瀧　任後神祇大祐、

年末雜載

神社、

〔豐受太神宮禰宜補任次第〕

禰宜外從五位下神主春彦　承平三年十一月廿日辭職、讓男晨晴、

禰宜從五位下神主晨晴　右神主、春彦男也、承平三年十一月廿日請父讓、

公家、

〔符宣抄〕別本

可令加辨署正藏日收事、又在雜事却(部カ)、

云々年遺漏不署、積習爲例云、

承平三年十一月廿一日宣

諸家、

〔本朝文粹〕十山寺序丙　詩序三　冬日遊圓城寺上方　源英明

源英明等圓城寺ニ遊ブ

鳳城之左、有一道場、天借煙霞、地與水石、所謂圓城寺也、于時承平三年十一月六日、勤王之餘暇、退公而移望、其主爲誰、中納言藤上卿(扶幹)、其次何人、左親衞藤亞(伊衞)

將、於是踏紅葉而尋逕、占青苔而昇階、香煙出戸、帚窻掩而無人、禪侶向壇、金磬鳴而有響、策馬來時、唯思風煙之可翫、逢僧談處、漸知世俗之皆空、心之有信、雖歸佛經、習之未除、何抛盃酌、請引十分之滿盞、將惜三冬之落輝云爾、

生死、

〔尊卑分脈〕藤氏眞作孫

諸葛

伊勢掾藤原玄致卒ス

玄致　伊勢掾、承平三、一卒、七十八、（三イ）

母、

承平四年甲午

正月大壬申盡朔

一日、壬申節會、

〔妙音院相國白馬節會次第〕七日節會　攝政內辨例承平四年正月一日、眞信公、忠平、○中略、

外辨上卿補代官例

朱雀

承平四年正月一日、外辨右大臣仲平、仰中務、宮內補代官、○愚管記、元日節會次第同ジ、

四日、乙亥左大臣忠平、大饗ヲ行フ、

〔九條殿御記〕年中行事二○九條家本　大臣家大饗　同四年正月四日、○正以下四字、本書目錄ヲ以テ補フ、乙亥、早朝雨降、巳時天晴、以右馬頭浣朝臣爲請客使、未時尊者參入、拜禮如例、尊者御祿白大褂、加物和綾櫻色細長、引出物馬一疋、鷹一聯、犬一牙、但非參議大辨祿同參議祿、親王祿同納言祿、但親王者有引出物、饗畢後、大閤仰云、（承平）（忠平）（頭書）「拜禮之間主人立所」得大臣客者、拜禮之間、立南階東邊、若○若字、西宮記所收ノ九記ヲ以テ補フ、得納言者立西邊、此故實也、又可召史生之由、先例申客大臣、而今日左少辨朝綱申主大臣、仍我向（頭書）「召史生事申客大臣」辨座勸盃之次、以此誤行罰盃於諸辨、主大臣只此行酒錄使事、（頭書）「罰」

內辨攝政忠平

外辨仲平

請客使尊者參入引出物馬及ビ鷹犬等アリ

〔西宮記〕恒例一　正月　○前田家本　大永鈔本　臣家大饗　九記（頭書）云、承平四年正月四日、○中略又有引出物、尊者加物、櫻色綾細長、引出物馬一疋、鷹一聯、犬一牙等、猶設衾也、

五日、丙子右大臣仲平、大饗ヲ行フ、

〔九條殿御記〕○年中行事二　○九條家本　大臣家大餐　承平四年正月五日、丙子、朝間雨降、午時天晴、（仲平）右大臣大饗、仍參向彼殿、不儲尊者御座、又不被奉向請客使、以先日被取案内、不可入座云々、因之所不被儲也、事了參殿、執申今日行事、仰云、雖不參向、儲座並請客使等事、可有者也者、

七日、戊寅節會、敍位、

〔公卿補任〕五　參議從四位上藤當幹、七十一、治部卿、備前權守、正月七日正四下、平時望、五十八、左大辨、修理大夫、讃岐權守、正月七日正四下、

〔公卿補任〕五　天慶二年　參議從四位上藤敦忠、三十四、（承平）同四正七從四下、

〔公卿補任〕五　天慶四年　參議正四位下源清平、六十五、（承平）同四正九（七カ）正四下、

〔公卿補任〕五　天慶七年　參議從四位上藤師氏、三十二、承平四正七從五上、中宮御給、

〔公卿補任〕五　天慶四年　參議正四位下大江維時、六十三、（承平）同四正七從五上、

〔公卿補任〕五　天慶七年　參議從四位上大江朝綱、六十八、（承平）同四正七從五上、

〔公卿補任〕正月中七日節會　天德二年　參議正四位下源自明、四十八、承平四正七從四上、

〔西宮記〕輔入云々、　吏部王承平四年記云、群臣就座、了敍人參入、公卿先入、次式部大敍人參入ス

〔愚管記〕延文四年正月十六日、庚戌、執政人奉仕節會內辨例　忠平節會ノ內辨トナル

貞信公（忠平）于時攝政左大臣、

同四年（承平）正月○中略七日、○園太曆同ジ、

〔河海抄〕九乙通女　源博雅、兵部卿克明親王男、承平四年正月七日、敍從四位下、元無位、親王子、直敍四位、雖爲流例、一世源氏、大臣息大略敍爵歟、

〔敍位除目執筆抄〕承平四正六敍位、　執筆、右大臣仲平、

八日、己卯後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　權律師貞崇　後七日法、

〔後七日御修法阿闍梨名帳〕朱雀院　四年（承平）、甲午、權律師貞崇　于時三長者、

十日、辛巳少僧都經賀寂ス、

〔日本紀略〕朱雀院　正月十日、少僧都經賀卒、

〔僧綱補任〕二○興福寺本　小僧都經賀　閏正月十日入滅「七十七」（朱書）

〔僧綱補任〕二○興福寺本　權律師經賀　延長三年三月廿三日任、法相宗、興福寺、已講勞、和泉國人、珍氏「六十八」（朱書下同ジ）同六年閏八月廿八日轉正「七十一」承平元年十月廿七日任小僧都「七十四」

延賀ノ弟子

〔三會定一記〕一　同廿年（延喜）、去年十一月四日宣、講師經賀、七十三、興福寺、法相宗、同四年卒、八十七歲、（承平）

○經賀ノ寂日、僧綱補任閏正月ニ作ル、今、日本紀略ニ據リテ掲書ス、

十四日、乙酉、御齋會內論義、

〔西宮記〕正月中　御齋會　同記（吏部記）云、承平四年正月十四日、御齋會了云々、公卿著布施堂、親王參禁中、初諸卿云、先年御清涼殿、就右仗、而近年御弘徽殿、故候左仗、而今御飛香舍、右仗最便道也、仍就右近陣、陣官云、近年公卿常候左仗、故府不用意其事云々、藏人敏仲來召、卽參御在所云々、

公卿布施堂ニ著ス

飛香舍出御、左仗右仗ノ別

男踏歌、

〔日本紀略〕朱雀院　正月十四日、男踏歌、

〔花鳥餘情〕十三初子　九條右丞相記、承平四年正月十一日、踏歌、飯驛、水驛被定之、中宮（穩子）飯、北宮水、今宮飯許、左（忠平）大臣宿所飯、右（仲平）大臣宿所水、左右（仲平、民忠）大將宿所飯云云、

飯驛水驛ヲ定ム

〔體源抄〕八本下和琴　承平四年正月十四日踏歌記云、右衞門尉小野佐幹、鼓新羅琴云々、

小野佐幹新羅琴ヲ彈ズ

十六日、丁亥、女踏歌、

〔西宮記〕二○前田家本　正月下　十六日女踏歌　吏部記、承平四年正月十六日、踏歌云々、南殿施簾、上卿著外辨、所司不具、右（仲平）大臣召仰外記云、大舍人不候時、召使稱唯、須召仰令用意、于時開門、召使等、趍著幔下、此間大舍人初來、猶一人不足、卽以召使足數、令稱唯之、又外辨座少納言在北、辨在南、是例也、而左中辨顯忠居北、少納言遠規在南、諸公卿云、乖例、又遠規、稱無傳四位召例、去元日、不傳召、而今日奉仕之、又左大臣三獻了、不奏事由、使民（伊望）部卿仰御酒勅使云々、又坊別當右大將（保忠）就飛香舍奏圖、群臣舞踏、大藏積祿云々、

召使ヲ大舍人ノ闕ニ補フ

御酒勅使

是月、直物アリ、

〔北山抄〕一正月年中要抄上直物事　或加人々申文、外記先申事由、加奉云々、不過三四枚、承平四年、奉十枚云々、

承平四年正月十六日　是月

閏正月小壬寅朔

八日己酉、外記障アルニ依リテ、外記代ヲ置カシム、

〔類聚符宣抄〕六外記外記代職掌

被大納言藤原朝臣保忠宣云、近日外記二人、或觸死穢、或依身病不參、大外記嶋田朝臣公鑒、雖參局中、依有所勞、不堪從廳上之事、宜使左少史善道維則爲外記代、從廳上之役、兼行雜務、但公鑒朝臣參入局底、可行例務者、

承平四年閏正月八日　　大外記島田朝臣公鑒奉

十五日丙辰、陸奥國分寺ノ塔、雷火ニ燒ク、

〔日本紀略〕朱雀院

閏正月十五日、陸奥國國分寺七重塔、爲雷火被燒了、

〔參考〕

〔奥羽觀迹聞老志〕十九宮城郡名蹟十三　國分寺　建三字以備之、號金光明四天王護國山國分寺、學頭、其寺在白山東、院主、在學頭南、別當、在善逝堂西南、俱勤寺務、其屬坊舍有二十四區、逐年巡勤祭祀事、相傳、聖武帝天平年中、詔每州所建之一也、其後鎮守將軍藤秀衡、甚好佛法、建寺觀、僧房頗極壯麗、設長堂廻廊、而及尼寺、後傾倒荒廢、矧又其間、及兵燹等災乎、

寺地
尼寺

二十九日庚午、除目、

〔公卿補任〕五　參議正四位下藤伊衡、五十九、承平四閏正廿九、兼美濃守、

〔公卿補任〕天慶五年　參議從四位上藤師氏、三十二、同閏正月廿九日左少將、

〔公卿補任〕天暦五年　參議正四位下平隨時、五十九、承平四閏正廿九、美濃權守、

〔敍位除目執筆抄〕承平四閏正月廿七除目、廿九日入眼、執筆、

〔類聚大補任〕朱雀天皇　大司正六位上大中臣朝臣時用　閏正月十一日任、少司氏彝三男、

○時用ノ任官、便宜合敍ス、

二月大辛未朔盡

二十日、庚寅律師神豫寂ス、

〔日本紀略〕朱雀院　二月廿日、律師神豫卒、

〔僧綱補任〕二〇興福寺本　權律師神豫　延長六年閏八月廿八日任、眞言宗、大安寺、元大威儀師、大神氏、(朱書下同ジ)「六十五」承平元年十月廿七日轉正、「六十八」同四年六月十六日入滅「七十一」(朱書)

○神豫ノ寂日、僧綱補任六月十六日ニ作ル、今、日本紀略ニ據リテ掲書ス、

三月小辛丑朔盡

九日、己酉踏歌後宴、

〔日本紀略〕朱雀院　三月九日、有踏歌後宴、

十一日、辛亥山城國、一頸四翼ノ鷄ヲ獻ズ、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　三月十一日、山城國、進于鷄雛一翼、其躰自頸下、相分二躰、有四翼四足二尾、

十六日、丙辰皇太后御息災延命ノ爲メニ、諸寺ニ於テ、諷誦ヲ修ス、尋デ、賑給ヲ行フ、

〔日本紀略〕朱雀院　三月廿五日、乙丑、依皇太后(穆子)御賀事、修諷誦於諸寺、賜度者五十人、

〔西宮記〕十二臨時己賀　○前田家本　賀事　皇后御賀事　承平四年三月廿四日、中宮(穆子)御賀試樂、○略中

貞信公記云、○略中　三月十五日、右大辨(紀淑光)來云、明日御誦經旨、仰使云、御賀由云云、報答云、不可稱御賀、只謂御息災增寶壽、

十六日、七大寺、東西、延曆、極樂寺等、有御誦經、其布施、東大、興福、大安寺、藥師、

度者五十人ヲ賜フ

御賀ト稱セズ

布施アリ

延暦寺、各五百端、西大、法隆、東西、極樂寺、各四百端、奉爲中宮(穆子)息災延命也、

〔花鳥餘情〕十九若菜上　承平四年三月、中宮御賀、七大寺、東西、延暦、極樂寺等、有御誦經、其布施、東大、興福、大安、藥師、延暦寺、各五百端、西大、法隆、東西、極樂寺、各四百端、奉爲中宮息災延命也、

〔新儀式〕四天皇臨時上賀太后御算事　先定吉日、承平四年、以前十日被修御諷誦於諸寺、幷賑給被奉度者、亦同上、略○中承平四年、十一ケ寺修御諷誦、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、延暦寺、各調布五百端、西大寺、法隆寺、東寺、西寺、極樂寺、各四百端、同年以米五百斛、前六日於朱雀門賑給、

十一ケ寺ニ修ス　賑給米五百斛

○日本紀略、二十五日ニ作ル、今、西宮記、新儀式ニ據リテ掲書ス、

二十六日、丙寅、皇太后ノ五十御賀ヲ行ハセラル、

〔日本紀略〕朱雀院　三月廿六日、丙寅、公家於常寧殿、奉賀皇(穆子)大后五十算、○扶桑略記、同ジ、

〔西宮記〕○十二前田家本臨時已賀事　皇后御賀事　承平四年三月廿四日、中宮(穆子)御賀試樂、天皇御仁壽殿覽其儀、雨、王卿候、內藏給王卿酒肴、童舞、春鶯轉四人、萬歲樂四人、散手、皇麞、龍王、次納蘇理、次喜春樂、王卿以下樂人給祿、親王大臣御衣一襲、納言白大掛表御袴、參議白掛袙衣、行事人々又有差、樂人疋絹、

試樂　仁壽殿出御童舞アリ

常寧殿ノ鋪設

午時出御　先ヅ皇太后ニ御膳次ニ內御膳ヲ供ス　黃金ノ御器ヲ用フ　成明親王勅授帶劍　後宴　鋪設昨日ニ同ジ

承平四三廿六、於常寧殿、有中宮御賀、內藏寮懸殿南東御簾、母屋壁代上立屏風八帖、北五尺四帖、西四尺四帖、東中間水邊敷毯代、立大床子三脚、南面宮御座、東第一間立大床子二脚、西面御座、帳臺東邊立三尺御厨子六基、衣筥十二合一基、夏御衣五具、冬五具、南軒廊四間假板敷上立厨子四基、御膳、菓子、干物、各三十種、南一間敷樂所行事三人座、北面東上、廊東□舞臺、壞井屋其上假敷板、南廊敷舞童樂人座、軒廊以東童座、南廊東戸內立屏幔、後敷上官座、同廊中戸不開、弘徽殿東立屏幔、東折二條、麗景殿身屋西面、南懸御簾、西廂敷王卿座、宮大夫座、南面、面北上、穀倉院儲饗、西同殿北庇殿上人座、同院饗、常寧殿東邊橋南立屏幔、其前立祿辛櫃五十合、

午時出御、獻物、王卿以下取之、冊枚、入自南廊東戸、立庭中、左大臣(忠平)問、各稱物名、親王召忠幹朝臣、二音、出自東殿北幔內受之、忠幹唯、率官人等、取參議已上、王卿侍座、內膳供宮膳、供自殿北戸、御臺盤、二脚、銀具、殿南廂立風爐具、內膳供內御膳、亂聲、樂人著座、童廿人、赤白樣袍、蒲萄下襲、穩座、御膳折敷四枚、銀折敷、敷紫檀臺盤、黃金器、御厨子所供、御厨子所供干物菓子、萬歲樂、童四人、春鶯囀、二人、散手、皇麞、陵王、納蘇理、喜春樂、下舞臺舞砌下、被物、仙遊霞、親(成明)王勅授、村上、

後宴

同廿七日、裝束如昨、撤舞臺、軒廊西爲舞庭、弘徽殿前屏幔後敷侍、南廊中戸西舞童座、東樂人座、常寧殿額間以東爲王卿座、內藏寮儲饗、

音樂了、樂人著座、玉樹、童人、四散手、殿上童給酒、舞人王麿、納蘇理、左大臣（忠平）已下共降舞、抱子孫舞、崑崙、軒廊西召行事、樂人已下給祿、

樂人ニ祿ヲ賜フ

〔新儀式〕四　臨時上皇賀太后御算事　前一二年、定行事人、幷數日行事之人、試樂等事、承平四年、試樂於弘徽殿前行之、○中略樂人於承香殿西方起亂聲、次發參入音聲、自廊西戸參入、承平四年、舞童廿人、彈琵琶二人、彈箏二人、唱音六人、唱歌六人、吹笛打鼓者皆著座歟、

〔御遊抄〕二　御賀　承平四三廿六、皇太后宮五十御賀、

御前ニテ曲宴ヲ行ハセラル

朱雀御遊、召舞孫王、於御前有曲宴、

〔古今著聞集〕十三　祝言　承平四年三月廿六日、天子常寧殿にて、皇太后の五十算の賀せさせ給けり、廿七日、後宴に、式部卿（敦實）親王以下參り給、舞曲を御覽せられけるに、左大臣（忠平）、右大臣（仲平）、右大將保忠卿、大納言恆佐卿、庭におりて、崑崙を舞給ひけり、これ故實たるよし、吏部王の記し給ひて侍とかや、其後なを管絃の興ありけり、

忠平等庭上ニテ崑崙ヲ舞フ

〔拾遺和歌集〕一　春　承平四年、中宮の賀し侍りける時の屏風の歌、　紀文幹

春霞立てるをみれはあら玉の年は山より越ゆるなりけり

御賀屏風ノ歌　紀文幹

承平四年、中宮の賀し給ひける時の屏風に、　齋宮內侍

春の田を人にまかせてわれはたゝ花に心をつくる頃かな

齋宮內侍

〔拾遺和歌集〕五　賀　承平四年、中宮の賀し侍りける時の屏風に、　齋宮內侍

色かへぬ松と竹との末の世をいつれ久しと君のみそみむ

同し賀に、竹の杖つくりて侍りけるに、　大中臣頼基

一節に千代をこめたる杖なれはつくともつきし君か齡は

大中臣頼基

承平四年、中宮の賀し侍りける屏風に、　參議伊衡

藤原伊衡

みそきして思ふことをそ祈りつる八百萬代の神のまに〳〵○伊勢集ニ、伊勢ノ歌トス、

伊勢

〔伊勢集〕上　きさいの宮の五十賀、內にてせさせ給しに、御屏風の歌、はらへする所、

みそきつゝ思ふことをそいのりつるやほ万代の神のまに〳〵

〔三十六人歌仙傳〕伊勢　承平四年三月廿六日、皇后穩子五十御賀御屏風、
伊勢獻和歌、
〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇　三月廿六日、於常寧殿有太后(穩子)五十御賀、
〔皇年代略記〕村上天皇　四年(承平)三月廿六日、勅授帶劔(成明親王)、
○忠平、皇太后ノ五十御賀ヲ行フコト、十二月九日ノ條ニ見ユ、
二十八日、戊辰、殿上賭弓、
〔西宮記〕正月下殿上賭弓　王卿依召、○註略ス、定方人、依薦次定、承平四年三月廿八日、不被定方人、
方人ヲ定メズ
皇太后ノ御賀ニ依リテ、叙位ヲ行フ、
〔公卿補任〕五　参議正四位下平伊望　三月廿八日正四上、皇太后(穩子)宮御賀、
平伊望ニ人ヲ超ユ
超二人、
〔西宮記〕○十二前田家本臨時己賀事　皇后御賀事　廿八日(承平四年三月)、有叙位云々、
〔新儀式〕四天皇臨賀時太后上御算事　次日宮司、幷奉仕陪膳侍女等、各叙一階、亦同
上皇院司等例、承平四年、康子内親王(穩子)爲二品、藤原朝臣兼子爲從三位、大夫平伊望爲正四位上、亮藤原忠幹爲正五位下、大進上毛野常行爲從五位上、少進藤原令問、多治助繩爲從五位下、源裕子爲正五位下、藤原吉子爲從五位上、同勝子爲從五位下、
康子内親王ヲ二品ニ叙ス

是春、烏ノ怪ニ依リ、天台座主尊意ヲシテ、不動法ヲ修セシム、
〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇　春、弘徽殿前柿樹烏作巣、爲令移去、勅座主尊意、令修不動法、從第三日、烏日々昨巣、飛去北山、七日之內、悉以昨去、已上傳、
〔元亨釋書〕十感進四之二　釋尊意　承平四年、春、弘徽殿庭柿樹烏成巣、詔意持念、烏日々移巣、七日盡去、
烏弘徽殿ノ柿樹ニ巣フ

四月 大 盡 庚午朔

七日、丙子、擬階奏、

〔西宮記〕四月不出御儀擬階奏　承平四年四月七日云々、大納言保忠卿、令持奏文於外記、進右近瀧口陣北、令藏人式部少丞藤原經臣奏畢、還就陣座、召二省輔、仰宣云、省持罷、依例行者、但件各輔等、依雨降、宜陽殿西廂北、第二間砌上、北上西面立、請件宣旨云々、

〔西宮記〕三四月七日擬階奏　承平四年四月七日、大納言保忠卿執奏、依降雨、不著宜陽殿、二省輔立宜陽殿西廂北第二間砌上、北上西面、請件宣旨、

藏人ヲシテ奏セシム

飛驒守大春日道光ニ籤符ヲ賜ヒ、赴任セシム、

〔符宣抄〕別本　左中辨藤原朝臣顯忠傳宣、大納言藤原□□保忠宣、飛驒守大春日道光欵狀云、佐渡解由□巨勢惟平、須依例放二枚、而差使遣取之間、只送一枚、擬遣取一枚之間、冬春之比、北海波高、往還不通、相待海晏、其期已久、望請官裁、被裁許件解由、早賜籤符、罷向任所、勤行雜務者、宣正文下式部省、案文下勘解由使者、

道光ノ欵狀

佐渡ノ解由

小宣旨ノ正文ト案文

承平四年四月七日　左大史坂上經行奉

八日、丁丑、大神祭使ノ發遣ニ依リテ、灌佛ヲ停ム、

〔北山抄〕一四月年中要抄上八日灌佛事　承平四年四月八日丁丑、上卿遲參、仍无政、此日、依大神祭使出立、停止御灌佛之事、

上卿遲參ニ依リテ政ナシ

十六日、乙酉、賀茂祭、

〔西宮記〕臨時十祭使事　吏部記、承平四年四月十六日云々、東對南放出南向座、使近衞十二人、以机樣器備肴、其南北向座、垣下公卿、以折敷三枚備肴、南廂北向座、陪從十二人、以机土器具肴、主人相公、於寢殿東簾內視之、南庭立酒部平張、觴八九行、伊世守伊扶來、請可賜裝束、近衞等云、請可賜裝束由、卽起出簾前、左少將師氏傳取、卽召王公大夫、各執裝束賜近衞等云々、此間絲竹漸發、近衞等、起座改裝束、爰使中將師輔朝臣、始出勸盃、公卿卽行折中闕巡云々、

祭使ノ座

公卿及ビ陪從ノ座

〔西宮記〕四月賀茂祭　九記云、參殿執申云、今日宣命掌侍不候之時、參入上卿付藏人令奏、而上蔀皆有障、若可參歟、仰云、灌子內侍今曉令參云々、然不可參者、承平四年三月十一日九記云、參內賀茂祭、內侍、理須仰典侍、而去年典侍奉仕重役、仍仰灌子內侍、令奉仕云々、

掌侍灌子ヲ祭使トス

〔西宮記〕臨時六祭使事○前田家大永鈔本　承平四年四月貞信公御記云、歌舞始間、伊衡

還饗

朝臣、率堪唱歌大夫等、立陪從傍告歌(央カ)云々、

十七日、使歸時、右馬頭、左兵衛督執盃、五位等取肴物、迎中門云々、

同記云、三獻之後、四位五位各對使前勸盃、是笛(マヽ)例也、

承平三年大宰府解

延長六年官符大宰府ノ職權

十九日、戊子、大宰府管內六國ノ雜掌ヲシテ、舊ノ如ク、大帳稅帳ヲ勘濟セシム、

〔政事要略〕五十七　雜公文事上　交替雜事十七

太政官符太宰府

應如舊制、本國雜掌、令勘濟筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、六箇國大帳稅帳事、

右得彼府去年五月十日解�constituent、檢案內、件六箇國公文、各副本國雜掌、令請所司勘定、至于朝集公文者、併令府雜掌勘申、是皆依式所行來也、而被太政官去延長六年十月五日符偁、得彼府解云、此府惣攝九國二島、檢納調庸雜物、管國島司、差使雜掌等、令勘濟四度公文、調帳勘出、任式塡納、勘定抄帳、放惣返抄、稅帳公文、任式塡率分、放返却帳、專守憲法、曾无違失、卽國司功課、依府司勘定公文、更知無事疑、府司管國、更差雜掌、進上往年公文、令請二寮勘定、今年所當、四度使雜掌等、粮米前分料、合十六萬九千餘束、非只再勘之煩、兼費兩般之料、凡內外之官、皆朝家之選也、各守職、激勵從事、更有何疑、及再勘乎、望請官裁、特被改定者、省已往之費、爲將來之勤者、今勘式條、管內諸國島、大帳、調帳、稅帳、令府雜掌勘申、但筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後等國、副當國雜掌、各得勘辨者、再勘之煩雖有費、式條已存、行來爲例、抑政貴簡易、事有沿革、左大臣宣奉勅、須停六箇國雜掌入京、令府雜掌勘濟公文者、重檢案內、前司申請之旨、爲省再勘之費也、而今據件官符、專違申請之元(先イ)意、彌倍府司之大煩、何者本國雜掌、各競勘濟、猶多停滯、況府雜掌惣勘、何暇早濟、因茲管國公文、停二寮勘定、以府勘定帳、可勘合用□(虔カ)帳之狀、從去延喜八年以來、數度言上、是則爲勘濟用度帳、懇切所申請也、而歲月空移來(衍カ)、未蒙裁許、已知事更、何重所申、然則件公文、須延長官符、九箇國二島、令府雜掌、惣以勘濟、而從延喜十三年以來、不勘件公文、已經廿箇年、今以誰人爲雜掌、以何物爲其料、追濟積年之帳哉、事之難耐、不可勝計、望請、延長新制、依式如舊制、本國雜掌、令各勘濟、以省物煩、但管國帳、勘畢之國、被免府用度帳、未勘之責、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣保忠宣、奉勅、依請者、府宜承知、依宣行之、符到奉行、

政ハ簡易ヲ貴ブ

延喜十三年後二十箇年間大宰府ノ公文ヲ勘ヘズ

右大辨紀朝臣　　左大史坂上宿禰

承平四年四月十九日

二寮官人、從去延喜十三年以來、不勤大宰公文、又從承平官符以後、雖不見停止之由、而无勤公文之實云々、然而知事情、所載而已、

二十三日、壬辰、諸社ニ奉幣シテ、海賊ヲ禳ハシム、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　四月廿三日、壬辰、被立諸社奉幣、依海賊事也、

○南海海賊ノコトニ依リテ、警固使ヲ定ムルコト、三年十二月十七日ノ條ニ、山陽、南海兩道ノ諸社ニ奉幣スルコト、本年五月九日ノ條ニ見ユ、

樂人ヲ召シテ祿ヲ賜フ

保長等ヲシテ巡檢セシム

五月　大庚子朔盡

一日、庚子、曲宴ヲ行ハセラル、

〔西宮記〕臨時八　臨時樂　臨時宴遊　承平四五一、召樂人、奏音樂、給祿、

是ヨリ先、諸國ニ令シテ、桑樹ヲ殖エシム、是日、又左右京職ヲシテ、之ヲ殖エシム、

〔日本紀略〕朱雀院　五月一日、庚子、仰左右京職、令營殖桑樹、

〔政事要略〕六十雜事　交替雜事二十

左辨官下左京職、

應令京內庶人以上、播殖桑樹事、

右左大臣(忠平)宣、生民要業、織經爲元、家給人足、誠憑此道、而近代民俗、不勤栽桑、養蠶已乏、坐受苦寒、因斯播殖之狀、下知諸國既了、宜仰京內、同令種樹者、兩職承知、依宣行之、仍須每條牒示、兼作保長、率勵所部、令致豐殖、官人巡檢、數加勸課、遣使實檢、若有懈惰、加科責保長、兼罪職吏、事據濟民、不可違失、

承平四年五月一日　左大史尾張宿禰

九日、戊申、山陽、南海兩道ノ諸社ニ奉幣シテ、海賊ノ平定ヲ祈ル、

十箇國十八所ノ諸神ニ祈ル

〔日本紀略〕朱雀院　五月九日、戊申詔奉幣使於山陽、南海道諸神、祈平海賊、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　五月九日、戊申、山陽、南海兩道十箇國十八所諸神、被奉臨時幣帛使、依海賊御祈也、

○諸社ニ奉幣シテ、海賊ヲ禳ハシムルコト、四月二十三日ノ條ニ、近衞、衞門等ノ兵士ヲシテ、弩ヲ試ミシムルコト、六月二十九日ノ條ニ見ユ、

大震二度京中築垣轉倒ス

二十七日、丙寅、地震、是日、虹、紫宸殿前ニ見ハル、

〔日本紀略〕朱雀院　五月廿七日、丙寅、虹立南殿東南、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　同（五月）廿七日、丙寅、午刻大地震二度、京中所々築垣轉倒、酉刻紫宸殿南方、東第二間砌下虹見、

廿八日、卯刻小地震、

廿九日、巳刻地震、

六月三日、卯時地震二度、

〔京都帝國大學所藏文書〕狩野亨吉氏蒐集文書十二

承平四五廿七、午三尅大地震二□□□□□□（度京中所々築カ）垣顚倒、未三尅雷鳴雨降、酉刻□□（紫宸カ）殿南方東第二間砌下見虹、

○二十八日以降ノ地震、便宜合敍ス、地震ノコト、十月十九日ノ條ニ見ユ、

六月小盡　庚午朔

七日、丙子、權律師仁觀寂ス、

〔日本紀略〕朱雀院　六月一日、庚午、權律師仁觀卒、

〔僧綱補任〕二興福寺本　權律師仁觀　六月七日入滅「五十五」（朱書）

〔僧綱補任〕二興福寺本　權律師仁觀　承平元年十月廿七日任、天台宗、延曆寺、增詮和尚入室、右京人、安倍氏「五十二」（朱書）

〔護持僧次第〕朱雀院　山阿闍梨仁觀　承平元年十月廿七日任權律師、護持僧勞、年五十二、同四年六月七日卒、年五十五、右京人、良淵氏、

〔明匠略傳〕日本上　玄照律師

蒙其教誨、受法灌頂者、〇略中

仁觀護念院、〇略中已上各登用之人々也、

〇仁觀ノ寂日、日本紀略一日ニ作ル、今姑ク、僧綱補任、護持僧次第ニ據リテ掲書ス、

十一日、庚辰、月次祭、

〔北山抄〕一年中要抄上四日祈年祭事　二月　承平四年六月、月次祭、馬代進調布八端、

（増詮ノ弟子）

（馬代調布八端ヲ進ム）

上卿令仰可進見馬之由、後々多此例云々、〇台記同ジ、

〇本書、日時闕ク、恆例ニ依リテ掲書ス、

十六日、乙酉、大神宮月次祭、

〔太神宮諸雜事記〕一朱雀天皇　承平四年六月、御祭之間、大洪水頻志天枳、祭使祭主、以十六日到著於離宮院、即依例參宮、又齋內親王者、從齋宮直道仁豐受宮參宮給、即其夜一殿御夜宿、因之宮司所勤之供給物等、從離宮運進天勤仕畢、是依先例也、十七日波、依例太神宮仁參入御之處、御輿宿院內仁和、依有鹿之穢氣天、御輿遠九丈殿西砌仁宿置多利、

（祭使離宮院ニ到著ス）

（豐受大神宮月次祭）

（皇大神宮月次祭）

十九日、戊子、山陵使ヲ後田邑、後山科二陵ニ發遣ス、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　六月十九日、戊子、被立後田邑（光孝）、後山科山陵使、依彼山陵方數度鳴也、

（陵數度鳴ル）

二十一日、庚寅、御讀經ノ間、雷鳴陣ヲ立ツ、

〔西宮記〕六月雷鳴陣　或人私記云、御讀經間、并夜中早旦、雷鳴陣立儀有疑、〇略中後日見承平四年六月廿一日記、御讀經間、雷鳴陣立如例云々、

二十九日、戊戌、近衞、衞門等ノ兵士ヲシテ、弩ヲ神泉苑ニ試ミシム、

承平四年六月二十九日

〔扶桑略記〕二十五裏書 朱雀天皇　六月廿九日、於神泉馬出殿、試右衞門志貞直、內藏史生宗良、左近衞常蔭等之弩、爲遣海賊所也、

○山陽、南海兩道ノ諸社ニ奉幣スルコト、五月九日ノ條ニ、兵士ヲ追捕海賊使ニ加フルコト、七月二十六日ノ條ニ見ユ、

七月大己亥朔盡

十三日、辛亥後山階陵ノ陵戸、及ビ傜丁ヲ醍醐寺ニ寄進ス、

〔慶延記〕十三 醍醐雜事記十三 免除證文下

一御陵付寺家宣旨

右大辨紀朝臣淑光傳宣、中納言藤原朝臣扶幹宣、奉勅、後山階新陵陵戸五烟、傜丁貳拾伍人、暫停諸陵寮領、宜寄醍醐寺、令守御陵者、

承平四年七月十三日

左大史坂上在判奉 ○醍醐寺要書、醍醐雜抄、重酉抄同ジ、

陵戸五烟傜丁二十五人

○後山階陵ニ、陵戸及ビ傜丁ヲ置クコト、延長八年十月十日ノ條ニ見ユ、

十七日、乙卯薩摩國、唐馬ヲ獻ズ、

〔日本紀略〕朱雀院 七月十七日、薩馬國唐馬一疋、葦毛牝馬、牽進左大臣家、

〔扶桑略記〕二十五裏書 朱雀天皇 七月十七日

葦毛唐馬ヲ忠平ニ贈ル

二十六日、甲子、海賊追捕ノ爲メ、武藏及ビ諸家ノ兵士等ヲ發遣ス、

〔扶桑略記〕二十五裏書 朱雀天皇 七月廿六日、甲子、兵庫允在原相安、率諸家兵士、幷

在原相安諸家兵士等ヲ率ヰ

承平四年七月十三日 十七日 二十六日

テ發向ス

武藏兵士等、發向追捕海賊之所、

○近衛、衞門等ノ兵士ヲシテ、弩ヲ神泉苑ニ試ミシムルコト、六月二十九日ノ條ニ、追捕海賊使ヲ定ムルコト、十月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十九日、丁卯、相撲召合、尋デ、追相撲アリ、

〔日本紀略〕朱雀院　七月廿九日、丁卯、於紫宸殿相撲召合、○樗囊抄同ジ、

卅日、戊辰、追相撲、

大雨ニ依リテ延引

〔西宮記〕七月童相撲　承平四年七月廿八日、依大雨、廿九日、有其事云々、而間天晴、有召合事、

承平四年、依雨停止、又日有召合事、

〔小野宮年中行事〕七月廿八日相撲召合事　裏書　承平五年七月廿八日貞信公御記云、相撲召合也、○中略　去年左右奏、左大將（仲平）共奏、右大將（保忠）不參故也、

〔舞樂要錄〕上　相撲節

同四年（承平）

召合　七月廿九日

左、抹兜、

召合樂曲

右

拔出　同卅日

左、蘇合　万歲樂　散手　陵王　褌脫

右、古鳥蘇　阿耶支利　貴德　納蘇利　桔槔

拔出樂曲

八月小己巳朔盡

十四日、壬午、石清水別當總祐寂ス、

〔石清水祠官系圖〕總祐　會俗弟子、得讓、任別當、自五師、朱雀院御宇第六別當、承平四年八月十四日入滅、寺務半年、○石清水八幡宮記錄同ジ、

或記云、承平四年四月廿九日官符、八月十四日入滅、寺務四箇月、未補一年七箇月、自承平三四至同四三放生會、執行所司行之、

○總祐、妙樂寺建立ノコト、便宜左ニ附載ス、

〔石清水八幡宮末社記〕一妙樂寺　承平四年、別當總祐建立之、

二十四日、壬辰、社寺ヲシテ、封戸及ビ課丁ノ減損ヲ塡メシム、

〔政事要略〕五十一交替雜事十一　調庸未進事　承平四年八月廿四日符云、應不令減損神寺封戸課戸課丁事、右檢式條、神寺封戸、若有增益、隨卽減之、死損不須更加者、夫分入封戸、先給供祭、年料日用支配有限、而偏稱式文、動損課丁、如此減損、若不休止、至末代恐盡廢絕、宜准食封隨損令塡、但制式之後、年代已□、所減之丁、忽難塡滿、仍須不塡、既往之欠、勿致將來之塡、

二十六日、甲午、光孝天皇國忌、是日、武藏駒牽、

會俗ノ弟子五師ヨリ別當トナル

食封ニ准ジ損ニ隨ヒテ塡メシム

修理職解

延喜二十年後怠納十四箇年ニ及ブ主税寮ノ勘申

〔樗囊抄〕年中行事　駒引　廢務日

承平四八廿六、國忌、武藏、

二十九日、丁酉、相模ノ年料交易、石灰厚紙等ノ未進ヲ責ム、

〔政事要略〕五十七雜公文事上交替雜事十七

太政官符民部省

應以職移文勘會諸國稅帳雜交易物事

右得修理職解偁、謹檢案內、從諸國所進納魚、海藻、檜皮、赤土、石灰、紙、商布、藁等、每國率充物數、下知官符早畢、而或國爲省物煩、不立用直物、或國乍用直物、不進正物、就中相模國年料交易、石灰厚紙千百五十張也、而惣計去延喜廿年以降、承平以往十四箇年、未進二萬五千張、言上於官之日、令下勘主稅寮、而彼寮勘申云、延喜元二三四箇年料、別年立用稅帳已畢者、注上件事由、以去承平四年八月廿九日給責官符亦畢、而彼時之吏、或以其身卒去、或以得放還歸京、遂積未進、更無究濟、○略中

天慶二年閏七月五日

九月大　戊戌朔盡

一日、戊戌、日食、

〔日本紀略〕院朱雀　九月一日、戊戌、日蝕、廢務、○扶桑略記裏書同ジ、

〔本朝統暦〕六　九大朔、戊戌、未六、日蝕、十一分弱、未一、申六、

五日、壬寅、樂器目錄ヲ定ム、

〔拾芥抄〕上末樂器部三十五在名物

箜篌一張、承平四三定、　篳篌七面二面黑漆、一面赤漆、四面白木、已上承平四年目錄

名物

琵琶

阮咸二面累代名、承平四三定、　五絃二面一面桑木、一面木槻（槻木カ）　阮咸三面一面紫檀、一面紫檀木繪（水カ）、一面不知其名、

已上承平四年目錄、

箏

秋風延喜聖主御箏也、崩御之後籠山陵、丸、小野宮殿改之、　小師子　臥見（伏イ）　秋野　大螺鈿天暦御箏、　小螺鈿同上、　師子形本名師子

神智作　古上（ケカウ）　葦鶴（タツ）　輪臺　青海波　花文（ケ）　蟬清（水カ）木繪、錦袋、入　無名二張

醍醐天皇ノ御箏

已上承平四年九月五日入目錄、

琴

閑柄　山水李部王記云、天暦四年華宴御遊琴、　漁魚魚或作父、　松風　樣　仙洞代　閑樓

龍吟已上承平四九五入目錄、

一諸　五絃　松風　幽絃　龍門件琴康保三夏、依聖上恩拜納了、已上琴七張承平四年定、

泰平　恬損　儀女　南風已上、　異躰琴四面承平四年目錄、　新羅琴三張承平四年定、

和琴

宇多法師寛平法皇、貴重餘有此名、　大嘗會所琴　河霧上東門院御相傳、今在攝錄家歟、　宇多入蒐褐袋、

朽目入同袋、　鵄尾琴內教坊所分、　二張無名已上承平四九五入目錄、

○樂器目錄ヲ製スルコト、延喜九年是歲ノ條、及ビ應和元年是歲ノ條ニモ見ユ、

十七日、甲寅、大神宮神嘗祭、神民、齋宮寮官人等ト鬪亂ス、尋デ、神祇權大祐大中臣頼基等ヲシテ、之ヲ祈謝セシム、

〔太神宮諸雜事記〕一朱雀天皇　承平四年九月御祭仁、齋子（雅子）內親王、依例參入二

酒殿預齋宮寮門部司長ト口論ス

宮給倍利、而太神宮御祭直會三獻之間、以亥時許天、神宮酒殿預荒木田希繼、與齋宮寮門部司長佐伯眞道、俄成口論之間、件希繼悉以被陵礫畢、卽付希繼之呼響天、神民與寮人已下、併亂合成鬪亂、于時寮頭、糺問本末之程、禰宜最世不聞其沙汰、俄取合於寮頭成亂間、勅使王中臣等立座天、入彼此之中障故仁、忽雷電鳴騷天、大雨如沃、參宮人千万不論貴賤、恐畏迷心神、退出宮中之間、御川水出湛天、人馬不堪渡行、而間寮人隨身馬二疋、乍置鞍走失、不知行方、如此騷動志天、恆例倭儛、御節酒立等、不供奉爪、時刻推移、禰宜宮司等、以明十八日卯時、次第神態奉仕、寮人退出之間、門部司者一人、於宇治山落馬死了、寮頭注子細、上奏於公家畢、仍以同十月廿三日被下宣旨、左衞門尉府生各一人、到著於寮廳、被對問禰宜與寮頭之處、禰宜所爲甚非常、無陳遁所、進怠狀已畢、又寮頭於無止之祭庭、寄事於鬪亂、不令供奉神事之由、無所遁、進怠狀又畢、隨則以同年十一月十三日、差下使中臣神祇權大祐正六位上大中臣朝臣賴基、卜部正六位上宮主卜部宿禰茂行等、且被令祈申其由、禰宜科上祓、寮頭科中祓、門部司長貞道科大祓天、勤仕、卽至于貞道者、追却寮中畢、

禰宜ニ上祓寮頭ニ中祓門部長ニ大祓ヲ科ス

恆例ノ倭儛翌日神態ヲ奉仕ス

禰宜寮頭共ニ怠狀ヲ進ム

檢非違使ヲシテ對決セシム

二十一日、戊午、醍醐寺二年分度者一人ヲ加ヘシム、

承平元年分度者二人ヲ置ク

〔醍醐寺要書〕

太政官符治部省

應加置醍醐寺年分度者一人事

金剛界業

可習學守護國界主陀羅尼經一部

菩提心論一卷　大隨求陀羅尼經一部

右彼寺座主權律師法橋上人位貞宗奏狀偈、此伽藍建立之後、寶曆初開之日、去承平元年、被給年分度者二人、自後隨年試度、星霜四換、夫四生幾生、六趣多趣、身口意之塵易迷、欲色无三界難出、非自普浴、何期超昇、雖思先朝昭伶之跡、猶少法界利益之功、望請天裁、依准仁和寺例、被加給件一人、然則菩提添種、功德增華、比之三業、分之三界、廣通汲引之路、各開出離之門、凡厥試度之法、薰修之趣、具於前奏者、中納言從三位藤原朝臣扶幹宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

承平四年九月廿一日

僧綱牒　玄蕃寮牒　治部省符

僧綱牒醍醐寺
應加置年分度者一人事
金剛界業如先、
牒、玄蕃寮今月廿五日牒、今日到來�segment、治部省今月五日符偁、被太政官去九月
廿一日符偁、彼者如先、者、牒送如件者、寺宜承知、依件行之、故牒、
承平四年十月廿九日　　從儀師
大僧都　　權威儀師
少僧都　　威儀師
以下律師三人　　以下五人
權四人

十月小戊辰朔盡

十日、丁丑、興福寺維摩會、　墩仁探題ノ宣旨ヲ蒙ル
〔維摩會講師研學竪義次第〕四年（承平）、甲子、講師仁揚（年五十七、萬卅九、（承平）二月七日宣、十九日請）吉志氏、右京人、三論宗、元興寺、律師（承平）墩仁（十月日蒙探題宣）研學助精（年四十、萬十七、五十七、元興寺、三論宗、）竪義（四十）助精、次勝超、
〔三會定一記〕一　同四年、（承平）二月七日宣、講師仁揚
法性寺ヲ定額寺ト爲シ、年分度者ヲ置ク、
〔日本紀略〕朱雀院　十月十日、丁丑、以法性寺爲定額寺、置年分度者、
十五日、壬午、法性寺ニ於テ、始メテ灌頂ヲ行フ、
〔日本紀略〕朱雀院　十月十五日、壬午、於法性寺、始有灌頂事、
十九日、丙戌、地震、雷鳴アリ、是日、東大寺ノ西塔、雷火ノ爲メニ燒失ス、　東大寺ハ大和ノ國分寺ノ廊燒ク
〔日本紀略〕朱雀院　十月十九日、丙戌、地震、雷鳴、東大寺西塔并廊、爲神火被燒、
大和國國分寺也、
〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇　十月十九（廿九）日、雷火燒亡東大寺西塔、
〔扶桑略記〕二十五朱雀天皇裏書　十月十九日、辰刻地震、戌刻雷鳴、今夜東大寺西塔
并廊等、爲神火燒亡、但大和國々分寺也、

〔一代要記〕朱雀天皇　三年（承平）癸巳十月十九日、雷火燒東大寺西塔、

〔東大寺要錄〕雜七事章十　一講堂供養事（日記文）

造東大寺講堂使、（承平四年十月十九日、今夜雨降、又有東大寺西塔并廊等爲神火燒亡事、）

〔東大寺雜集錄〕一　承平三癸巳年　十月十九日、爲雷火、東大寺西塔炎上、（四年トモ云、）

四甲午年　十月廿九日、爲雷火、東大寺西塔燒失了、

〔東大寺別當次第〕（四十二）傳燈大法師寬救　（承平）六年十月廿九日西塔燒亡、雷火、

〔古今著聞集〕（二十）魚虫禽獸　承平の比、狐數百頭、東大寺の大佛を禮拜しけり、諸人これを追ひければ、その靈、人につきていひけるは、久しく此寺にすむ、今尊像をいたましめてやかんとする、故に、禮拜をいたす也とそいひける、

○西塔燒亡ノコト、東大寺別當次第、六年十月二十九日ニ作リ、一代要記、東大寺雜集錄、三年十月十九日、及ビ四年十月二十九日ノ兩度ニ作ル、今、日本紀略、扶桑略記、東大寺要錄等ニ據リテ掲書ス、地震ノコト、四年五月二十七日、及ビ五年正月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十二日、（己丑）追捕海賊使ヲ定ム、

〔日本紀略〕朱雀院　十月廿二日、己丑、定追捕海賊使等、

○海賊追捕ノ爲メ、武藏等ノ兵士ヲ發遣スルコト、七月二十六日ノ條ニ、海賊、伊豫喜多郡ノ不動穀ヲ奪フコト、是冬ノ條ニ見ユ、

十一月（大丁酉盡朔）

十二日、戊申、平野祭、

〔北山抄〕（一年中要抄上　上申日平野祭事）　承平四年十一月十二日、内侍有障不參、

以女史命婦敦子爲代官、先例也、（貞記、御女史命婦ヲ内侍代トス爲）

二十日、丙辰、豐明節會、

〔政事要略〕（二十六年中行事二十　十一月二年中卯新嘗祭事）　吏部記、承平四年十一月廿日、丙辰、

新嘗會、申一剋上御簾中、三獻畢、（忠平）内辨大臣、歷座北進簾下、使内侍奏可賜諸大夫酒事、奉行了復座、雨降、歌者避雨、音聲斷絶、右（仲平）大臣縫殿仰移歌者座於宜陽殿、大臣謂（重明）余云、思先年有此例移、然而外記確執无例、抑如何、答云、實見此例、在延長五六年間乎、（中略、寛平七年十一月十六日ノ條ニ收ム、）五節舞畢、右大臣令問歌數、云卅終、大臣（云脫カ）年來多奏五六十終、而近年如是舞急也、上已（還脫カ）寢、内侍亦不留、藏人頭師輔在簾中執之、（申刻出御内辨忠平五節舞ノ歌數）

〔花鳥餘情〕（十繪合）　李部王記、承平四年、新嘗會、勅召書司、々々稱唯、仰云、御手奈良之万爲禮、書司卽取朽女、（倭琴名）置之御前云々、（倭琴朽女ヲ御前ニ置ク）

十二月（小丁卯朔盡）

九日、乙亥、左大臣忠平、皇太后五十ノ御賀ヲ行フ、

〔日本紀略〕（朱雀院）　十二月九日、左（忠平）大臣、爲（穩子）大后御五十算、獻物於常寧殿、

〔河海抄〕（十三若菜上）　大饗になすらへて、みこたちには女のさうそく、ひさんきの四位、まうち君たちなど、たゝの殿上人にはしろきほそなか、

太后（穩子）御記云、承平四年十二月九日御賀、みこたち、かんたちめには女のよそひ、宰相にはさくら色のほそなか云々、

御をくり物に、すくれたる和琴一、このみ給こまのふえそへて、したんのはこ一よろひに、からのほんともなど、

太后御記、承平四年十二月九日御賀、おと（忠平）ゝとくまかて給ひぬ、又をくり物、沈のはこ一よろひいれたり、せむ（慥聞）たいの御てのまんようしう、今一には本五まき、やまとことを一云々、（皇太后忠平ニ醍醐天皇ノ萬葉集ヲ贈ラル）

〔西宮記〕（十二臨時　○前田家本）　承平四年十二月九日、小（忠平）一條大臣、賀皇后、有御調度等、（忠平物ヲ獻ズ）

〔西宮記〕（十二臨時　○前田家本）　大臣賀皇后御算事　承平四年十二月九日、中（穩子）宮皇后御賀事　承平四年三月廿四日、

御賀試樂、○中略

貞信公御記云、九日、奉仕中宮御賀、御厨子六基、納物、雜御屏風六帖、之中四尺一帖、獻物百棒、屯物五十具、有所々饗、宮司女房等祿、彩衾納辛櫃廿合、殿上童奏舞、又奏琴和琴、參入王卿殿上人等祿、宮給云々、

萬葉集筥二合ニ入ル

予不及祿退出、追給祿幷手跡、和琴等、本万葉集入筥二合、

伊勢御屏風ノ歌ヲ詠ズ

〔花鳥餘情〕十九若菜上　承平四年の中宮の御賀は、貞信公于時攝政左大臣、是を獻せらる、攝政は人々祿を給る、さきに早出ありしかは、おつて中宮より祿と引出物和琴、萬葉集の本なとをたまはり給ふ、その子細は、太后の御日記にもみえたり、

〔伊勢集〕上　是も后の宮の御賀、おほきおとゝ(忠平)のつかうまつり給し御屏風の繪に、松に鶴立る所、

すみの江の濱の眞砂をふむ田鶴はひさしき跡をとむる成へし

○皇太后ノ五十ノ御賀ヲ行ハセラルヽコト、三月二十六日ノ條ニ見ユ、

十一日、丁丑、月次祭、

〔政事要略〕二十八年中行事二十二月上十一日月次祭事　吏部記、承平四年十二月十一日夕、參神祇官小忌殿、進疊畳、共進座、召碁局、使源國淵朝臣、源朝臣衆望園碁、中納言仰儲(賜カ)錢、兼盛居、

二十一日、丁亥、除目、

〔公卿補任〕五

中納言　從三位平伊望、五十四、十二月廿一日敍從三位、任中納言、

藤實賴、三十五、十二月廿一日敍從三位、任中納言、右衞門督、別(檢非違使)當如元、別當勞二年、

參議正四位下源是茂、五十、承平四十二廿一任參議、左兵衞督如元、

正四位下藤伊衡、五十九、同年(承平四年)十二月廿一日參議(任脫カ)、

從四位上紀淑光、六十六、同(承平)四十二廿一任參議、辨、長官(右大辨)如元、(勘解由)

〔公卿補任〕五天慶二年　參議從四位上藤敦忠、三十四、十二月廿一日左近權中將、(承平四年)

〔公卿補任〕五天慶四年　參議從四位下藤在衡、五十、同(承平)四十二廿一兼式部少輔、

〔公卿補任〕五　天暦五年　参議從四位上源正明、五十九、同（承平）四十二廿一右中將、

〔公卿補任〕五　天暦七年　参議從四位上大江朝綱、六十八、十（承平四年）十二月廿一日兼文章博士、

〔公卿補任〕五　天德二年　外記令見參議時望歟、参議從四位下橘好古、六十六、同（承平）四十二廿一大學頭、

〔敍位除目執筆抄〕承平四十二廿一日除目、執筆、

二十七日、癸巳、醍醐天皇ノ皇子源允明、元服セラル、尋デ、從四位上ニ敍ス、

〔西宮記〕臨時九　一世源氏元服　承平四年十二月廿七日更部記云、允明源氏、於中務（代明）卿親王家加冠、于時十六歲、其儀、寢殿南廂東向、設引入座、用土敷二枚茵、其東對鋪疊、備冠者幷垣下座、東廂設諸大夫座、東座設冠者休所云々、冠者卽垣下、疊上鋪圓座、諸大夫傳安巾櫛具、源氏座定、左右指燭、理髮加冠等了、退休所、改服行拜禮、而主客共答拜、可有物煩、仍停之、卽備膳、大臣用折敷十二枚、地敷等、垣下親王、一世源氏及理髮者、用半机二前、以上用樣器、是間獻物、折櫃物唱名畢、貫首右中將源正明朝臣召宮別當民部丞藤茂實付之、飲酣主客圍碁、是間引入纏頭女裝束、贈馬鷹、又理髮女裝束云々、○伏見宮御記、花鳥餘情同ジ、

加冠ノ儀鋪設

主客ノ拜禮ヲ停ム

圍碁アリ

引入ニ女裝束及ビ馬鷹ヲ贈ル

〔北山抄〕三　内宴事　拾遺雜抄上　同（承平）五年、敍○中略允明源氏從四位上、此日不唱云々、

二十八日、甲午、源重信ノ昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕五　天德四年　参議從四位上源重信、三十九、承平四十二廿八聽昇殿、

十三、

是冬、海賊、伊豫喜多郡ノ不動穀ヲ奪フ、

〔扶桑略記〕二十五裏書 朱雀天皇 承平五年正月九日、頃年之間、海賊未隨追捕、去年之末、盜運伊豫國喜多郡不動三千餘石云々、

○追捕海賊使ヲ定ムルコト、十月二十二日ノ條ニ、海賊ノコトニ依リテ、諸社ニ奉幣スルコト、五年六月二十八日ノ條ニ見ユ、

是歲、勘解由使ヲシテ、越前ノ公廨稻辨進、伊賀ノ戎具闕失、及ビ下野ノ五行器無實ノ責ヲ免ズルコトヲ勘判セシム、

〔政事要略〕五十三 雜田事

勘解由使勘判抄

一田事○中略

越前 前司藤遠成、

非常赦判云、公廨佃(田カ)獲稻、須後司相承、令郡司辨進充行料、主莫拘前司、承平四年判、

越前 後司相承ケ郡司ヲシテ辨進セシム

〔政事要略〕五十四 器仗戎具事 交替雜事十四

勘解由使勘判抄

一器仗戎具事○中略

伊賀 前司源昭

(元赦判)又云、失由不明、事涉盜犯、須頒前司所塡差分、其遺者令彼同任吏、郡司主守人等塡償、若在國庫欠失者、不可責郡司、破損者或不注損色、依式爲全、或雖注而是少破也、見任以傜修理、

伊賀 見任ヲシテ傜ヲ以テ修理セシム

承平四年判

伊賀 後司チシテ辨濟セシム

下野 見任チシテ備チ以テ儲備セシム

〔政事要略〕五十七 交替雜事 雜公文事上 雜事十七

勘解由使勘判抄

四度公文幷返抄事○中略

伊賀 源昭、

(元脫判)又云、前司被放還了、須後司辨濟、承平四年判、

〔政事要略〕六十 雜事 交替雜事二十

勘解由使勘判抄

一五行調度○中略

下野 使方尙

非常赦判云、件五行器无實、事在恩前、須見任相承、以備儲備、

承平四年(判脫カ)

豐受大神宮禰宜度會晨晴轉任

越後乙寺ノ僧猿ノ爲メ法華經ヲ書寫ス

年末雜載

神社、

〔豐受太神宮禰宜補任次第〕禰宜從五位下神主晨晴 同(承平)四年甲午二月十三日轉任、

佛寺、

〔本朝法華驗記〕下 第百廿六越後國乙寺猿

越後國乙寺有持經者、攝心不亂、調身閑居、讀誦法華經、更無餘念、爰二猿來住前樹上、終日聞經、朝來暮去、二三月間、每日不闕、來聞此經、怪思此事、漸近猿邊、問曰、汝猿何故常來、若欲讀誦妙法華經、猿向沙門振頭不受、若欲書寫經、猿合咲喜、合掌頂禮、持經者告言、若欲書寫經、我當爲汝書寫法華、猿聞此語、從眼淚出、頂禮沙門、下樹還去、從其已後、逕五六日、有數百猿、悉皆負物、來置沙門前、見之紙料、剝取樸木皮各持來矣、沙門見之、生希有心、以樸皮作經紙畢、選定吉日、書寫始此經、從書經日、每日不闕、二猿各持薯蕷來、臨秋冬時、栗柿等種々菓子採持供養、至第五卷、一兩日間、二猿不來、沙門怪念、出寺近邊、巡見山林、二猿傍置數本薯蕷、土穴頭入、二猿死了、沙門見畢、流涙悲歎、收其死屍、讀經念佛、訪彼

守紀躬高著府神拜以前ニ先ツ寺ニ入ル

乙寺ノ所在

菩提、沙門以其獼猿法華經不書寫畢、刻佛前柱、奉籠置了、其後已經四十餘年、紀躬高（○今昔物語、藤原子高ニ作ル、）朝臣成其國刺史、著府已後、不勤神拜、不始公事、寂初參向三島郡乙寺、守問住僧、若此伽藍、有不書畢妙法華經、諸僧驚求、更不御坐、件持經者年過八十、老耄猶存、白長官言、昔猿書始經御坐申、長官大喜、禮老僧云、不審、其經何所御坐、爲果其願、任此國守、我昔猿身、依持經者聞經發心、依聖人勸書寫法華、聖人存生時、弟子至此國、是非小緣、未曾有事、唯願聖人書畢此經、令滿我願、老僧聞守語、流不覺涙、悲歎無限、取於件經、一心精進、書寫既畢、長官又書寫三部法華經、供養恭敬、勤修善根、不可等數矣、沙門法華經力、得生淨土、寫經二猿、因一乘力、轉生成國守、發道心修善、後生妙果、宛如指掌焉、

〔今昔物語〕（十四本朝付佛法　越後國乙寺僧爲猿寫法花語第六）

今昔、越後ノ國三島ノ郡ニ乙寺（キノト）ト云フ寺有リ、其ノ寺ニ一人ノ僧住シテ、晝夜ニ法花經ヲ讀誦スル以テ役（ツトメ）トシテ、他ノ事无シ、而ル間、二ノ猿出來テ、堂ノ前ニ有ル木ニ居テ、此ノ僧ノ法花經ヲ讀誦スル聞ク、朝ニハ來テ夕ニハ去ル、如此ク爲ル事、既ニ三月許ニ成ヌニ、毎日ニ不闕スシテ、同樣ナル居テ聞ク、僧此ノ事ヲ怪（シノト）ミ思テ、猿ノ許ニ近ク行テ、猿ニ向テ云ク、汝ヲ猿ハ月來如此ク來テ、此ノ木ニ居テ經ヲ讀誦スル聞ク、若シ法花經ヲ讀誦セム思フカ、猿僧ニ向テ頭ヲ振テ、不受ヌ氣色也、僧亦云ク、若シ經ヲ書寫セム思フカ、其ノ時ニ猿喜ヘル氣色ニテ□僧此レヲ見テ云ク、汝ヲ若シ經ヲ書寫セム思ハヽ、我レ汝等カ爲ニ經ヲ書寫セム、猿此レヲ聞テ口ヲ動シテ、尙□テ喜ヘル氣色ニテ木ヨリ下テ去ヌ、其ノ後五六日許ヲ經テ、數百ノ猿、皆物ヲ負テ持來テ僧ノ前ニ置ク、見レハ、木ノ皮ヲ多ク剝キ集メテ、持來テ置ク也ケリ、僧此レヲ見ルニ、前ニ云ヒシ經ノ料ノ紙ニ揑（スケ）ト思ヒタル也ケリ心得テ、奇異ニ思ユル物貴キ事无限シ、其ノ後、其ノ木ノ皮ヲ以テ紙ニ揑テ、吉キ日撰ヒ定メテ、法花經ヲ書キ始メ奉ル、經ヲ書キ始ムル日ヨリ、此ノ二ノ猿、毎日ニ不闕ス來ル、或ル時ニハ、署預野老ヲ掘テ持來ル、或ル時ニハ、栗柿梨子棗等ヲ拾テ、持來テ僧ニ與フ、僧此レヲ見ルニ、彌ヨ奇異也ト思フ、此ノ經、既ニ第五ノ卷ヲ書キ奉ル時ニ成テ、此ノ二ノ猿、一兩日不見ス、何ナル事ノ有カトルニ怪ヒ思テ、寺ノ近キ邊ニ出テ、山林ヲ廻テ見ルニ、此ノ二ノ猿、林ノ中ニ署預ヲ多ク掘リ置テ、土ノ穴ニ頭ヲ指入テ、二ツ乍ラ同シ樣ニ死テ臥セリ、僧此レヲ見テ、涙ヲ流シテ泣キ悲ムテ、猿ノ屍ニ向テ法花經ヲ讀誦シ、念

佛ヲ唱テ猿ノ後世ヲ訪ヒケリ、其ノ後、僧彼ノ猿ノ誂ヘシ法花經ヲ不書畢スシテ、佛ノ御前ノ柱ヲ刻テ、籠メ置キ奉ツ、其ノ後四十餘年ヲ經タリ、其ノ時ニ、藤原ノ子高ノ○本朝法華驗記、元亨釋書、古今著聞集、紀朝高ニ作ル、朝臣ト云フ人、承平四年ト云フ年、當國ノ守ト成テ、既ニ國ニ下ヌ、國府ニ著テ後、未タ神事ヲモ不拜ス、公事ヲモ不始サル前ニ、先ツ夫妻相共ニ三島ノ郡ニ入ル、共ノ人モ館ノ人モ、何ノ故有テ、此ノ郡ニハ忽キ入リ給フラム、怪ヒ思フニ、守國寺ニ○本朝法華驗記、元亨釋書、古今著聞集、乙寺ニ作ル、參ヌ、住僧ヲ召出テ、問テ云ク、若シ此ノ寺ニ、不書畢サル法花經ヤ御マスト、僧共驚テ尋ヌルニ不御サス、其ノ時ニ、彼ノ經ヲ書キシ持經者、年八十餘ニシテ、老耄シ乍ラ、未タ生テ有ケリ、出來テ守ニ申シテ云ク、昔シ若カリシ時、二ノ猿來テ、然々シテ教ヘテ令書メタリシ法花經御マスト申テ、昔ノ事ヲ不落ス語ル時ニ、守大ニ喜テ、老僧ヲ禮テ云ク、速ニ其ノ經ヲ取出シ可奉シ、我レハ彼ノ經ヲ書キ畢奉ラムカ爲ニ、人界ニ生レテ、此ノ國ノ守ト任セリ、彼ノ二ノ猿ト云フハ、今ノ我等カ身此レ也、前生ニ猿ノ身トシテ、持經者ノ讀誦セリシ法花經ヲ聞シニ依テ、心ヲ發シテ法花ヲ書寫セムト思ヒシニ、聖人ノ力ニ依テ、法花ヲ書寫ス、然レハ我等聖人ノ弟子也、專ニ貴ヒ可敬シ、此ノ國ノ守ニ

藤原子高ナリトノ説

任スル、輙キ緣ニ非ス、極テ難有キ事也ト云ヘモ、ト偏ヘニ此ノ經ヲ書キ畢奉テムカ故也、願クハ、聖人速カニ此ノ經ヲ書キ畢奉テ、我カ願ヲ滿ヨト、老僧此ノ事ヲ聞テ、淚ヲ流ス事雨ノ如シ、卽チ經ヲ取出シ奉テ、心ヲ一ニシテ書畢奉ツ、守亦三千部ノ○本朝法華驗記、元亨釋書、三部ニ作ル、法花經ヲ書キ奉テ、彼ノ經ニ副ヘテ、一日法會ヲ儲テ、法ノ如ク供養シ奉テリ、ケ老僧ハ此ノ經ヲ書奉レル力ニ依テ、淨土ニ生レニケリ、二ノ猿、法花經ヲ聞シニ依テ、願ヲ發シテ、猿ノ身ヲ棄テ、人界ニ生レテ、國ノ司ト任ス、夫妻共ニ宿願ヲ遂テ、法花經ヲ書寫シ奉レリ、其ノ後道心ヲ發シテ、彌ヨ善根ヲ修ス、實ニ此レ希有ノ事也、畜生也ト云ヘモ、ト深キ心ヲ發セルニ依テ、宿願ヲ遂ル事如此シ、世ノ人、此レヲ知テ、深キ心ヲ可發トナ語リ傳ヘタルトヤ、

守法華經ヲ書寫シテ法會ヲ修ス

生死、

〔願文集〕七

僧覺意寂ス

右佛子覺意、以去五月十九日奄然遷化、是生是□(滅カ)、雖知輪廻之無常、爲父爲子、猶悲慈孝之難忘、與其灑紅淚於悶電之闇、未如修白薰於梵雨之界、仍迨於七七忌景、聊令供養件佛經、仰願八正水澄、泛慈筏於解脫之岸、六欲雲盡、轉法輪

於常樂之門、已斷塵網於鳩車之日、盡開覺藥於鷲峰之風、分此一善、普利間(門)生、
敬白、

承平四年七月八日

〔柳原家記錄〕百九太元祕記　一別當次第事
延喜第五阿闍梨舒隆　承平四年甲午十二月廿三日入滅、勤行五年、

阿闍梨舒隆寂ス

雜、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　閏正月十五日、巳時空響兩度似雷、
二月五日、乙亥、官正廳梁上烏巢、

空中聲アリ
烏太政官廳梁上ニ巢フ

承平五年乙未

正月大丙申盡朔

一日、丙申、朝賀、節會、

〔日本紀略〕朱雀院　正月一日、丙申、有朝賀、

〔江次第〕一元日正月宴會甲　立樂略○中承平五年、春庭樂、賀殿、王仁云々、

樂ヲ奏ス

〔愚管記〕五　延文四年正月十六日、庚戌、
執政人奉仕節會內辨例
貞信公(忠平)于時攝政左大臣、

內辨忠平

同(承平)五年正月一日、○元日節會次第同ジ

三日、戊戌、藤原師尹ノ昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕五天慶八年　參議從四位下藤師尹、二十六、同(承平)五正三昇殿、

四日、己亥、左大臣忠平、大饗ヲ行フ、

〔九條殿御記〕年中行事二○九條家本　大臣家大饗　同(承平)五年正月四日、己亥、早朝參殿、
大饗如例、請客使浣朝臣、蘇甘栗使敏仲、自陽成院使時雨朝臣、被給鮮鴆四翼、
給大褂一領、又自大內藏人所給鮮鴆、事了右大將(保忠)、右衞門督(實賴)、藤宰相(師輔)等、相共御

上皇鴆ヲ賜フ

坐寢殿北面、御讀(讃カ)說良久、以紫綺小褂給右大將、以裳一襲給藤宰相、

五日、庚子、右大臣仲平、大饗ヲ行フ、

〔九條殿御記〕年中行事二　大臣家大饗　○九條家本　同(承平)五年正月○中略五日、庚子、右(仲平)大臣殿大饗、大閤(忠平)不御坐、又不儲御座、午時參彼殿、

七日、壬寅、節會、

〔西宮記〕正月中七日節會　承平五年正月七日、節會、云々了、右(仲平)大臣擬云、內舍人奏御弓、是非所管、其義未達、余答云、令云、有獻軍器戎仗等、卽令內舍人隨獻人將入云々乎、若是其義乎云々、

〔玉葉〕文治二年正月五日、甲申、此日不被行敍位、○註略ス、入夜長光入道來、非亮闇不被行敍位例、○略中　承平五年吏部王記云、無敍位、上御南殿、奏御弓、引靑馬云々、

〔園太曆〕延文四年正月十六日、庚戌、今日踏歌節會也、公卿關白左大臣殿、內辨、○中略　攝籙內辨事、○略中　承平等先規暫閣之、○略中

實冬卿記

忠平至ラズ又其座ヲ設ケズ

內舍人御弓ヲ奏ス

敍位ナシ

紫宸殿出御靑馬ヲ牽ク

文永十二年正月七日、己卯、○略中　攝政關白勤仕內辨、○略中　同(承平)○略中　五○略中　年云云、

八日、癸卯、後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　長者律師濟高　後七日法、

〔後七日御修法阿闍梨名帳〕朱雀院　五年(承平)、乙未、權少僧都濟高、

十四日、己酉、御齋會內論義、

〔北山抄〕一年中要抄上　十四日御齋會畢并殿上論議事　正月　呪願畢、丞退出、次公卿以下、又置笏一拜、略○中　近例又把之、然而檢舊例、置笏之由、見承平五年私(御ヵ)記、又彼御記被注失由云々、

十六日、辛亥、節會、

〔九條年中行事〕

綿伍仟屯、下大藏、

右今月十六日、踏歌庭積祿料、依例彼省所請如件、

承平五年正月十四日

左(忠平)大臣宣、宣充之、

左少辨大江朝綱奉

內辨攝政忠平

公卿笏ヲ置キテ一拜ス

庭積祿料綿五千屯

大宣旨

是謂大宣旨、〇西宮記同ジ、

左大史坂上經行仰傍、大辨平朝臣時望傳宣、右大臣(仲平)宣、今日踏歌庭積祿綿、以大宰府所進內、在下充行者、

承平五年正月十六日　少錄麻績幹時奉

是謂口宣、〇西宮記同ジ、

大宰府貢進ノ綿ヲ用フ

口宣

十八日、癸丑、賭弓、

本殿ニ還御アラセラル

五度ヲ限トス

〔西宮記〕正月下賭弓　承平(前年)五年正月十八日、有賭弓、兵衞四度射間、上還御本殿、以五度可限之由、被仰大將、右大將保忠也云々、賭弓之間、入御時、射手垂袖跪、若可經程、頭召藏人、進上卿、下仰可令奉仕之由云々、

〔西宮記〕〇二前田家本正月下十八日賭弓　承平五年正月十八日云々、四度右勝、大將行酒、召不在座、將及兵衞佐執瓶、中將正明朝臣喚之、此間上還御、使藏人頭師輔朝臣仰、五度爲限、左勝、奏龍王云々了、良久、右大將、使左少將師氏奏的付、依昇殿者乎、前例令職仕(事)奏之、吏部記、

〔西宮記〕〇恆例一前田家正月大永鈔本十八日賭弓　承平(五)三年、唯舞求子、又數盃之後、差舞樂アリ

湯漬ヲ差ム

詩題

湯漬云々、

二十二日、己巳、元利親王ノ第火アリ、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　同廿二日(正月)、夜、上東門北、富小路東、元利親王家失火、

二十三日、戊午、內宴、右大臣仲平ヲ從二位ニ敍ス、

〔日本紀略〕朱雀院　正月廿三日、戊午、內宴於仁壽殿、題云、鶯聲遠逐風、

〔公卿補任〕五　右大臣從二位藤仲平、六十一、左大將、正月廿三日從二位、內宴次、

〔西宮記〕正月中七日節會　承平五年正月廿四日九記云、自殿(忠平)仰云、昨日位記在何處歟、延喜十六年春、敍二位、其位記令兼輔朝臣被給、然則使藏人可給者也、令申云、昨夜位記奉殿上了云々、

〔北山抄〕三內宴事拾遺雜抄上　同五年(承平)、敍左(右)大臣(仲平)從二位、〇略中此日不唱云々、

二十八日、癸亥、地震、

〔扶桑略記〕二十五裏書朱雀天皇　同廿八日(正月)、癸亥、地震、

〇地震ノコト、四年十月十九日ノ條、及ビ本年二月十九日ノ條ニ見ユ、

二月小　丙寅朔盡

二日、丁卯、烏ノ怪ニ依リテ、御トヲ行フ、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　二月二日、辨官梁上烏成巣、有御占、

五日、庚午、政アリ、

〔北山抄〕七　内印之事　都省雑事　上卿許諾、横挿内案書杖覽之、〇註略ス、若内侍不候、令藏人申代、承平五年二月五日、代又有障上、令藏人奏歟有疑、

八日、癸酉、虹、辨官廳ニ見ハル、ニ依リテ、御トヲ行フ、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　同八日、癸酉、申刻虹立辨官廳砌下、有御占、

十九日、甲申、地震、

〔扶桑略記〕二十五裏書　朱雀天皇　二月十九日、戊刻地震、

同廿日、午刻地震、

〇二十日ノ地震、便宜合敍ス、地震ノコト、正月二十八日ノ條、及ビ四月十五日ノ條ニ見ユ、

二十三日、戊子、除目、

〔公卿補任〕五

參議正四位下源清蔭、五十二、二月廿三日兼右衞門督、

藤伊衡、六十、二月廿三日兼美乃權守、

橘公頼、五十九、二月廿三日兼太宰權帥、

藤當幹、七十二、治部卿、二月廿三日兼近江權守、

從四位下藤師輔、二十八、二月廿三日任、右權中將如元、元藏人頭、

〔公卿補任〕五　承平七年　參議從四位上藤顯忠、四十、同五二十三（廿カ）兼内藏頭、

〔公卿補任〕五　天慶二年　參議正四位下源高明、二十六、同五二廿三大藏卿、

〔公卿補任〕五　天慶四年　參議從四位上源庶明、三十九、同五二廿三兼丹波權守、

〔公卿補任〕五　天慶七年　參議從四位上藤師氏、三十二、同五二廿三兼近江權介、

〔公卿補任〕五　天慶八年　參議從四位下藤師尹、二十六、二月廿三日侍從、

〔公卿補任〕五　天暦元年　參議從四位下小野好古、六十四、同五二廿三兼備前權介、

〔公卿補任〕五　天暦六年　參議從四位上藤朝忠、四十三、承平五二廿三左近權少將、

〔公卿補任〕五　天暦八年　參議正四位下源兼忠、五十四、同五二廿三兼大和權介、

〔公卿補任〕五天暦九年　参議従四位上藤有相、四十八、同(承平)五二廿三摂津守、

〔公卿補任〕五天徳二年　参議正四位下源自明、四十八、同(承平)五二廿三伊與守、

〔職事補任〕朱雀院藏人頭　右近中將従四位下藤敦忠　承平五二廿八補、〇公卿補任、三十六人歌仙傳三月八日ニ作ル、

〔三槐抄〕下裏書　諸道得業生多任北陸山陰道、而任東海道例、

承平五年二月除目

参川權掾藤原董文、明經得業生、

〔西宮記〕二〇前正月下田家本　過正月後、行外官除目例

同(承平)五年二月廿三日、

〔敍位除目執筆抄〕承平五二廿一縣召、廿四日入眼、執筆、

〇藤原敦忠、同董文等ノ任官、便宜合敍ス、

二十九日、甲午、皇太后、延暦寺ニ於テ、大般若經ヲ供養アラセラル、

〔日本紀略〕朱雀院　二月廿九日、皇(穆子)太后宮、於天台山供養大般若經、

是月、故左大臣藤原時平ノ室廉子女王卒ス、

〔日本紀略〕朱雀院　二月某日、故(時平)本院左大臣室(廉子)家卒、

〔西宮記〕二〇前正月下田家本　十八日賭弓　吏部記云、承平六年正月廿二日、賭弓、

〇註略ス、右大將保忠奏諸衞奏、件卿重喪也、而因左大將不參奏云々、

〔公卿補任〕四延喜十四年　参議従四位上藤保忠、廿三、故左大臣時平公一男、

母一品式部卿本康親王女、従四位上康子(廉)女王、

〔本朝皇胤紹運錄〕

本康親王

廉子女王

〔尊卑分脈〕藤氏冬嗣孫

時平

保忠　母本康親王女、廉子、

〇廉子女王、賀算ノコト、便宜左ニ附載ス、

〔紀貫之集〕三　同年(承平六年)の夏、八(保忠)條右大將の北方、本(時平)院の北方(廉子)七十賀し給ふ時

の屏風の歌、大將仰給ふ時に、人の家(の脫カ)松、

かはらすもみゆる松かなうへしこそ久しきことのためし成けれ

藤花

大納言藤原保忠ノ室其姑廉子女王ノ七十賀ヲ行フ紀貫之ノ屏風ノ歌ヲ詠ズ

名殘をはまつにつけても百年の春のみなとにさける藤なみ

四月神祭　氏神祭

まつる時さきもあふかな卯花は猶氏神の花にそ有ける

山里　花橘

草も木もしけき山へはくる人の立よるかけのしるへ成けり

人の家の橘

年ことにきつゝ聲する時鳥はなたちはなやまつに有らん

瀧

白雲やなかるゝとのみみえつるは落くる瀧のつねにそ有ける

野花

秋の野のちくさの花は女郎花ましりておれる錦成けり

山の月

草木みなもみちすれとも照月の山のはゝよにかはらさりけり

水邊菊

きくの花ひちてなかるゝ水にさへ浪のしはなき宿にそ有ける

河のほとりに鶴むれたる、

河のせに靡くあしたつおのか世を浪とゝもにや君によすらん

人の家の竹

千世もたる竹の生たる宿なれはちくさの花は物ならなくに

○本書、廉子女王ノ賀算ヲ、承平六年夏ニ係ク、恐ラクハ誤ナラン、

平將門、伯父常陸大掾平國香及ビ源護ト常陸ニ戰ヒテ、之ヲ敗リ、火ヲ放チテ五百餘戸ヲ燒ク、國香之ニ死ス、

〔皇代曆〕二朱雀天皇　將門合戰狀云、

始伯父平良兼與將門合戰、次被語平眞樹、承平五年二月日、與平國香幷源護合戰、

〔將門記略〕夫聞、彼將門者、天國押撥御宇柏原天皇五代之苗裔、三世高望王之孫也、其父陸奥鎮守府將軍平朝臣良持也、舍弟下總介平良兼朝臣、將門之伯父也、而良兼以去延長九年、聊依女論、舅甥之中既相違云々、

〔將門記〕○端闕ク、裏等野本［　］扶等張陣、相待將門、遙見彼軍之體、所謂、向纛崛之神、靡（旗カ）諶擊鉦、纛崛者兵具也、以獸毛作之、鉦者兵鼓也、諺云布利豆々美也、爰將門欲罷不能、擬進無由、然

將門伯父平良兼ト戰フ
良兼平眞樹ヲ誘フ
始メ將門女事ニ依リテ良兼ト爭フ
源扶等張陣ヲ將門ヲ待テリ

而勵身勸據、交及合戰矣、將門幸得順風、射矢如流、所中如案、扶等雖勵、終以負也、仍亡者數多、存者已少、以其四日、始自野本、石田、大串、取木等之宅、迄至與力人々之小宅、皆悉燒巡、□□□□之中、千年之貯、伴於一時炎、又筑破眞壁、新治、三箇郡伴類喚、□□□□□□□遁火出者、驚矢而還、入火中叫之舍宅、五百餘家、如員燒掃、哀哉、男女爲火成薪、珍財爲他成分、三界火宅、財有五主、去來不定、若謂之歟、其日火聲論雷施響、其時煙色爭雲覆空、山王交煙隱於巖後、人宅如灰散於風前、國吏萬姓、視之哀慟、遠近親疎、聞之歎息、中箭死者、不意別父子之中、棄楯遁者、不圖離夫婦之間、就中、貞盛進身於公、事發以前、參上於花城、經廻之程、具由聞於京都、仍彼君案物情、貞盛寔與彼前大掾源護幷其諸子等、皆同黨之者也、然而未躬與力、偏被編其緣坐、嚴父國香之舍宅、皆悉殄滅、其身死去者、迥聆此由、心中嗟嘆、於財有五主者、何憂吟之、但哀亡父空告泉路之別、存母獨傳山野之迷、朝居聞之、淚以洗面、夕臥思之、愁以燒胷、貞盛不任哀慕之至、申暇於公、歸於舊鄉、僅著私門、求亡父於煙中、問遺母於巖隈、幸雖預司馬之級、還吟別鶴之傳、方今以人口、尋得偕老之友、以傳言問取連理之徒、烏呼哀哉、著布冠於綠髮、結菅帶於藤衣、冬去春來、漸失定省之日、歲變節改、僅

將門扶等ト戰ヒテ之ヲ敗ル

平貞盛入京シテ聞スト盛源上

貞盛護ト將門國香ノ第ニ燒ク

貞盛父國香ノ遺骸ヲ灰燼中ニ求ム

遂周忌之願、〇下略、將門、平良正ト戰フコトニカ、ル、十月二十一日ノ條ニ收ム、

〔今昔物語〕二十五　平將門發謀反被誅語第一

今昔、朱雀院ノ御時ニ、東國ニ平將門ト云フ兵有ケリ、此レハ、柏原ノ天皇ノ御孫ニ、高望王ト申ケル人ノ子ニ、鎭守府ノ將軍良持ト云ケル人ノ子也、將門常陸下總ノ國ニ住シテ、弓箭ヲ以テ身ノ莊(カザリ)トシテ、多ノ猛キ兵ヲ集テ伴トシテ、合戰ヲ以テ業トス、初ハ將門ガ父良持ガ弟ニ、下總介良兼ト云フ者有リ、將門ガ父失テ後、其ノ伯父良兼ト、聊ニ不吉事有テ、中惡ク成ヌ、亦父故良持ガ、田畠ノ諍ニ依テ、遂ニ合戰ニ及ト云ヘモ、ト良兼專ニ道心有テ、佛法ヲ崇ニ依テ、强ニ合戰ヲ不好ズ、〇下略、源護ノ告狀ニ依リテ、將門等ヲ召サシムルコトニカ、ル、十二月二十九日ノ條ニ收ム、

〔神皇正統記〕朱雀天皇　此御時、平の將門といふ者あり、上總介高望か孫なり、高望は葛原の親王の孫、平の姓を給る、桓武四代の御苗裔なり、執(忠平)政の家につかうまつりけるか、使の宣旨を望み申けり、不許なるにより、いきどをりをなし、東國に下向して、叛逆をおこしき、先伯父常陸の國の大掾國香をせめしかは、國香は自殺しぬ、

〔和漢合圖拔萃〕承平五年二月二日、於常州石田館、常陸大掾平國香、與相馬小次郎將門合戰、于時國香被討畢、國香桓武天皇五代後胤、平家元祖也、

將門、始メ忠平ニ仕フ

將門良兼ト不和ノ原因

將門國香ト常陸石田館ニ戰フ

檢非違使チ望ミテ聽サレズ遂ニ叛逆ノ說ヲ圖ルト

國香自殺ス

〔和漢合符〕六 朱雀天皇　承平二年壬辰、二月、平氏將門、執政(世平)之家而望宣旨、不許也、便赴東國謀叛、先攻伯父常陸州之大掾國香、々々自殺、遂入坂東、都于下總國相馬郡、自稱平親王、故天下騷動、官軍爲討罰赴東國、平氏將門之祖、卽桓武四代之苗裔也、桓武之子葛原親王、々々子高棟賜姓平氏、其子上總介高望、高望乃將門之祖也、

下總相馬郡ニ居住ス

〔神皇正統錄〕上 朱雀院　同歲(承平二年)、相馬小次郎平將門、東國ニ於テ叛逆ヲ企、伯父常陸大掾平國香ヲ滅而關東ヲ從ヘ、下總國相馬郡ニ居住而、平親王ト自稱ス、是桓武天皇六代ノ孫、鎭守府將軍良將之次男也、

平國香ノ傳

〔源平盛衰記〕一　平家繁榮幷得長壽院導師事

桓武天皇第五皇子一品式部卿葛原親王九代ノ後胤讚岐守正盛孫、刑部卿忠盛嫡男ナリ、彼親王ノ御子高見王、無官無位ニシテ失給ケリ、其御子高望王ノ時、寬平元年五月十二日、始テ平姓ヲ賜テ、上總介ニ成給ショリ以來、忽王氏ヲ出テ人臣ニ連ル、其子鎭守府將軍良望、後ニハ常陸大掾國香ト改ム、國香ヨリ貞盛、經(維)衡、正度、正衡、正盛ニ至マテ、六代ハ諸國ノ受領タリトイヘ共、イマタ殿上ノ仙籍ヲハユルサス、〇上略下

初名良望

〔尊卑分脈〕平氏

高望王
- 國香　鎭守府將軍、常陸大掾、本名良望、爲將門被害、
- 貞盛　陸奥守、從四下、鎭守府將軍、號平將軍、左馬助、
- 繁盛　陸奥守、正五下、武略通神人也、母家女房、
- 兼任　下野守、

〔常陸大掾系圖〕

良望　改國香、常陸大掾、鎭守府將軍、

桓武帝第五皇子葛原親王子高見王、其子高望三男、
- 貞盛　陸奥守、鎭守將軍、世號平將軍、
- 繁盛　陸奥守、鎭守府將軍、

〔參考〕

〔新編常陸國誌〕五 眞壁郡　村落　石田(伊志陀)　中根村ノ西南ニ在リテ、筑波郡ノ界ニ接ス、其小名ヲ東谷田、西谷田、石塚、硲、宮臺、池ノ臺、宮下、池下、宮前、馬場先、西原、和田西、和田下、輕內、南輕內、中後町、鏡田、堂ノ下、寺東、原屋敷、西久保、中ノ